佐賀県文化財調査報告書第55集

尾崎利田遺跡

佐賀県神埼郡神埼町尾崎西分所在遺跡の調査

1980

佐賀県教育委員会

尾崎利田遺跡

佐賀県神埼郡神埼町尾崎西分所在遺跡の調査

１９８０

佐賀県教育委員会

序

この調査報告書は農業基盤整備事業の施行に先がけまして、国庫補助金を得実施しました埋蔵文化財発掘調査のうち、神埼町尾崎西分に所在します尾崎利田遺跡の報告であります。

尾崎利田遺跡は弥生時代より鎌倉時代にかけて、多様な遺構が検出されました。特に平安時代後半より鎌倉時代の遺構、遺物については見るべきものがあり、この時代の佐賀平野の文化を解明する上で重要な意味を持つものと考えられます。

なお調査に関しまして御指導、御協力を賜わりました文化庁、県農林部、並びに地元の関係者各位に対しまして深謝申し上げます。

おわりに、本書が埋蔵文化財に対する認識と理解および古代、中世史の解明に少しでも役立つならば幸甚であります。

昭和55年3月31日

佐賀県教育委員会

教育長　古　藤　　浩

例　　言

1　本書は昭和53年度実施した尾崎利田遺跡Ⅴ区、Ⅵ区の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は国庫補助を受け、佐賀県教育委員会がこれにあたった。

3　本書の執筆は次のとおりである。

Ⅰ 1	原　田　保　則、天　本　洋　一
2	天　本
Ⅱ 1 (1)・(3)・(5)・(6)	天　本
(2)・(3)・(4)	多々良　友　博
(7)・(8)	神　代　京　子

2の遺物は、SB、SDは多々良、SE、SKは天本、SJ、SPは神代

4　遺構の実測は調査員、調査補助員があたり、遺物の実測は古賀啓子、神代京子、高山久美子、西村信子、永ノ間ひとみがあたった。製図は神代、山本タカ子がおこなった。遺構写真は天本、多々良が、遺物写真は天本、原口定がおこなった。

5　編集は天本、多々良が担当した。

凡　　例

1　遺構については一連番号を付し、SB：住居跡、掘立柱建物跡、SD：溝、SE：井戸、SK：土壙、SJ：甕棺墓、SP：土壙墓の分類記号を用いた。

2　遺構番号の100番台の数字は5がⅤ区、6がⅥ区を表わす。又遺構実測図の標高はⅤ区が6.50m、Ⅵ区が6.25mである。

3　遺構の寸法数字はm、遺物はcmである。

4　遺物実測図番号と図版遺物番号は同一である。

本　文　目　次

I　序説

1　発掘調査の経過……1

(1)確認調査……1

(2)昭和52年度の調査と遺構の概要……1

(3)昭和53年度の調査と発掘調査団の構成……1

2　遺跡の立地と環境……2

(1)自然的環境……2

(2)歴史的環境……2

II　尾崎利田遺跡の遺構と遺物……5

1　遺　　構……5

(1)遺構の概要……5

(2)住居跡……9

(3)掘立柱建物跡……15

(4)溝……17

(5)井　戸……19

(6)土　壙……23

(7)甕棺墓……24

(8)土壙墓……24

2　遺　　物……25

III　総　　括……57

挿　図　目　次

第１図　尾崎利田遺跡周辺遺跡分布図……3
第２図　尾崎利田遺跡調査区配置図……6
第３図　尾崎利田遺跡遺構配置図……折り込み７・８
第４図　SB501住居跡実測図……9
第５図　SB502住居跡実測図……10
第６図　SB503住居跡実測図……11
第７図　SB504住居跡実測図……11
第８図　SB505住居跡実測図……12
第９図　SB506住居跡実測図……13
第10図　SB507住居跡実測図……14
第11図　SB508住居跡実測図……14
第12図　SB601掘立柱建物跡実測図……16
第13図　SB602掘立柱建物跡実測図……16
第14図　SD604・605溝、SE606井戸断面土層図……18
第15図　井戸Ⅰ類～Ⅲ類断面図……19
第16図　井戸実測図……21
第17図　井戸実測図……22
第18図　SJ501・502甕棺墓実測図……24
第19図　SP501土壙墓実測図……24
第20図　SB502・504・506住居跡出土土器実測図……26
第21図　SB507住居跡出土土器実測図……27
第22図　溝出土土器・磁器・滑石製品実測図……29
第23図　SD605溝出土土器実測図……31
第24図　SD605溝出土陶磁器・滑石製品実測図……32
第25図　SD605溝出土土器・滑石製品実測図……33
第26図　SD606溝出土土器実測図……35
第27図　SE503～506井戸出土土器実測図……37
第28図　SE507井戸出土土器実測図……39
第29図　SE508～513井戸出土土器・磁器実測図……41
第30図　SE517井戸出土土器実測図……43

第31図　SE518～528井戸出土土器・磁器実測図 ……45
第32図　SE532井戸出土土器実測図……46
第33図　SE603・604井戸出土土器実測図 ……47
第34図　SE604井戸出土陶磁器・滑石製品実測図……49
第35図　SE605・608井戸出土土器・磁器実測図 ……51
第36図　SE609井戸出土土器・陶磁器実測図……52
第37図　土壙出土土器・磁器実測図……55
第38図　甕棺墓・土壙墓出土土器・磁器実測図……56
第39図　尾崎利田遺跡出土土器編年表……折り込み61、62

図　版　目　次

本文対称頁

図版 1　1 尾崎利田遺跡Ⅴ区全景（北側より）…… 5
　　2 尾崎利田遺跡Ⅴ区全景（西側より）…… 5
図版 2　1 尾崎利田遺跡Ⅵ区全景（北側より）…… 5
　　2 尾崎利田遺跡Ⅵ区全景（西側より）…… 5
図版 3　1 SB502住居跡…… 9
　　2 SB503住居跡……10
図版 4　1 SB504住居跡……10
　　2 SB505住居跡……12
図版 5　1 SB506住居跡……12
　　2 SB507住居跡……13
図版 6　1 SB601掘立柱建物跡……15
　　2 SB602掘立柱建物跡……15
図版 7　1 ～ 8 SB601・602建物柱穴 ……15
図版 8　1 SD604・605溝 ……18
　　2 SD605溝遺物出土状況……18
　　3 SD601溝……17
図版 9　1 SE506井戸……19
　　2 SE509・510井戸 ……19
図版10　1 ～ 8 SE井戸 ……19

図版11　1 S E604井戸 ……19
2 S E605井戸 ……19
3 S E608・609井戸……19
図版12　1～8 S K土壙……23
図版13　1 S J501甕棺墓……24
2 S J502甕棺墓 ……24
3 SP501土壙墓 ……24
図版14　SB502・503・504・506住居跡出土土器……25
図版15　SB507住居跡、SD501・602・603・604・605溝出土土器・磁器 ……27
図版16　SD605溝出土土器・磁器……28
図版17　SD605溝出土土器……28
図版18　SD605・606・608溝出土土器・磁器・滑石製品……34
図版19　SE505・506・507井戸出土土器……36
図版20　SE507井戸出土土器……36
図版21　SE508・509・510・512・513井戸出土土器……38
図版22　SE517井戸出土土器……40
図版23　SE520・526・527・532井戸出土土器 ……42
図版24　SE604井戸出土土器・磁器・滑石製品……47
図版25　SE605・608・609井戸出土土器・陶磁器……48
図版26　SK514・520・603・608土壙、SP501土壙墓出土土器・磁器 ……53

表　目　次

第1表　掘立柱建物跡計測表……17
第2表　井戸一覧表……22
第3表　土壙一覧表……23

Ⅰ　序　　説

1　発掘調査の経過

(1)　確認調査

神埼町大字尾崎一帯の水田が、昭和52年度の農業基盤整備事業が計画されたため、埋蔵文化財確認調査を昭和52年３月実施した。この結果農業基盤整備計画面積約43haに対して35,000㎡の遺跡の所存が確認された。このため農林部と設計協議を重ね、事業地区の北側については盛土工法で行うこととなったが、南側については給排水の関係で盛土工法がとれず遺構が削平を受ける約10,000㎡について発掘調査を行うこととなった。

(2)　昭和52年度の調査と遺構の概要

今回調査対象となった尾崎利田遺跡は尾崎西分集落の西側、佐賀市との境界ぞい約10,000㎡である。調査区を便宜上Ⅰ～Ⅵ区とⅪ区に地区設定し、Ⅰ～Ⅳ区とⅪ区約7,000㎡を昭和52年７月下旬から53年２月下旬にかけて、Ⅴ～Ⅵ区を昭和53年５月から９月上旬にかけて調査した。昭和52年度の調査は原田保則が主としてあたり中島弘之、掘川義英の応援があった。以下Ⅰ～Ⅳ区、Ⅺ区の遺構概要を述べる。

Ⅰ区　溝７、井戸９、竪穴住居跡１、柱穴群などを検出した。井戸は全て枠組がなく、内部より中国製輸入磁器などを出土した。竪穴住居跡は古墳時代の造営で、平面形は隅丸方形、床面より土師器高杯などが出土した。柱穴群は調査区のほぼ中央にあり柱穴は直径30cm程である。土壙のうちP―69からは土師器小皿、杯などが一括して出土している。その他瓦器碗が多く、木製の下駄も出土した。

Ⅱ区　溝６などを検出した。溝は調査区南側から多く検出した。遺物は織機の一部と見られる木製品がある。

Ⅲ区　溝６、井戸12、土壙墓６などを検出した。井戸12基のうち１基は古墳時代の井戸、他は古代末～中世の井戸で２基に木製の井戸枠が残っている。土壙墓は２基が石蓋土壙墓で時期は不明、他の土壙墓からは白磁碗、漆器を副葬したものがある。

Ⅳ区　溝５、井戸８、柱穴群３ヵ所を検出した。井戸には１基だけ木製の井戸枠があり、また木製が箸が出土した。

Ⅺ区　溝４、井戸７、土壙墓４、竪穴住居跡３などを検出した。井戸の３基には木製の井戸枠が残っており、その中の１基は方形の井戸枠で内部から漆器が出土した。土壙墓はともに平安時代と推定され、１基には黒色土器が副葬されていた。竪穴住居跡は隅丸方形で、土師器の高杯、甕が出土した。

(3)　昭和53年度の調査と発掘調査団の構成

53年度は残るV区、VI区について調査を行なった。V、VI区はI～V区の南側、XI区の西側にあたる畑部分約3,000㎡である。発掘調査団の構成は下記の通りである。

担　当	佐賀県教育委員会
事務局	佐賀県教育庁文化課
調査主任	木下　巧　文化課文化財調査第2係長
調査員	天本洋一　文化課文化財調査第2係
〃	多々良友博　〃　〃
調査補助	熊谷邦巨
	堤　安信（別府大学文学部学生）沢田宗順（同）
協　力	県農林部・中部農林事務所・神埼町教育委員会・神埼町土地改良課・尾崎西分区、松尾建設

2　遺跡の立地と環境

(1)　自然的環境

神埼町は佐賀県の東部に位置し、東は田手川を隔て三田川町に、西は佐賀市と接している。北部には背振山系が東西に連なり、南部は広大な佐賀平野が広がりさらに有明海に面している。佐賀平野の東部は背振山地の南麓より吉野ヶ里丘陵、横田丘陵などの洪積台地が南へ舌状に延びているが、中央部は城原川や川上川などの河川が形成した扇状地が複合している。扇状地の下流域には三角州が広がり、三角州の周辺にはクリークが多く分布している。尾崎利田遺跡は扇状地の扇央部に位置し、標高6～7mである。この地域は水田、畑地として利用される肥沃な稲作地帯である。

(2)　歴史的環境

神埼町の縄文時代の遺跡は、押型文土器が朝日西南や城原、日の隈山西方などより、また阿高式土器が岩田より、御領式土器が朝日西南より採取されているが顕著な遺跡は知られていない。

ところが弥生時代に入ると遺跡の数が増える。当地方で逸速く注目されたのは荒堅目貝塚である。貝塚は馬場川と田手川により形成された自然堤防上にある弥生時代前期を主体とする遺跡で、石剣、石包丁、把頭飾などを出土している。弥生時代の集落跡として代表的なものは三田川町との境界を南に延びる丘陵上にある吉野ヶ里丘陵遺跡や、川寄遺跡群、利田遺跡群がある。また埋葬遺跡は前期の甕棺墓を主体とする四本黒木遺跡、中期の甕棺墓を主体とする利田柳遺跡、二子甕棺遺跡がある。

古墳時代に入ると神埼地方にも数多くの古墳が築かれた。神埼町で最古期の古墳として知ら

第１図　尾崎利田遺跡周辺遺跡分布図

１尾崎利田遺跡	２横小路遺跡	３尾崎土生遺跡	４野田遺跡	５こだかじま遺跡
６伏部大石遺跡	７川寄若宮遺跡	８川寄吉原遺跡	９利田柳遺跡	10利田黒木遺跡
11熊谷遺跡	12二子甕棺遺跡	13四本黒木遺跡	14日ノ隈山烽跡	15丸山前方後円墳
16帯隈山神墳群	17帯隈山古墳群	18天神尾古墳群	19猿獄古墳群	20湯原古墳群
21勢福寺城跡	22城山古墳群	23朝日古墳群	24伊勢塚前方後円墳	25三津永田遺跡
26吉野ヶ里丘陵遺跡	27荒堅目貝塚	28横武城跡	29姉川城跡	30白石原遺跡

れるのは日の隈寮西側古墳があり、小規模の竪穴式石室を内部主体とする。また朝日古墳は碧玉岩製石釧1個と変形四獣仿製鏡1面を出土した。

前方後円墳として知られるのは伊勢塚古墳と丸山前方後円墳がある。特に伊勢塚古墳は全長78.7mと県内でも屈指の前方後円墳で、後円部に花崗岩の巨石をもって構築された長さ約12mの横穴式石室がある。また墳丘より人物埴輪や円筒埴輪が出土している。

古墳時代も終末になると小規模の横穴式石室を内部主体とする群集墳が山麓一帯に築かれ、天神尾古墳群、猿岳古墳群は著名である。

飛鳥～奈良時代に入ると天童山（帯隈山）神籠石が築かれる。これは佐賀市の帯隈山より神埼町の天童山にかけて列石を巡らしており山城跡とされる。肥前風土記には「神埼郡、郷玖所、里廿六、驛壹所、烽壹所、寺壹所……」とあり、郡家は地名より神埼ヶ里付近が推定され、烽は地名の位置より標高 163mの日の隈山に設けられたと推定される。条里制は平野部全域にわたり施行されたと見られ、石井ヶ里、小津ヶ里、野目ヶ里などの遺名が残っている。

平安時代には各地で荘園が発達するが神埼地方では「仁明天皇承知三年十月癸亥、肥前国神崎郡空閑地六百九十町、為勅旨田、」と「類聚國史」にあり690町が勅旨田として設定されていることが知られる。この地は神埼郡千代田町周囲が考えられているが、さらに豪族や名主の土地寄進により荘域を広め、やがて神埼郡の大半が勅旨田となっている。当時宋との貿易は、大宰府の管理のもとに鴻臚館で行われていたが、すでに神崎荘内にも宋船が来航していたと考えられ、神崎荘の預所である平忠盛が地位を利用して宋との貿易を手中に収めていたと見られる。

中世に入ってからも神崎荘は皇室領荘園として持続したが、文永、弘安の役後には御家人等への恩償付与として神崎荘のほとんどが配分されている。しかしそれは土地に対する権益としての地頭職の配分であり、引き続き皇室領荘園として持続した。神崎荘ではこの時代も日宋貿易の拠点であった。尾崎利田遺跡より出土する多くの中国製磁器は、このことを物語る資料である。また尾崎部落内では今でも尾崎人形が製作されている。この尾崎焼きは元寇の蒙古人の手すさびによるとされるが、尾崎利田遺跡出土の多量の土器が示すように、尾崎人形製作の基礎は平安時代末にはすでにできていたと推察される。

参 考 文 献

佐賀県史編纂委員会「佐賀県史」上巻1978年
神埼町史編纂委員会「神埼町史」1972年
松尾禎作　「佐賀県考古大観」1957年祐徳博物館
瀬野精一郎「神埼國神埼荘史料」1975年吉川弘文館

II　尾崎利田遺跡の遺構と遺物

1　遺構

(1)　遺構の概要

尾崎利田遺跡は佐賀県神埼郡神埼町大字尾崎字利田に位置する。この地は城原川や巨勢川などの河川により形成された扇状地上にあり、肥沃な水田地帯が広がっている。この水田地帯の数ヵ所に、水田面より0.5～1.0m程小高い畑部分が点在している。昭和51年度点在する畑を１ヵ所に集めたり、１区画の水田を３～６アールとする圃場整備が計画された。このため遺構が削平される部分について文化財発掘調査を行うこととなり、Ⅰ区～Ⅳ区、Ⅺ区については昭和52年度、Ⅴ区、Ⅵ区については昭和53年度行った。今報告は昭和53年度行ったⅤ区、Ⅵ区について行う。

Ⅴ区、Ⅵ区の位置は、尾崎西分集落の西方、佐賀市との境界沿にあり、昭和52年度調査を行ったⅠ～Ⅳ区の南側、Ⅺ区の西側にあたる約3,000㎡である。この地は元々畑地で、標高6.8m前後であり、Ⅴ区とⅥ区との間には谷間状に水田が入り込んでおり、この部分は遺構面までは削平を受けないことがわかり調査範囲より除外している。この谷間状の水田から東側をⅤ区、西側をⅥ区と呼称する。

検出された遺構は住居跡、掘立柱建物跡、土壙、溝、甕棺墓、土壙墓である。

住居跡は竪穴住居跡で、平面形はすべて方形である。時期は弥生時代の住居跡１棟、古墳時代の住居跡３棟、時代不詳の住居跡が４棟である。ＳＢ508は幅広い溝が方形にめぐるが、柱穴が確認できないことから住居跡でない可能性がある。

掘立柱建物跡はⅤ区から８棟、Ⅵ区から２棟の10棟を確認した。Ⅴ区には多数の柱穴があり、さらに増加することも考えられる。規模は１間×１間の建物が３棟、１間×２間の建物が２棟、１間×３間の建物が１棟、２間×２間の建物が４棟である。柱穴からの出土遺物はＳＢ601・ＳＢ602から土師器、瓦器の小片が出土したのみで、建物の時期は正確には断定できない。

井戸はⅤ区から32基、Ⅵ区から９基の41基が出土した。平面形は円形、深さは平均1.1mと浅いが豊富な湧水があったと見られる。井戸枠の出土は一例もない。ＳＥ507・ＳＥ517・ＳＥ604などからは土師器、瓦器、磁器など豊富な遺物が出土した。

土壙はⅤ区から28基、Ⅵ区から12基の40基が出土した。平面形は円形、方形、孤状などさまざまである。ＳＫ503は弥生時代中期、ＳＫ505・507・508・530・604は古墳時代、他は10～13世紀である。

溝はⅤ区から６ヵ所、Ⅵ区から８ヵ所の14条を検出した。Ⅴ区の溝は出土遺物も少なく、性格の不明なものが多いが、Ⅵ区の溝からは多くの土器が出土した。特にＳＤ605は土師器、瓦器、

第2図　尾崎利田遺跡調査区配置図

SD606
SE605
SE601
SK601
SD603
SE602
SK603
SE604
SD601
SE603
SD602
SD608
SK605
SE607
SK604
SE609
SE608
SK607
SK606
SD604
SD607
SE606
SK608
SD605
SK610
SK611
SK612
SB601
SB602
SK613
SE528
SE529
SJ502
SK522
SK531
SE518
SJ501
SK521
SK532
SK526
SB505
SE517
SK503
SK502
SK501
SE501
SK506
SK504
SD605
SE521
SE522
SD504
SB516
SD502
SD501
SK505
SE502
SE503
SE504
SK520
SB515
SE516
SE515
SE505
SE526
SE523
SB508
SK507
SK508
SE507
SE527
SB511
SD503
SE524
SB504
SE506
SB513
SB502
SE525
SE519
SK527
SD506
SP501
SB512
SE509
SE510
SK509
SK512
SK530
SK535
SE511
SB509
SK513
SE508
SE532
SB507
SE520
SB503
SK523
SK529
SE530
SE512
SK515
SK528
SB506
SK519
SE513
SK533
SB510
SK514
SE514
SB501
SE531
0
10m

第３図　遺構配置図

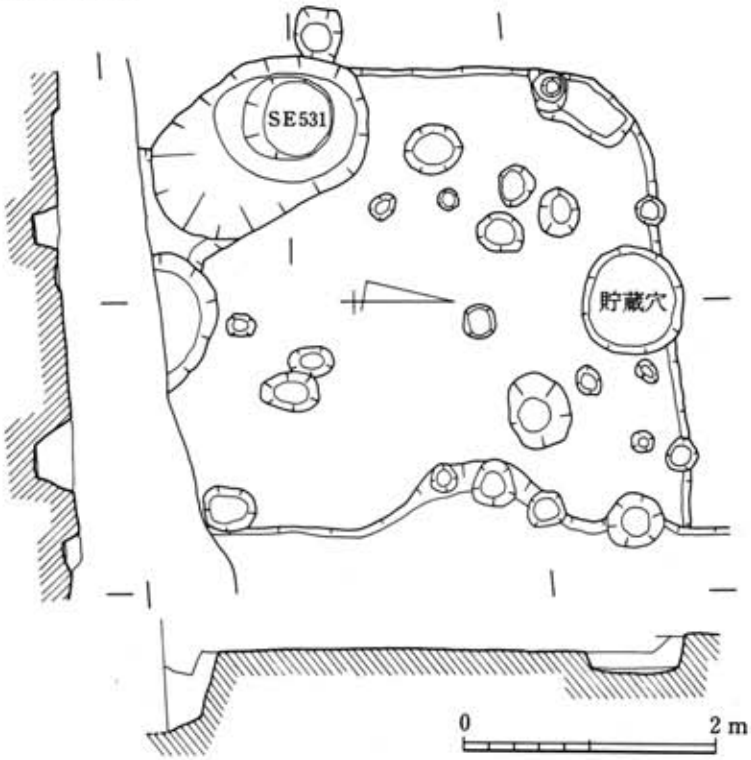
磁器など豊富な遺物が出土した。

甕棺墓はV区北西端から2基出土した。単棺と合口棺で、弥生時代後期、西新式の甕棺である。土壙墓はV区の西端から1基出土した。土壙北西端より土師器小皿、瓦器碗、青磁碗が副葬されていた。

(2) 住居跡

ＳＢ501住居跡（第4図）

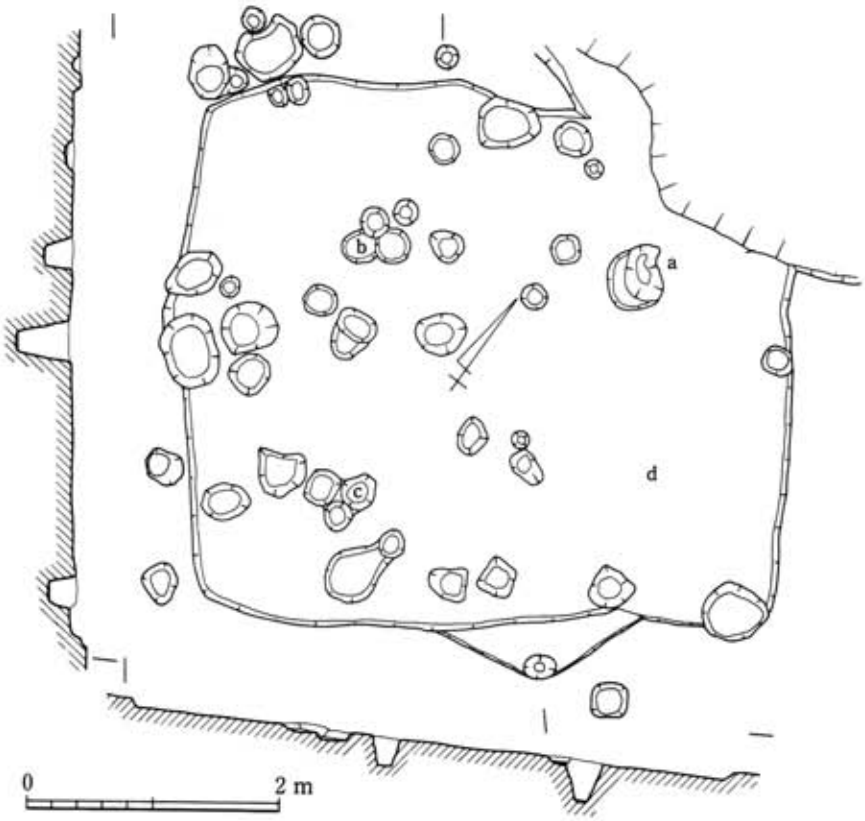
V区南東部に位置する。遺構の南部分は調査区外にあり、東部分は現在の水田に、南西隅はＳＥ531に切られている。遺存部分から平面形は方形と考えられる。主柱穴、炉等は不明である。北壁に接して、貯蔵穴状遺構が検出された。床面からの深さは0.16～0.19mである。壁溝はなく壁高は0.04～0.08mである。



第4図　ＳＢ501住居跡実測図

ＳＢ502住居跡（第5図）

V区の東部に位置する。北隅は、ＳＤ503に切られている。長軸5.0m、短軸4.36mで床面積は、18.8（推定）㎡である。主柱穴は、a（0.43×0.54m、深さ：0.34m）・b（0.22×0.24m、深さ：0.19m）・c（0.24×0.30m、深さ：0.37m）・d（推定）の4本である。a～b：2.14m、b～c：2.16mである。主軸の方位はN56°Eをとる。炉・焼土は検出されなかった。壁溝はなく、壁高は



第５図　ＳＢ502住居跡実測図

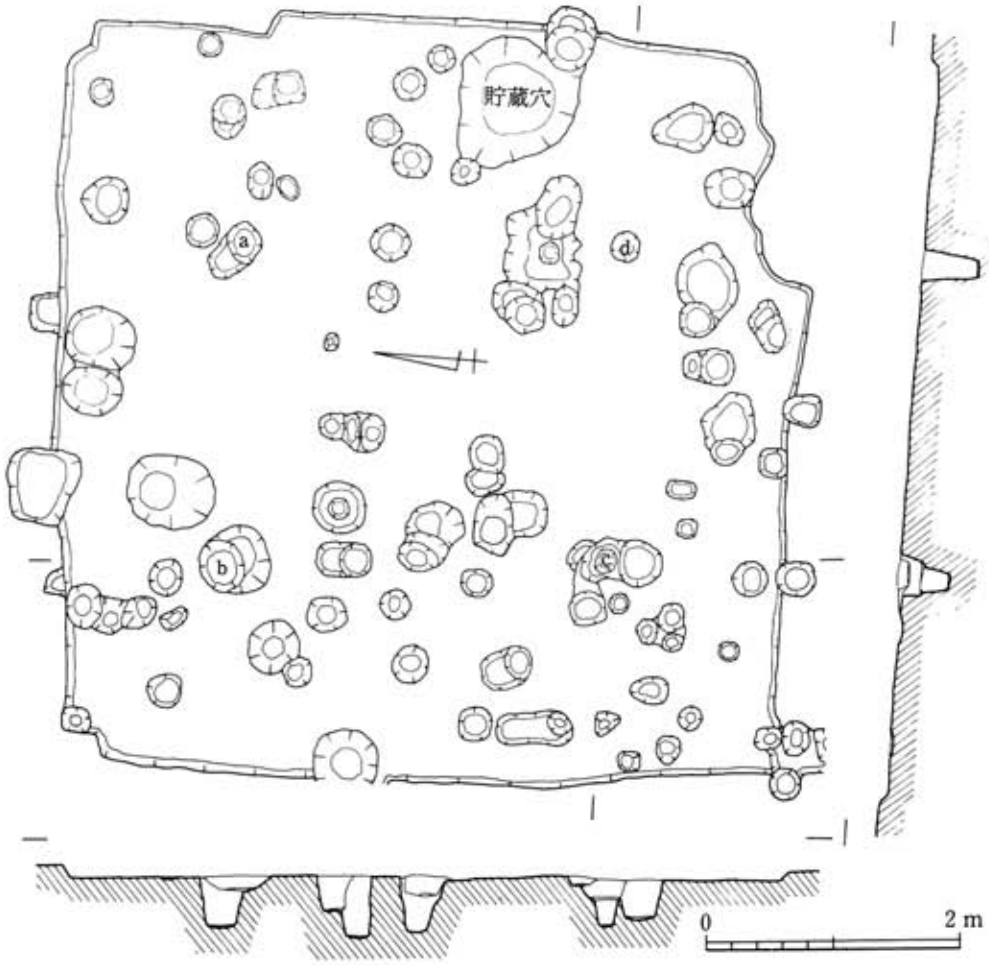
0.04～0.08mである。床面から、高杯・小形丸底壺・器台が出土した。

ＳＢ503住居跡（第６図）

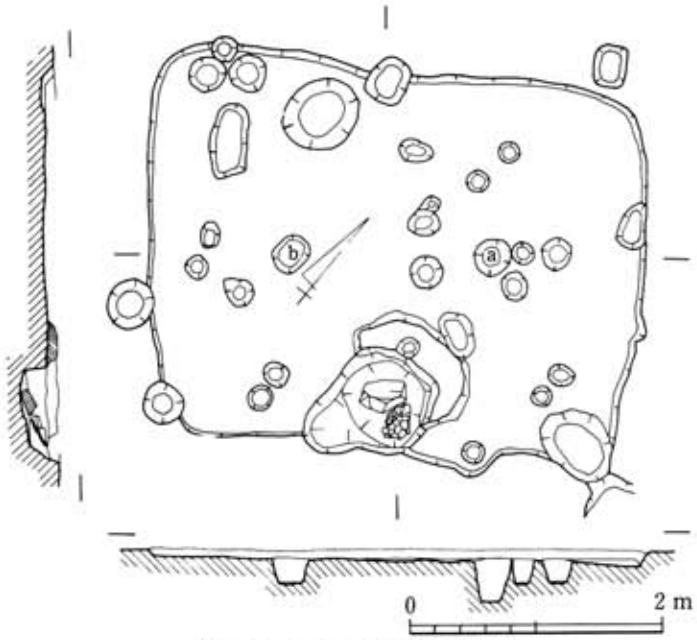
Ｖ区の南部に位置する。長軸6.04m、短軸5.80m、床面積は32.5m²である。主柱穴は、a(0.26×0.36m、深さ：0.34m)・b（0.32×0.39m、深さ:0.4m)・C（0.32×0.32m、深さ：0.44m)・d（0.23×0.24m、深さ：0.44m）の４本である。a～b：0.26m、b～c：3.0m、c～d：2.46m、d～a：2.99mである。主軸の方位はN89°Eをとる。炉は不明だが、東壁近くに0.96×1.08m、深さ0.55mほどの貯蔵穴状の遺構があり、焼土が堆積していた。壁溝はなく、壁高は2.5～8.5cmである。床面から遺物は出土しなかった。

ＳＢ504住居跡（第７図）

Ｖ区の中央部に位置する。南東壁に接して粘土におおわれた0.84×1.12m、深さ0.2mの土壙が検出された。内部には0.26×0.34mの礫がおかれているが住居跡との関係は不明である。長軸3.92m、短軸2.29m、床面積は11.3m²である。主柱穴は、a(0.28×0.30m、深さ：0.31m)・b(0.24×0.30m、深さ：0.2m）の２本である。a～b：1.58mである。主軸の方位はN39°Eをとる。炉・焼土は検出されなかった。壁溝はなく、壁高は0.03～0.07mである。床面西隅から壺が、粘土に



第６図　ＳＢ503住居跡実測図



第７図　ＳＢ504住居跡実測図

おおわれた土壙内より甕が出土した。

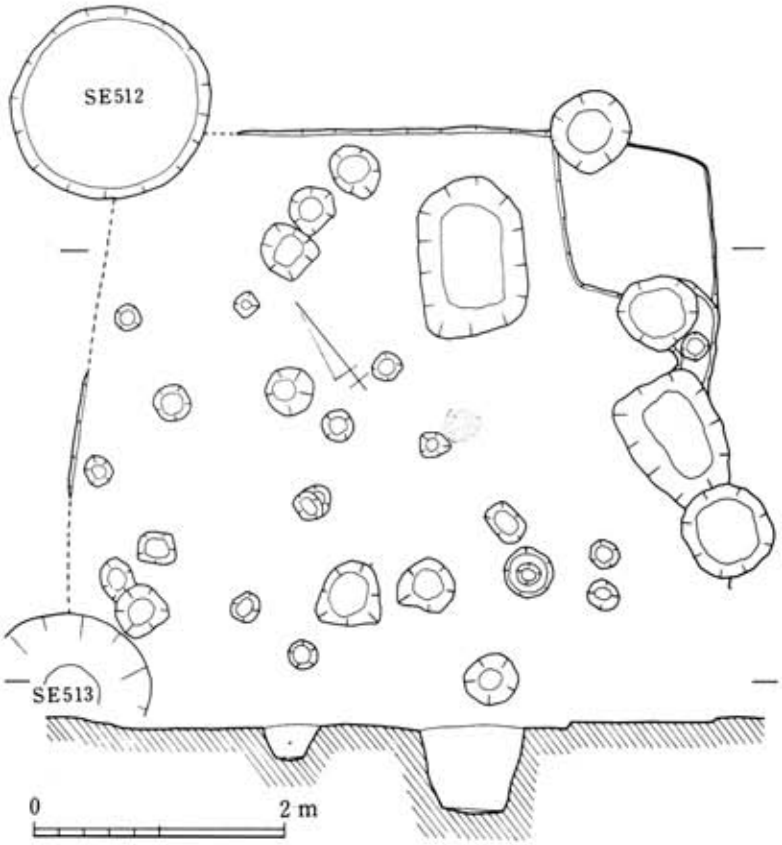
ＳＢ505住居跡（第８図）

Ｖ区の北部に位置する。南東隅はＳＥ517に、西壁は耕作によって切られている。長軸5.35m、短軸4.12m（推定）で、床面積は20.3（推定）㎡である。主柱穴は、a（0.34×0.36m、土壙床面よりの深さ：0.36m）・b（40×0.51m、深さ：0.58m）・c（0.38×0.46m、深さ：0.50m）・d（0.26×0.26m、土壙床面よりの深さ：0.21m）の４本である。a～b：2.5m、b～c：2.18m、c～d：2.58m、d～a：2.22mを計る。主軸はＮ１°Eをとる。炉・焼土は検出されなかった。壁溝はなく、壁高は４～11cmである。西壁に沿って0.77×2.22m、深さ0.1mほどの土壙が検出された。床面の東半分近くを占める2.14×3.74m、深さ0.15～0.23mほどの土壙は、住居跡に伴うと考えられる。床面から遺物は出土しなかった。床面東側土壙内埋土から、６Ｃ後半期の須恵器が出土した。

第８図　ＳＢ505住居跡実測図

ＳＢ506住居跡（第９図）

Ｖ区の南端部に位置している。南隅は調査区外にあり、北隅、西隅と推定される部分は、それぞれＳＥ512・ＳＥ513によって切られている。長軸5.04m、主柱穴は不明である。主軸の方位はN51°Wをとる。床面中央部付近に焼土が検出された。また床面北側に0.83×1.24m、深さ0.64mほどの貯蔵穴状の遺構が検出された。壁溝はなく東隅に貼り付けのベッド状遺構が認められ



第９図　ＳＢ506住居跡実測図

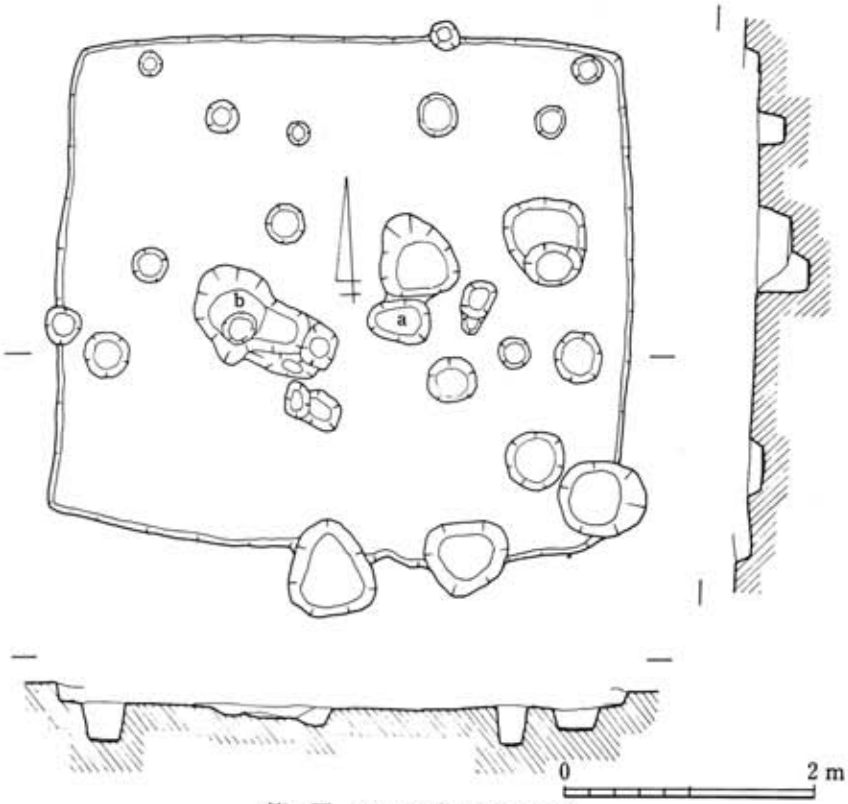
た。壁高は、残存部分で４cmほどである。床面から、小形丸底壺、鉢が出土した。

ＳＢ507住居跡（第10図）

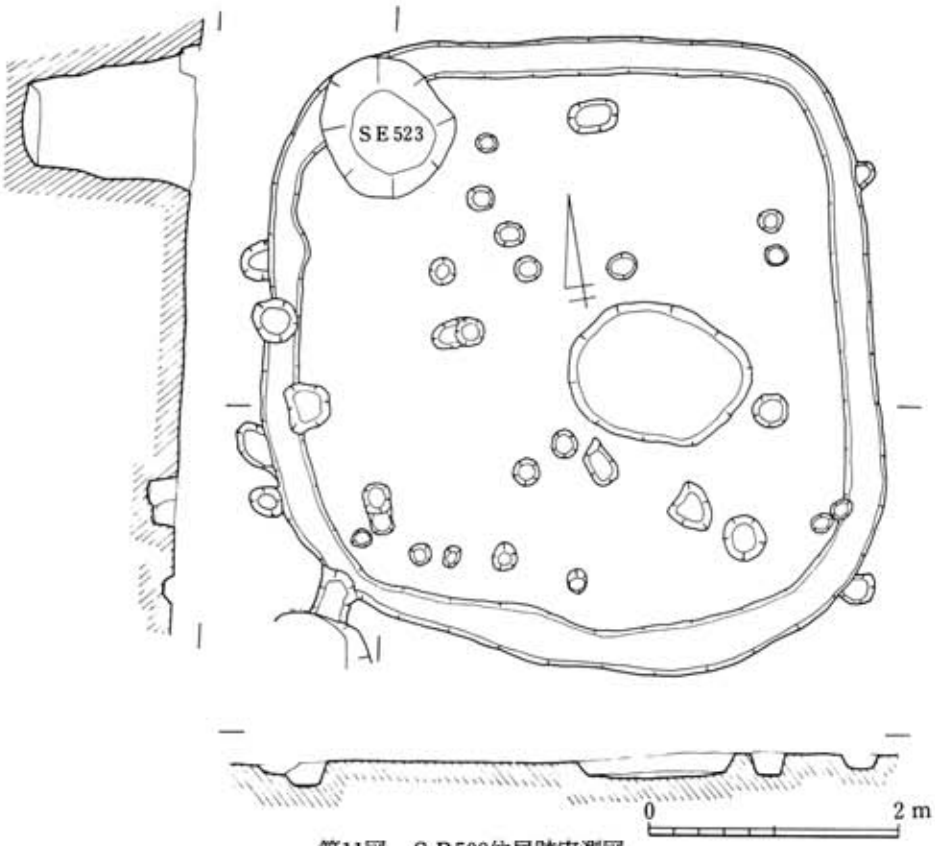
Ｖ区の南西部に位置する。南半分はＳＢ511と重なる。長軸4.56m、短軸4.16m床面積は17.1㎡である。主柱穴は、a（0.34×0.49m、深さ：0.4m）・b（0.61×0.71m、深さ：0.38m）の２本である。a～b：1.26m、主軸はN90°Eをとる。炉・焼土は検出されなかった。壁溝はなく、壁高は0.1～0.13mである。床面から甕・小形丸底壺・鉢が出土した。

ＳＢ508住居跡（第11図）

溝のみ検出したため、方形周溝状遺構とみるか論が分かれるがここでは住居跡としてあつかうこととする。北西隅はＳＥ523に切られる。長軸5.02m短軸4.82m、床面積は21.5㎡である。主軸はＮ７°Eをとる。主柱穴は不明である。床面東側に1.08×1.44mほどの土壙があり炉と考えられるが、焼土は検出されなかった。幅0.22～0.42mの壁溝と考えられるものが、全周している。遺物はなく、所属する時代は不明である。



第10図　ＳＢ507住居跡実測図



第11図　ＳＢ508住居跡実測図

(3) 掘立柱建物跡

ＳＢ509掘立柱建物跡（第３図）

１間（2.4m）×１間（2.7m）で、主軸方位をN54°Eにとる。

ＳＢ510掘立柱建物跡（第３図）

２間（1.5m等間）×２間（1.65m等間）で主軸方位をN19°Eにとる。

ＳＢ511掘立柱建物跡（第３図）

ＳＢ507と重複関係にあり、より新しい。１間(2.1m)×１間（2.4m）で、主軸方位をN27°Wにとる。柱の掘形は、不揃いである。

ＳＢ512掘立柱建物跡（第３図）

１間（2.6m）×２間（1.5m等間）で、主軸方位をN27°Wにとる。柱の掘形は不揃である。

ＳＢ513掘立柱建物跡（第３図）

１間（2.5m）×１間（2.8m）で、主軸方位をN58°Wにとる。

ＳＢ514掘立柱建物跡（第３図）

１間（1.6m）×２間（1.5m等間）で、主軸方位をN51°Eにとる。

ＳＢ515掘立柱建物跡（第３図）

１間（3.9m）×３間（2.1m等間）で、主軸方位をN48°Eにとる。ＳＥ516と重複関係をもつ。柱の掘形は0.3～0.6mと不揃いである。

ＳＢ516掘立柱建物跡（第３図）

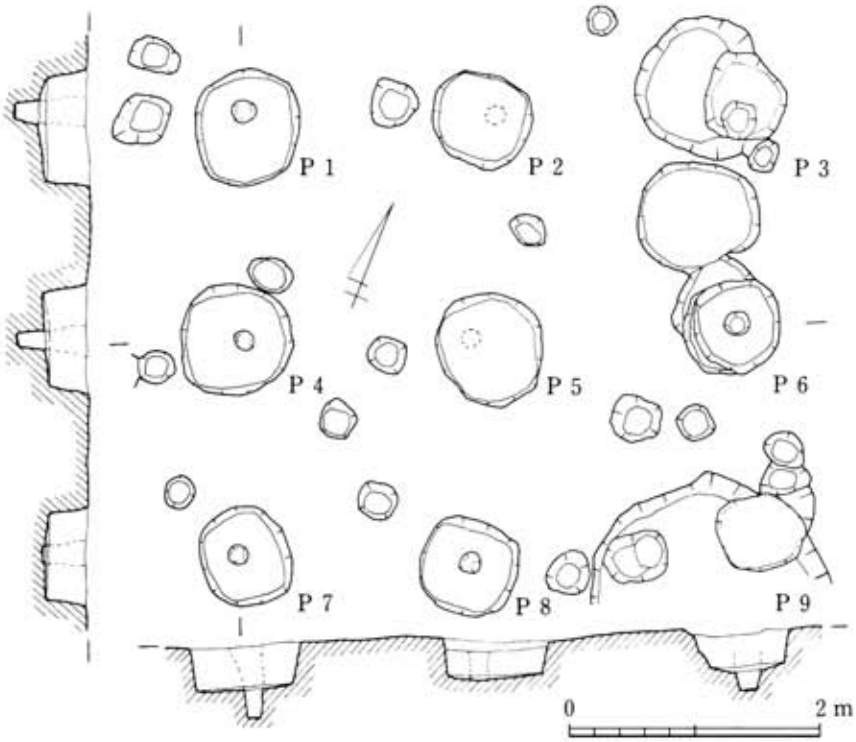
２間（1.6cm等間）×２間（2.1m等間）で主軸方位をN70°Eにとり、柱の掘形は不揃いである。

ＳＢ601掘立柱建物跡（第12図）

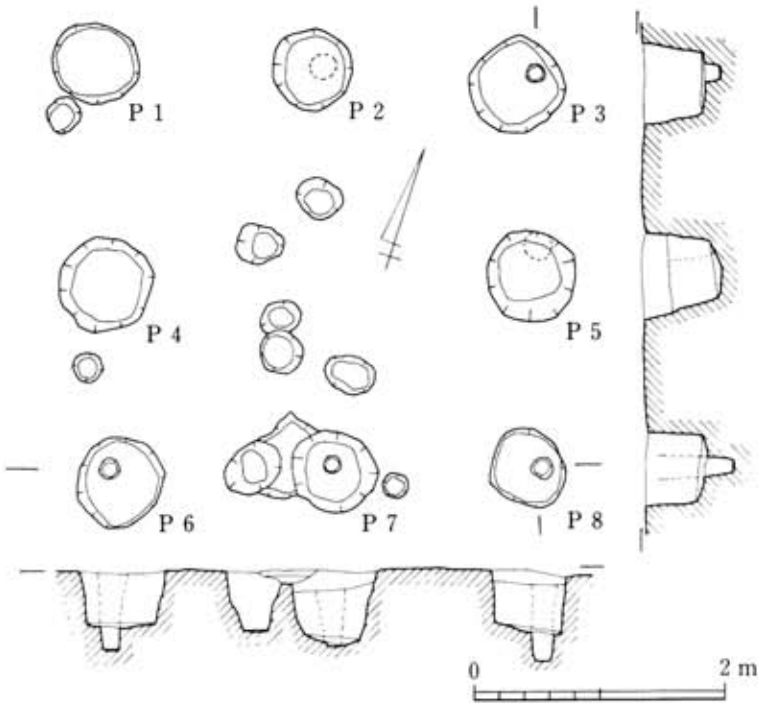
Ⅳ区の南端に位置する。２間×２間の建物で桁行方向をN69°Eにとる。桁行間3.95m、梁間間3.5mを測る。柱穴の掘方は掘丸方形で、Ｐ２、Ｐ５、Ｐ９は単掘り、他は柱の部分だけ小さく掘り込む二段掘りである。掘方の大きさはＰ１で長さ0.92m、幅0.82m深さ0･4m、さらに柱部分を直径0.18m、深さ0.2m掘り込んでいる。

ＳＢ602掘立柱建物跡（第13図）

Ⅳ区の南東端、ＳＢ601の東側に並列する。２間×２間の建物で中央の柱はない。桁行方向をN72°Eにとり桁行間3.4m、梁間間3.1mを測る。柱穴の掘方は円形に近い隅丸方形で、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ４、Ｐ５は単掘り、他は柱の部分だけ掘り込んでいる。掘方の大きさはＰ３で長さ0.73m、幅0.7m深さ0.48m、さらに柱の部分を直径0.15m、深さ0.12m掘込んでいる。



第12図　ＳＢ601掘立柱建物跡実測図



第13図　ＳＢ602掘立柱建物跡実測図

第１表　掘立柱建物跡計測表

ＳＢ601建物

2間×2間	梁間柱間	梁行		桁行柱間	桁行	掘方		
							径	深さ
P1 P4	182	353	P1 P2	200	396	P-1	82×92	40
4 7	171		2 3	196		2	80×72	44
2 5	178	356	4 5	180	394	3	64×68	40
5 8	178		5 6	214		4	88×86	35
3 6	164	350	7 8	184	396	5	82×90	35
6 9	186		8 9	212		6	72×72	34
平　均		353			396	7	70×78	33
						8	75×74	28
						9	66×58	30

ＳＢ602建物

2間×2間	梁間柱間	梁行		桁行柱間	桁行	掘方		
							径	深さ
P1 P4	161	317	P1 P2	170		P-1	68×63	50
4 6	156		2 3	170	340	2	62×62	47
2 7		318	4 5		342	3	73×70	48
3 5	142	317	6 7	175		4	72×74	56
5 8	173		7 8	166	341	5	69×70	63
平　均		317			341	6	66×68	42
						7	65×62	58
						8	60×56	48

(4)　溝

ＳＤ501溝

Ｖ区の北東端に位置する。全体に、Ｌ字状を呈している。南方向へ延びる部分は幅1.15～1.8mで、方位はＮ４°Ｗをとる。東方向へ延びる部分は幅0.45mほどで、方位はＳ82°Ｅをとり、池状の遺構に流れ込む。長さ19.8m。

ＳＤ502溝

ＳＤ505を切っている。幅0.7～0.9mで、方位はN87°Eをとる。長さ25.3m分を検出した。出土した磁器、尾崎焼等から江戸時代末期の所産と考えられる。

ＳＤ503溝

ＳＤ501の東方向へ延びる部分と平行して延び、池状の遺構に流れ込む。幅0.8～1.7mで、方位はＳ87°Ｅをとる。長さ7.7m分を検出した。

ＳＤ504溝

ＳＢ504の西側を南方向へ延びている。幅0.3～0.5mで、方位はＮ４°Ｗをとる。長さ7.8m分を検出した。

ＳＤ505溝

Ｖ区の西部を南南東方向へ延びている。中央部をＳＤ502に切られている。幅0.3～0.4m、方位はN15°Eをとる。SD504とともに、さらに北方向へ延びていると考えられる。

ＳＤ506溝

Ｖ区の東部をＳＤ503に直交するような形で南方向へ延びている。南端は、水田によって切られている。幅0.5～0.6m、方位はＮ６°Ｅをとる。長さ12.1m分を検出した。

ＳＤ601溝

Ⅵ区の西部に位置する。南西方向へ延びている。幅0.6mほどで、方位はN70°Eをとる。長さ3.4m分を検出した。土師器、瓦器が出土した。

ＳＤ602溝

ＳＤ601と平行して延びている。幅0.5～0.6mで、方位はN70°Eである。長さ6.4m分を検出した。ＳＤ601とともに、さらに南西方向へ延びると考えられる。

ＳＤ603溝

Ⅵ区の北東端に位置する。全体に、Ｌ字状を呈している。南方向へ延びる部分は、幅1.2～1.5mで、方位はN11°Eである。東方向へ延びる部分は、幅1.0～1.2m、方位はN90°Eである。長さ11.6m分を検出した。

ＳＤ604溝

Ⅵ区の中央部に位置し、東方向へ延びている。幅1.1～1.3mで、方位はN83°Wをとる。長さ21m分を検出した。

土師器・陶磁器・滑石製品が出土した。

ＳＤ605溝

ＳＤ604に平行して東西方向へ延びている。幅1.7～2.3mで、方位はN84°Eをとる。長さ28m分を検出した。ＳＤ605は、素掘りと考えられ、護岸等の形跡は認められない。

土師器・瓦器・陶磁器・滑石製品が出土した。

ＳＤ606溝

Ⅵ区の北西端に位置し、北北西方向へ延びていくと考えられる。幅1.2～1.3mで、方位はN16°Wをとる。長さ3.3m分を検出した。

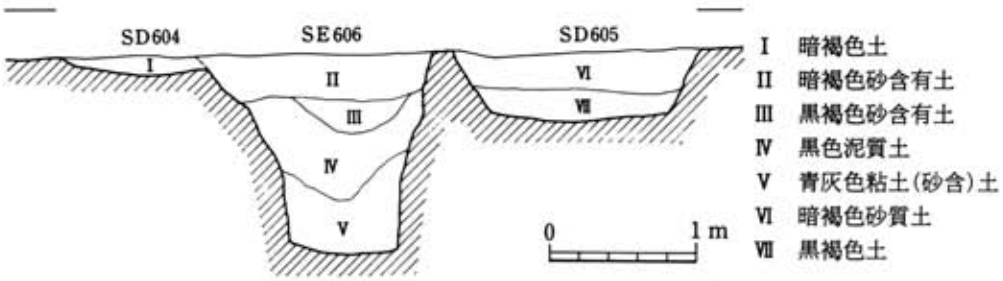
土師器・瓦器・陶磁器・須恵質土器が出土した。

ＳＤ607溝

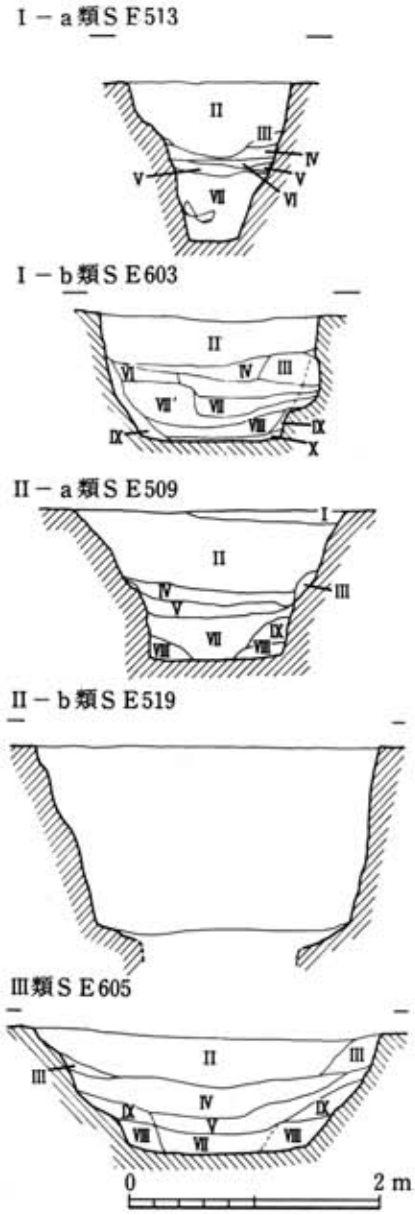
ＳＤ604とＳＤ605にはさまれるような形で、西方向へ延びている。幅0.3～0.9mで、方位はN83°Eをとる。長さ15.5m分を検出した。

ＳＤ608溝

Ⅵ区の中央部を南方向へやや蛇行しながら延びている。南端部はＳＤ604・ＳＤ605に切られている。幅0.4～0.7cm、方位は北・南端部でN10°W程度、中央部でN40°Wをとる。長さ25.6m分を検出した。



第14図　ＳＤ604、605溝、ＳＥ606井戸断面土層図



第15図　井戸Ｉ類～III類断面図

Ｉ層　灰黒色土
II層　暗褐色土
III層　黄褐色土
IV層　黒褐色土
Ｖ層　黒褐色泥質土
VI層　暗灰色土
VII層　黒色泥質土
VIII層　青灰色粘土
IX層　黄褐色粘土
Ｘ層　暗黄褐色土

(5)　井戸

井戸はＶ区より32、VI区より９の41基が出土した。井戸内より桶や曲物等の井戸枠は出土せず、板材は抜き取られている。ただ１－aに分類した小型の井戸などは、元々井戸枠を使用していない単掘りの井戸ではないかと見られる。

尾崎利田遺跡の基本的な土層は表土下に暗褐色土が、その下に黄褐色粘質土、さらに灰褐色砂層となる。井戸は黄褐色粘質土より掘り込まれ、灰褐色砂層まで達している。灰褐色砂層からは湧水があり、掘込面より湧水がある層までの平均の深さはＶ区で１m、VI区で0.5mである。Ｖ区の井戸の深さは平均1.1m、VI区が1.08mであり、全体的に浅い井戸であるがすべて湧水がある層までは達している。

井戸の掘方による形態分類を行う。

Ｉ類

基本的な井戸の掘方であり、上面から下面にかけてほぼ垂直に掘込む手法で、円柱状や、わずかに上面が広がり逆円錐台形をとるものである。これはＶ区、VI区全域に見られ、時期的にも10世紀中頃より13世紀にわたっている。又このＩ類の井戸は直径１m内外の小さい井戸と径1.5mを超える大きな井戸があり、前者をa、後者をbとしてさらに細分した。Ｉ－a類はＳＥ513・514など20基が、Ｉ－b類はＳＥ515・606など９基がある。

Ｉ－a類　**ＳＥ513**はＶ区の南側に位置する。掘方の平面形は円形で、上面の径1.28×1.26m、下面の径0.45×0.42m、深さ1.2m。掘方は円錐台形状をしている。井戸内から木片が数片出土したが井戸枠は出土しない。出土遺物は土師器小皿、瓦器碗、白磁碗がある。

ＳＥ514はＶ区の南西側に位置する。掘方の平面は円形で、上面の径0.86×0.85m、下面の径0.8×0.77m、深さ1.37mと上面と下面がほとんど変らず、円柱状で

ある。内部には井戸枠等は見られず、この形態の井戸には元々井戸枠は使用されていないと見られる。出土遺物は黒色土器碗、須恵器片がある。

Ⅰ－b類　**ＳＥ515**はＶ区のほぼ中央に位置する。平面形は楕円形の掘込みで、上面は2.25×1.82m、下面が1.82×1.62m、深さ1.3mと大きい掘方である。上面から0.9mにて灰褐色砂層の湧水がある層となる。出土遺物は土師器小皿、黒色土器碗、土鍋がある。

ＳＥ606はⅥ区の東、ＳＤ604とＳＤ605の中間に位置する。平面形は円形で上面の径2.96×2.65m、下面の径1.72×1.39m、深さ1.12mと下面が狭くなり円錐台形状となる。内部から木片は出土したが井戸枠は出土しない。出土遺物は土師器小皿、瓦器碗、白磁碗がある。

Ⅱ類

Ⅱ類はⅠ類と同じ形態を取りながら途中に段を有するものである。この形態の井戸はＶ区に９基ある。ＳＥ519は掘方が他に比べ一段と大きいので他と区別しⅡ－b類とした。

Ⅱ－a類　**ＳＥ509**はＶ区の中央南側に位置し、ＳＥ510を切っている。掘方の平面は円形で、深さ0.55mの所より段を有している。上面の径2.29×2.02m、二段目の径1.28×1.16m、底面の径1.0×1.0m。井戸内には井戸枠等は出土しない。井戸底の周壁には青白色粘土が残っており、井戸枠を固定したか、壁面からの濁水を防いだものであろう。又上面から0.9mからは灰褐色砂層となり湧水がある。出土遺物は土師器杯、瓦器碗、有孔円盤がある。

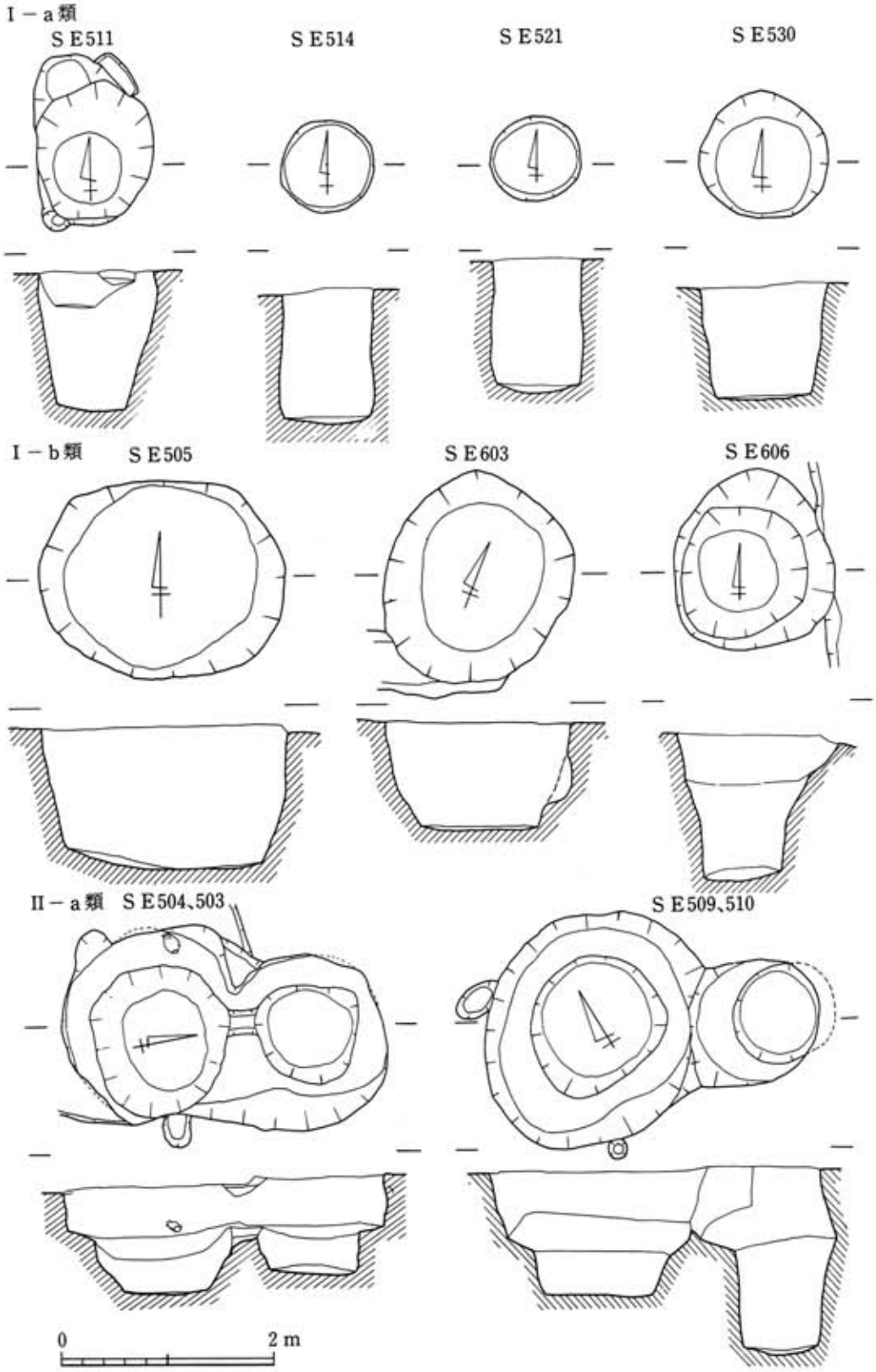
Ⅱ－b類　**ＳＥ519**はＶ区のほぼ中央に位置する。掘込みの平面形は円形で上面の径2.84×2.72m、二段目の掘込みの径は約1.3m、深さ1.4mにて段を有している。二段目の掘込みは周壁が砂層であり、湧水が多く周壁の崩壊の危険が出てきたため、それ以上は掘り進まなかった。出土遺物は瓦器碗、青磁、白磁、須恵器の破片が出土している。

Ⅲ類

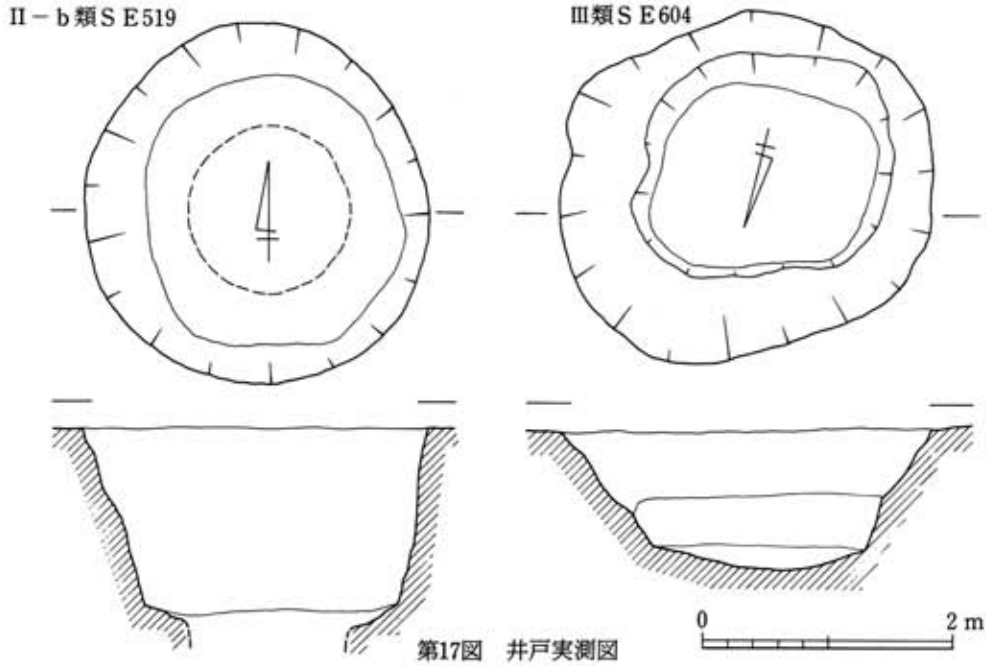
上面が下面より大幅に広くなり、斜めに掘込んだものをⅢ類とした。Ⅲ類はＳＥ604・ＳＥ605・ＳＥ609の３基である。

ＳＥ605はⅥ区の北端に位置する。掘方の平面形はほぼ円形で、上面の径2.78×2.78m、下面の径1.6×1.4m、上面より0.4～0.5mにて掘方が斜行しており二段掘になる。井戸底の周壁には厚さ30cm程の青灰色粘土を巡らしている。井戸枠を固定させるため張り付けたものか、横からの濁水を防いだものであろう。井戸内より木材片が数点出土したが井戸枠の出土はなかった。出土遺物は土師器小皿・杯・碗・瓦器碗・白磁碗がある。

ＳＥ609はⅥ区の西端に位置しＳＥ608を切っている。掘方の平面は円形で、上面の径3.5×3.2m、下面の径2.36×2.2m、深さ1.01mと掘方としては一番大きい。掘方は上面より0.4mまではほぼ垂直で、その下部はゆるやかに斜行している。井戸内には井戸枠を固定する杭が数本残っている。出土遺物は土師器小皿・杯・瓦器碗、陶質土器・青磁・白磁がある。


I－a類
SE511
SE514
SE521
SE530
I－b類
SE505
SE603
SE606
II－a類
SE504、503
SE509、510
0
2 m

第16図　井戸実測図



第17図　井戸実測図

第２表　井戸一覧表

遺構番号	掘方規模 上面	掘方規模 下面	掘方規模 深さ	形態分類	出土遺物
ＳＥ501	1.68×1.68	0.92×0.8	0.7	II－a	
ＳＥ502	0.86×0.82	0.9 ×0.81	0.88	I－a	土師器片
ＳＥ503	1.6 ×約1.5	0.78×0.72	0.92	II－a	土師器小皿、碗、黒色土器碗
ＳＥ504	1.7 ×1.68	0.9 ×0.76	1.1	II－a	土師器小皿、杯、碗、黒色土器碗
ＳＥ505	2.25×1.82	1.82×1.62	1.3	I－b	土師器小皿、杯、碗、鉢、黒色土器碗
ＳＥ506	1.8 ×1.6	1.33×1.29	0.95	I－b	須恵器、甕、壺
ＳＥ507	1.3 ×1.24	0.73×0.73	1.1	I－a	土師器小皿、高台付小皿、杯、高坏、碗
ＳＥ508	1.12×1.02	1.23×1.22	0.9	I－a	土師器杯、瓦器碗
ＳＥ509	2.29×2.02	1.0 ×1.0	1.15	II－a	土師器杯、鉢、黒色土器碗、瓦器碗
ＳＥ510	1.16×1.08	0.75×0.7	1.36	I－a	土師器碗、鉢、黒色土器碗
ＳＥ511	1.3 ×1.08	0.66×0.64	1.3	I－a	土師器碗、黒色土器碗
ＳＥ512	1.58×1.52	1.4 ×1.36	1.35	I－b	土師器小皿
ＳＥ513	1.28×1.26	0.46×0.42	1.2	I－a	黒色土器碗、瓦器碗、白磁碗
ＳＥ514	0.86×0.85	0.8 ×0.77	1.37	I－a	土師器碗、黒色土器碗
ＳＥ515	1.95×1.6	1.18×1.01	1.25	II－a	土師器小皿、碗、黒色土器碗
ＳＥ516	1.04×0.94	0.62×0.61	1.0	I－a	土師器碗、黒色土器碗
ＳＥ517	1.27×0.92	1.45×0.94	0.9	I－a	土師器小皿、杯、碗、黒色土器小皿、碗
ＳＥ518	1.4 ×1.15	0.66×0.56	1.01	II－a	土師器碗、鉢、黒色土器碗
ＳＥ519	2.84×2.74	――	二段目壁 [illegible]	II－b	土師器小皿、黒色土器碗
ＳＥ520	約2.5 ×1.95	2.6 ×1.6	1.0	I－b	土師器小皿、黒色土器碗、瓦器碗、白磁碗
ＳＥ521	8.4 ×7.9	7.8 ×6.6	1.25	I－a	土師器小皿、黒色土器碗
ＳＥ522	9.8 ×9.6	6.8 ×6.7	0.71	I－a	黒色土器碗
ＳＥ523	1.1 ×0.98	0.67×0.56	1.35	I－a	土師器碗、黒色土器碗
ＳＥ524	1.2 ×0.98	1.18×0.67	1.11	I－a	
ＳＥ525	1.44×1.18	1.52×1.52	1.2	I－b	土師器碗、黒色土器碗
ＳＥ526	1.1 ×0.86	0.88×0.84	1.15	I－a	土師器小皿、碗、黒色土器碗
ＳＥ527	1.16×1.1	0.68×0.66	1.15	I－a	土師器小皿、碗、黒色土器碗
ＳＥ528	1.9 ×1.5	1.01×0.88	0.95	II－a	土師器小皿、瓦器碗、白磁碗
ＳＥ529	1.1 ×0.96	0.76×0.7	1.1	I－a	土師器碗、黒色土器碗
ＳＥ530	0.9 ×0.88	1.18×1.18	1.1	I－a	黒色土器碗
ＳＥ531	1.82×1.16	0.58×0.53	1.2	II－a	
ＳＥ532	約2.1 ×2.05	1.35×1.22	1.0	I－b	土師器三足付鍋、鍋
ＳＥ601	1.2 ×0.86	0.84×0.82	1.0	I－a	土師器片
ＳＥ602	1.45×1.32	1.16×1.06	1.02	I－a	土師器小皿、杯、瓦器碗
ＳＥ603	1.92×1.66	1.39×1.13	1.01	I－b	土師器小皿、瓦器碗、褐釉陶器壺
ＳＥ604	2.96×2.65	1.72×1.39	1.12	II	土師器小皿、碗、瓦器小皿、杯、碗、白磁碗
ＳＥ605	2.78×2.78	1.6 ×1.42	1.05	III	土師器小皿、杯、瓦器碗、白磁碗
ＳＥ606	1.6 ×1.48	0.76×0.7	1.37	I－b	土師器杯、瓦器碗
ＳＥ607	1.23×1.08	1.16×1.02	1.35	I－a	須恵器大甕、黒色土器碗、瓦器碗
ＳＥ608	2.05×1.81	1.4 ×1.08	0.82	I－b	瓦器碗
ＳＥ609	3.5 ×3.2	2.36×2.2	1.01	III	土師器杯、白磁碗、合子、青磁碗

(6) 土壙

土壙はV区で28、VI区で12の計40基が出土した。平面形は楕円形、方形、弧状になるものがある。深さは浅いものが多く、又出土遺物も少なく土壙の性格は明らかにできない。

平面形が円形になる土壙はＳＫ506・520・526・529・601がある。規模は大きいＳＫ506で長径1.5m、短径1.29m、深さ0.1mである。遺物はＳＫ520で三足付盤、黒色土器碗が、ＳＫ526で土師器小皿、黒色土器碗が出土している。

平面形が方形になる土壙は19基ある。この中には、長径が１m内外の小型の土壙、長径が2.0m程の土壙、又長径が2.5mを越える大型の土壙の三形態がある。長径が１m余りの土壙はＳＫ510・522・531・532・533・604・605・612・613があり、形態的には掘立柱建物の柱穴に似る。出土遺物はＳＫ604より古墳時代前期の土師器片が出土している。他の土壙からは平安時代後半～鎌倉時代の黒色土器、瓦器の破片が出土しているが、まとまっての出土はない。

長径が２m程の長方形の土壙はＳＫ502・513・606・608がある。ＳＫ606は1.48m、短径0.98m、深さ0.54mで、土師器小皿、瓦器碗、白磁碗が出土した。又ＳＫ608は長径2.1m、短径0.86m、深さ0.77mの細長い土壙で土師器小皿、瓦器碗、青磁碗が出土した。

長径が2.5mを越える土壙はＳＫ501・505・509・514・519・603がある。最大の土壙はＳＫ509で長径3.1m短径0.9m、深さ0.25mを計る。黒色土器碗の小片が出土している。ＳＫ603は長径2.50m、短径1.16m、深さ0.65mで、北側に段を設けている。土師器小皿、黒色土器碗が出土した。

第３表　土壙一覧表

遺構番号	長さ	幅	深さ	平面形態	出土遺物
ＳＫ501	2.58	0.76	0.25	長方形	
ＳＫ502	2.02	1.0	0.48	隅丸長方形	
ＳＫ503	5.0	0.88	0.45	弧状	弥生土器甕、鉢
ＳＫ504	1.1	1.1	0.54	不整形	土師器碗
ＳＫ505	3.03	0.95	0.12	長方形	土師器甕
ＳＫ506	1.5	1.29	0.1	円形	土師器小皿、碗、黒色土器碗
ＳＫ507	3.55	2.58	0.76	隋円形	土師器、須恵器片
ＳＫ508	1.7	1.12	0.22	不整形	土師器、須恵器片
ＳＫ509	3.1	0.9	0.25	長方形	土師器片
ＳＫ510	1.4	0.88	0.55	長方形	
ＳＫ512	2.6	0.87	0.27	不整形	
ＳＫ513	1.94	1.1	0.1	長方形	黒色土器碗
ＳＫ514	2.68	1.22	0.09	長方形	瓦器碗、白磁碗
ＳＫ515	1.5	1.04	0.4	不整形	瓦器碗
ＳＫ519	2.52	0.6	0.35	隅丸長方形	
ＳＫ520	0.84	0.77	0.38	円形	土師器碗、三足付盤、黒色土器碗
ＳＫ521	1.5	1.2	0.35	不整形	黒色土器碗
ＳＫ522	1.03	0.87	0.17	隅丸方形	瓦器碗
ＳＫ523	1.7	1.15	0.68	不整形	
ＳＫ525	1.9	——	0.88	——	
ＳＫ526	1.27	1.16	0.22	円形	土師器小皿、瓦器碗
ＳＫ527	4.18	1.56	0.15	不整形	須恵器片、土師器碗
ＳＫ528	1.7	1.05	0.19	不整形	土師小皿、黒色土器碗
ＳＫ529	0.93	0.88	0.8	円形	青磁碗片
ＳＫ530	1.6	0.6	0.2	不整形	土師器甕
ＳＫ531	1.04	0.73	0.46	長方形	
ＳＫ532	0.93	0.5	0.26	長方形	土師器小皿
ＳＫ533	1.22	0.83	0.66	隅丸長方形	
ＳＫ601	1.18	1.16	0.75	円形	
ＳＫ602	3.0	0.8	0.35	不整形	
ＳＫ603	2.5	1.16	0.65	隅丸長方形	土師器小皿、碗、黒色土器碗
ＳＫ604	1.0	0.96	0.27	隅丸方形	土師器甕
ＳＫ605	0.84	0.76	0.18	隅丸方形	土師器碗
ＳＫ606	1.48	0.98	0.54	長方形	瓦器碗、白磁碗、青磁碗
ＳＫ607	2.9	1.9	0.92	隅丸方形	
ＳＫ608	2.1	0.86	0.77	長方形	瓦器碗
ＳＫ610	——	2.20	0.09	不整形	土師器小皿、瓦器碗
ＳＫ611	2.0	1.32	0.1	長方形	土師器小皿、黒色土器碗
ＳＫ612	0.9	0.66	0.77	隅丸長方形	瓦器碗、青磁碗
ＳＫ613	0.83	0.78	0.71	隅丸方形	土師器杯、黒色土器碗、滑石製石鍋

平面形が弧状となる土壙はＳＫ503である。長径５ｍ、短径0.88m、深さ0.15～0.45m。上面が削平を受けており、本来は東、西に延び溝状になる。内部から弥生土器が出土した。

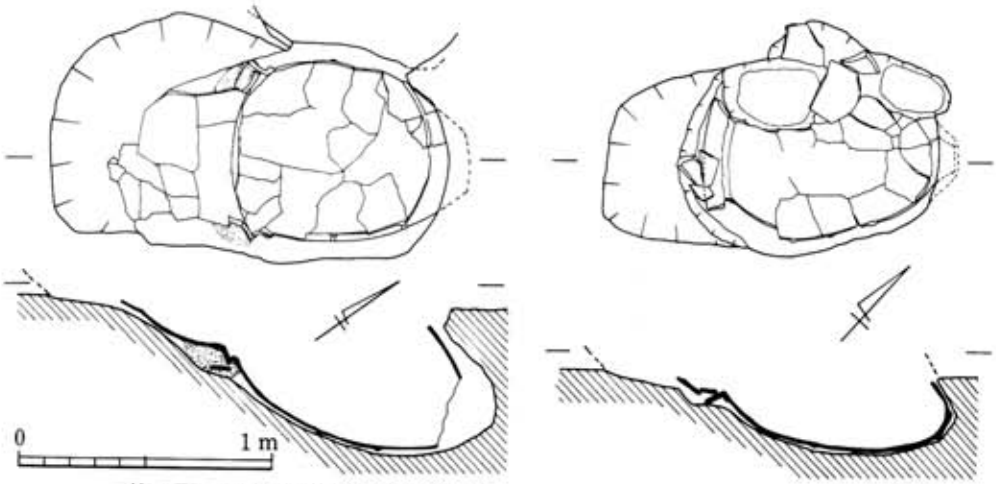
ＳＫ507土壙は平面形が楕円形をなすもので、長径3.55m、短径2.58m、深さ0.76mと大きい土壙である。上面より0.6mの所に段を設けており、掘方としては井戸Ⅲ類に類似する。遺物は、磨滅した土師器、須恵器片が少量出土している。

この他にＳＫ504、508、515などは不整形の土壙で、小さいＳＫ504で長径1.1m、短径1.1m、深さ0.54m、大きいＳＫ527で長径4.18、短径1.56m、深さ0.15mである。

(7) 甕棺墓

ＳＪ501甕棺墓（第18図）Ｖ区の北西端に位置する。甕棺の上部は削平を受けている。同形の甕と甕を用いる合口甕棺墓で、接合面に粘土目張りを有する。横穴は深さ0.55m、長さ1.5m。下甕の底部は打ち欠いている。傾斜角33°、主軸方向はＳ36°Ｗである。

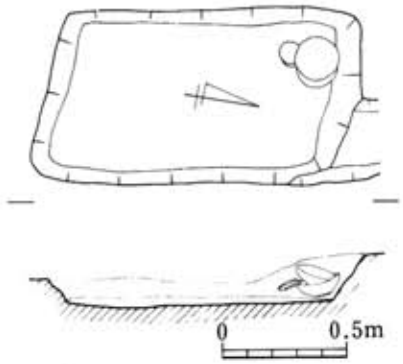
ＳＪ502甕棺墓（第18図）Ｖ区の北西端ＳＪ501と隣接する。甕を用いる成人用の単棺墓で、甕棺の上部は削平を受け２分の１柱残存する。横穴は深さ0.3m、長さ1.1mで、東側へ掘り込んでいる。傾斜角27°、主軸方向Ｓ47°Ｗである。



第18図　ＳＪ501、502甕棺墓実測図

(8) 土壙墓

ＳＰ501土壙墓（第19図）Ｖ区の西端に位置する。長さ1.25m、幅0.68m、深さは削平を受けており現存面で0.18m。長方形で方位はＮ9.5°Ｗである。土壙墓の北西端より土師器小皿、瓦器碗、青磁碗が重なって出土した。



第19図　ＳＰ501土壙墓実測図

2　遺物

ＳＢ502出土土器（第20図、３～６）

床面から、高杯、小形丸底壺・器台が、埋土中より押型文土器片、抉入石斧が出土した。

高杯（３）口径18.6cm。脚底部欠損。杯部は外面に稜を持つ。口縁部は外反し口縁端部は丸い。外面は斜位のハケメのあとヨコナデ、内面はヨコナデ。脚部は接合部より太くなり、「く」の字状に脚底部にうつる。外面はハケメのあとヨコナデ。内面はヘラケズリ。

小形丸底壺（４）口径10.5cm、器高7.5cm、胴部最大径6.6cm。口縁部は内湾ぎみに外反する。口縁端部は丸い。外面は縦位のハケメのあと上半部はヨコナデ、下半部はヘラミガキ。内面はハケメのあとヘラミガキ。胴部は口縁部に比べて小さい。外面上半部はヘラミガキ、内面ナデ。底部は丸底で、内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリ。

器台（５、６）５は口径7.6cm、底径10.2cm、器高8.0cm。杯部はわずかに中ぶくらみで、裾端部は丸い。内・外面ともにヘラミガキ。脚部はくびれ部から内湾ぎみに張りを持ち、裾部は外反し、裾端部は丸い。内、外面ともにヘラミガキだが、内面下半部は、ヨコナデ。くびれ部に焼成前の穿孔がある。６は底径10.8cmで杯部欠損。脚部はやや内湾ぎみに開き、裾部は外反し、裾端部は丸い。内、外面とも器面が荒れており調整不明。くびれ部に焼成前の穿孔がある。

ＳＢ504出土土器（第20図１、２）

床面より、甕、壺が出土した。

甕（１）口径31.4cm。口縁部は外反する「く」の字状に外反し、端部は厚くなり、丸くすぼまる。内・外面ともにヨコナデ。胴部は張っており、外面縦位のハケメ、内面ナデ。

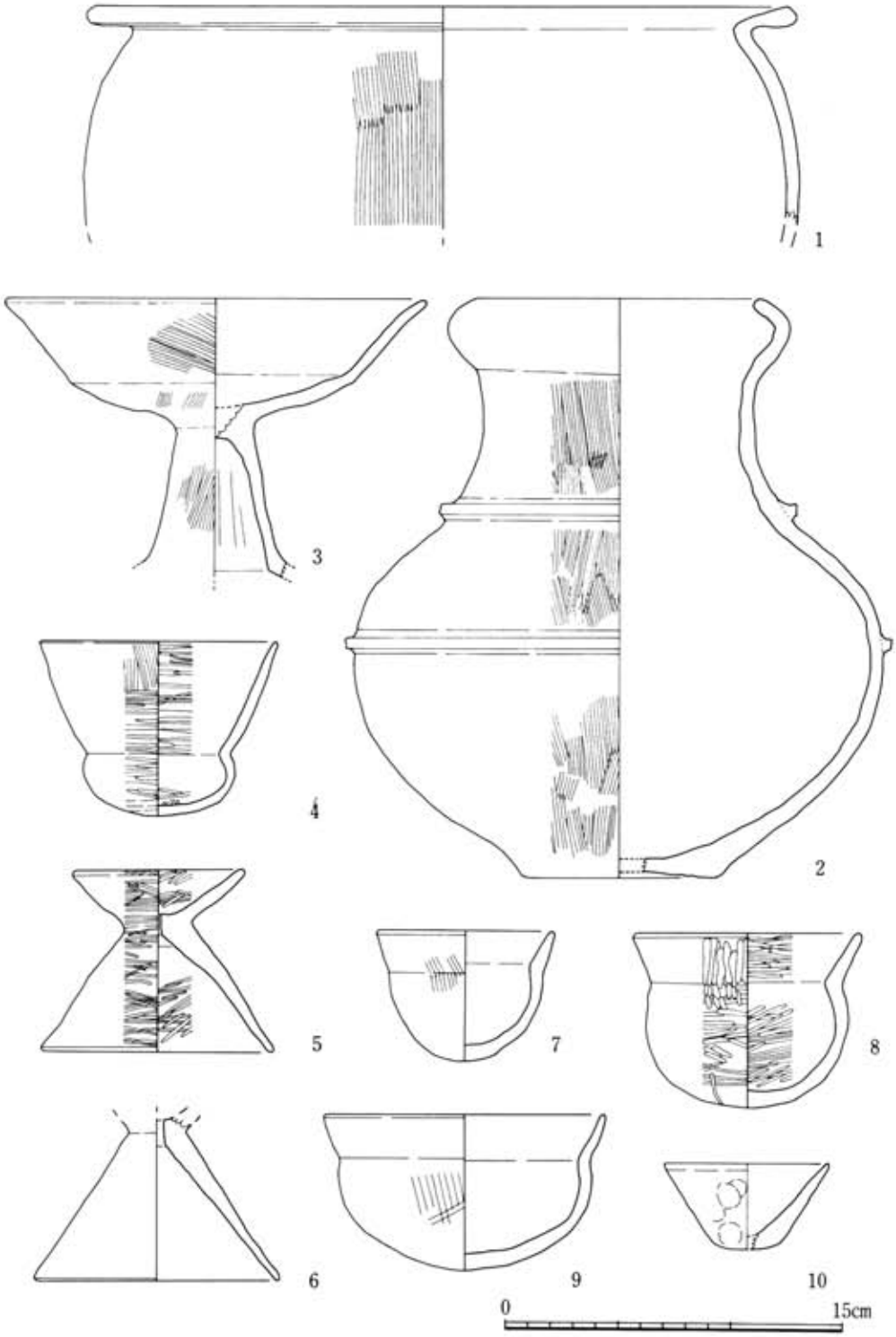
壺（２）口径11.8cm、胴部最大径23.5cm、器高25.6cm。口縁部は反転部内面に稜を持つ袋状をなし、口縁端部は丸い。内・外面ともにヨコナデ。頸のつけねに凸帯をめぐらす。頸部内面はヨコナデ、外面はハケメ。胴部はやや偏平な球形に近く、胴部中央に凸帯をめぐらす。外面ハケメ、内面ナデ。底部はわずかに上げ底である。

ＳＢ506出土土器（第20図７～９）

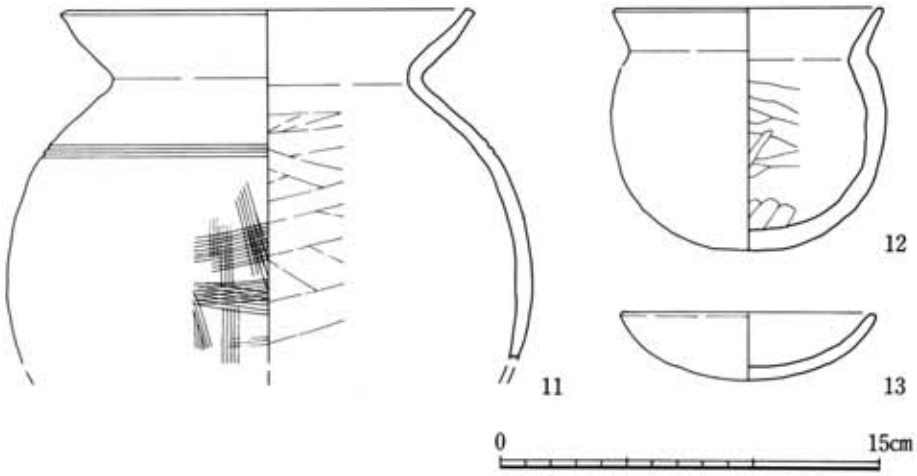
床面から鉢が３点出土した。

鉢（７～９）７は口径7.8cm、器高5.8cm。口縁部は「く」の字状にわずかに外反し、口縁端部は丸い。内・外面ともにハケメのあとナデ。頸部から半球状の胴部に移行する。胴部は内・外面ともにハケメのあとナデ。底部は丸底。８は口径10.2cm、胴部最大径9.0cm、器高7.8cm。口縁部は「く」の字状に外反し、頸部にかけて厚くなる。内面は横位のヘラミガキ。外面は縦位のヘラミガキ。胴部は球形で、内・外面ともにヘラミガキ。底部は丸底。９は口径12.4cm、胴部最大径11.2cm、器高6.9cm。口縁部はやや内湾ぎみに外反し、口縁部は丸い。内・外面ともにヨコナデ。胴部は半球状で、内面ナデ、外面ハケメのあとナデ。底部は丸底。

ＳＢ507出土土器（第21図10～14）



第20図　ＳＢ502、504、506住居跡出土土器実測図



第21図　ＳＢ507住居跡出土土器実測図

床面から甕、鉢が３点出土した。

甕（11）口径16.5cm、胴部最大径20.9cm。口縁部は頸部から内湾ぎみに立ちあがり、中ぶくらみする。口縁端部は角ばる。内・外面ともにヨコナデ。肩部は張り、外面に２条の沈線をもつ。外面ヨコナデ。胴部は内面ヘラケズリ、外面ハケメ仕上げ。

鉢（10・12・13）10は口径7.4cm、器高3.9cm。口縁部はやや内湾ぎみに外反する。口縁端部は丸い。内面ヨコナデ、外面は指によるおさえ。12は口径10.7cm胴部最大径10.8cm、器高9.6cm。口縁部は短く外反しながらうすくなり、口縁端部は丸い。内・外面ともにヨコナデ。頸部は厚く、球状の胴部へ移行する。胴部内面ヘラケズリ、外面ナデ。底部は丸底。14は口径10.1cm、器高2.7cm。口縁部から底部へ移行する。口縁端部は丸い。内・外面ともにヨコナデ。底部は丸底。

SD501出土土器（第22図14）

土師器

小皿（14）口径8.7cm、底径6.4cm、器高1.9cm。糸切り底で、板状圧痕あり。

SD503出土土器（第22図15、20）

土師器

小皿（15）口径8.6cm、底径6.6cm、器高1.8cm。糸切り底で、板状圧痕あり。

杯（20）口径13.0cm、底径9.1cm、器高2.６cm。糸切り底。内・外面ともにロクロナデ。

SD601出土土器（第22図18・22～24・26）

土師器

杯（22）口径14.6cm、底径9.9cm、器高3.2cm。糸切り底で、板状圧痕あり。内・外面ともにロクロナデ。

碗（23）口径16.6cm、高台径7.4cm、器高5.6cm。ヘラ切り底。体部内面ナデ、外面ナデのあと荒いヘラミガキ。体部下位に指頭圧痕あり。

瓦器

小皿（18）口径9.5cm、底径6.9cm、器高1.7cm。内・外面ともにナデのあとヘラミガキ。内底部は丁寧なヘラミガキ。ヘラ切り底で、板状圧痕あり。

碗（24）口径15.8cm、高台径6.7cm、器高5.5cm。内・外面ともヘラミガキ。体部下位外面に指頭圧痕あり。

須恵質土器

片口（26）片口部を欠くが、特徴からみて片口と考えられる。口径25.2cm。内、外面ともにヨコナデ。

SD604出土土器（第22図16・17・21・25・27～29）

土師器

小皿（16・17）16は口径8.3cm、底径7.2cm、器高1.5cm。糸切り底で板状圧痕あり。17は口径9.0cm、底径6.3cm、器高1.2cm。糸切り底である。

杯（21）口径14.0cm、底径9.6cm、器高3.0cm。内・外面ともにロクロナデ。糸切り底で、板状圧痕あり。

鍋（27）口径43.5cm。内・外面ともにハケメ。口縁平担部に縄目の押圧痕が全周する。

須恵質土器

支脚（29）現存高9.5cm。胎土は、砂粒が多い。手づくね成形。

青磁

小皿(25)口径10.0cm、器高2.2cm。体部中位で屈曲する。釉は灰緑色、底部は施釉されない。内面にヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を有する。

滑石製品

鍋（28）口径41.3cm。内面、外面ともにノミ痕が残る。口縁部下に、全周する鍔をもつ。

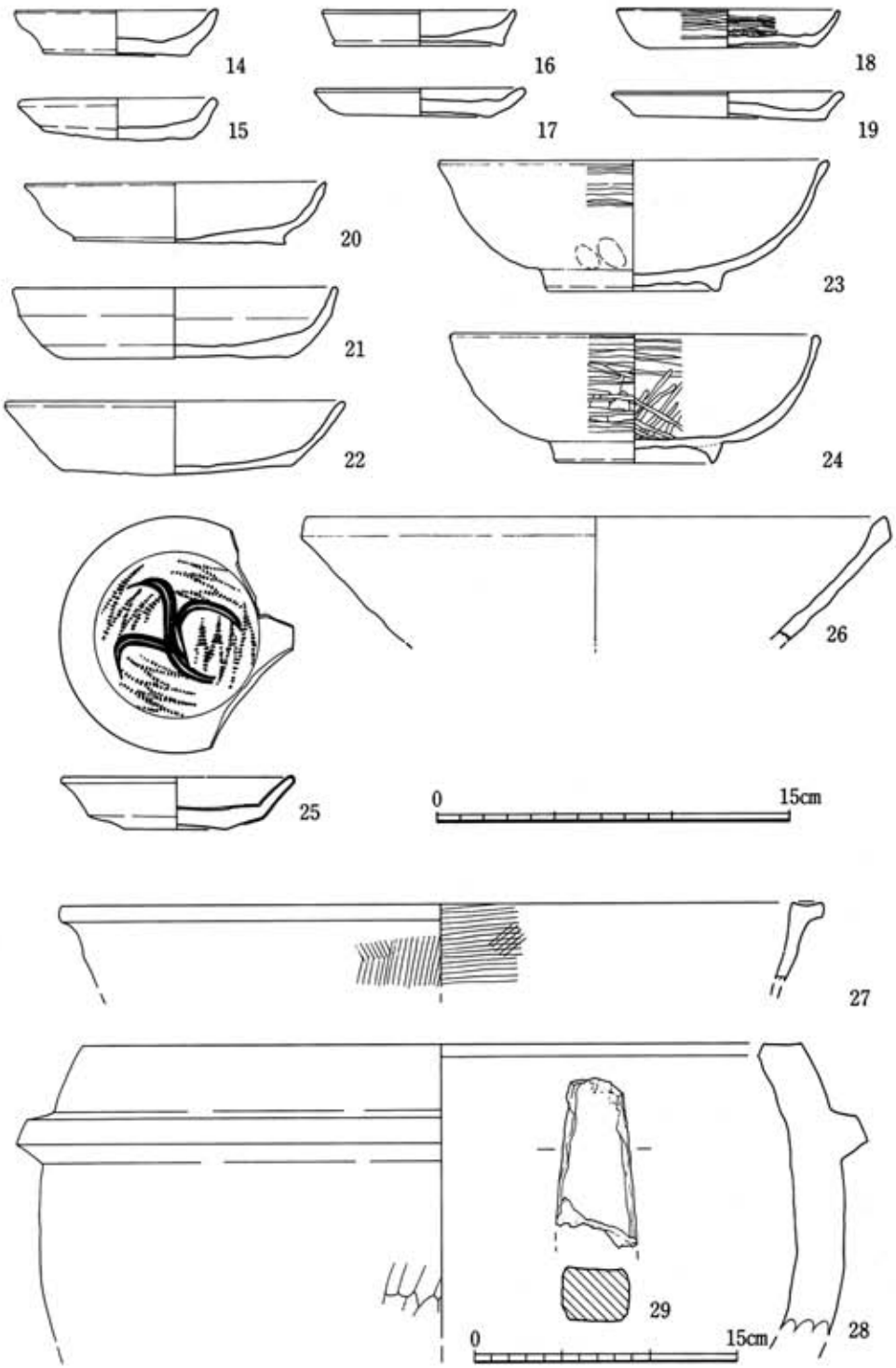
SD605出土土器（第23～25図30～66）

土師器

小皿(30～34)30は口径8.6cm、底径6.8cm、器高1.4cm。31は口径8.9cm、底径7.1cm、器高1.2cm。32～34は口径9.6～9.7cm、底径5.9～6.6cm、器高1.2～1.6cm。33はヘラ切り底で、他は糸切り底。全て板状圧痕あり。

杯（35～38）35は口径12.6cm、底径8.8cm、器高2.9cm。36～38は口径15.5～16.4cm、底径9.3～10.5cm、器高3.3～3.5cm。35・36は糸切り底、37・38はヘラ切り底。全て板状圧痕があり、内・外面ともにロクロナデ。

鍋（62・63）62は口径47.3cm、現存高16.0cm。胎土に砂粒を含む。内面ナデ、外面ハケメ。



第22図　溝出土土器、磁器、滑石製品実測図

体部は媒が付着している。63は口径40.4cm。内面、外面ともに荒いハケメ。口縁平担部には縄目の押圧痕が全周する。

瓦器

碗(39～44、46～48)39は口径15.5cm、高台径7.0cm、器高6.2cm。ヘラ切り底。内・外面ともに丁寧なヘラミガキを行う。40は口径15.9cm、高台径7.1cm、器高5.6cm。内・外面ともにヘラミガキを行うが、外面はやや雑である。体部下位外面に指頭圧痕がある。41は口径16.0cm、高台径7.6cm、器高5.8cm。ヘラ切り底で、板状圧痕あり。内・外面ともにヘラミガキを行うが、外面はやや雑である。42は口径16.2cm、高台径7.1cm、器高6.7cm。内面ヨコナデ。外面雑なヘラミガキ。43は口径16.4cm、高台径6.6cm、器高5.7cm。ヘラ切り底で、底部外面にヘラ記号状の沈線を有する。体部下位外面に指頭圧痕あり。内・外面ともにヘラミガキを行う。44は口径16.5cm、高台径 7.3cm、器高 6 cm。内外面ともにヘラミガキ、ヘラ切り底。46は口径17.0cm、高台径6.7cm、器高6.1cm。器面が荒れている。47は口径17.5cm、高台が欠損している。ヘラ切り底で、内・外面ともにヘラミガキ。48は口径17.9cm、高台径7.2cm、器高5.7cm。高台の畳付に板状圧痕あり。内・外面ともヘラミガキを行うが、内底はナデ。体部下位外面に指頭圧痕あり。

須恵質土器

片口（49）片口部を欠くが、特徴からみて片口と考えられる。口径32.0cm。内・外面ともナデ。

甕（64）口径29.4cm。口縁部ヨコナデ。肩部内面は表面が剝離し不明だが、外面はタタキ目痕を残す。

支脚（65）現存高10.0cm。胎土に砂粒が多い。手づくね成形。

白磁

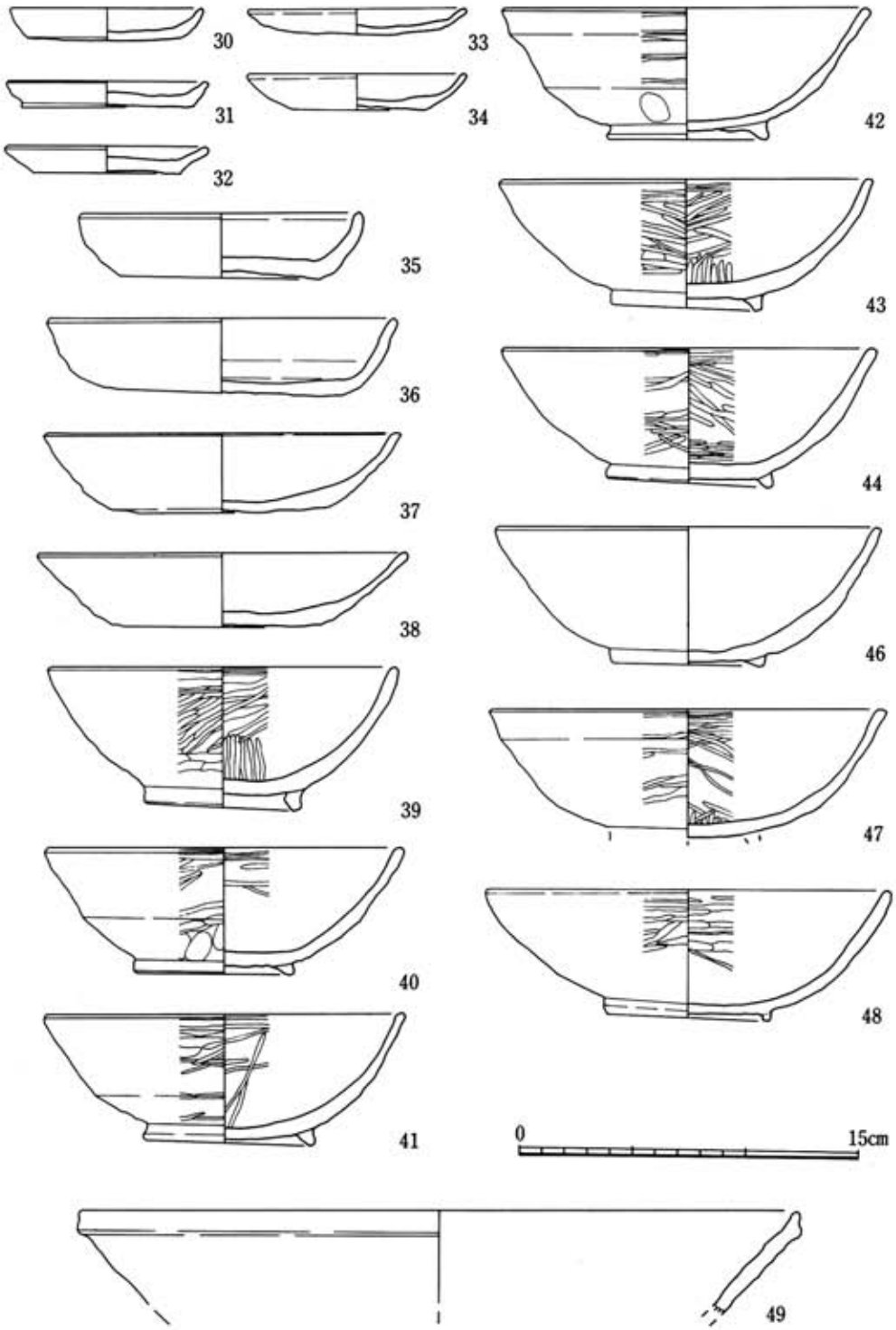
碗（50～52）50は口径16.6cm。口縁部を玉縁にする。51は口径18.2cm。体部内面に櫛で花文を描く。内底見込みに浅い沈線状の段をもつ。52は口径16.6cm、器高6.1cm。見込みに段を有し、内側の釉を輪状にカキとっている。底部外面に「十」字の墨書がある。1～3ともに胎土は灰白色で、釉は灰色の強い白色である。

皿（53・54）53は口径9.9cm、器高2.5cm。見込み部分の釉を輪状にカキ取っている。54は口径10.1cm、器高2.0cm。口縁部がいわゆる口禿げになっている。全面施釉を行い、釉はやや空色を帯びた白色である。

青磁

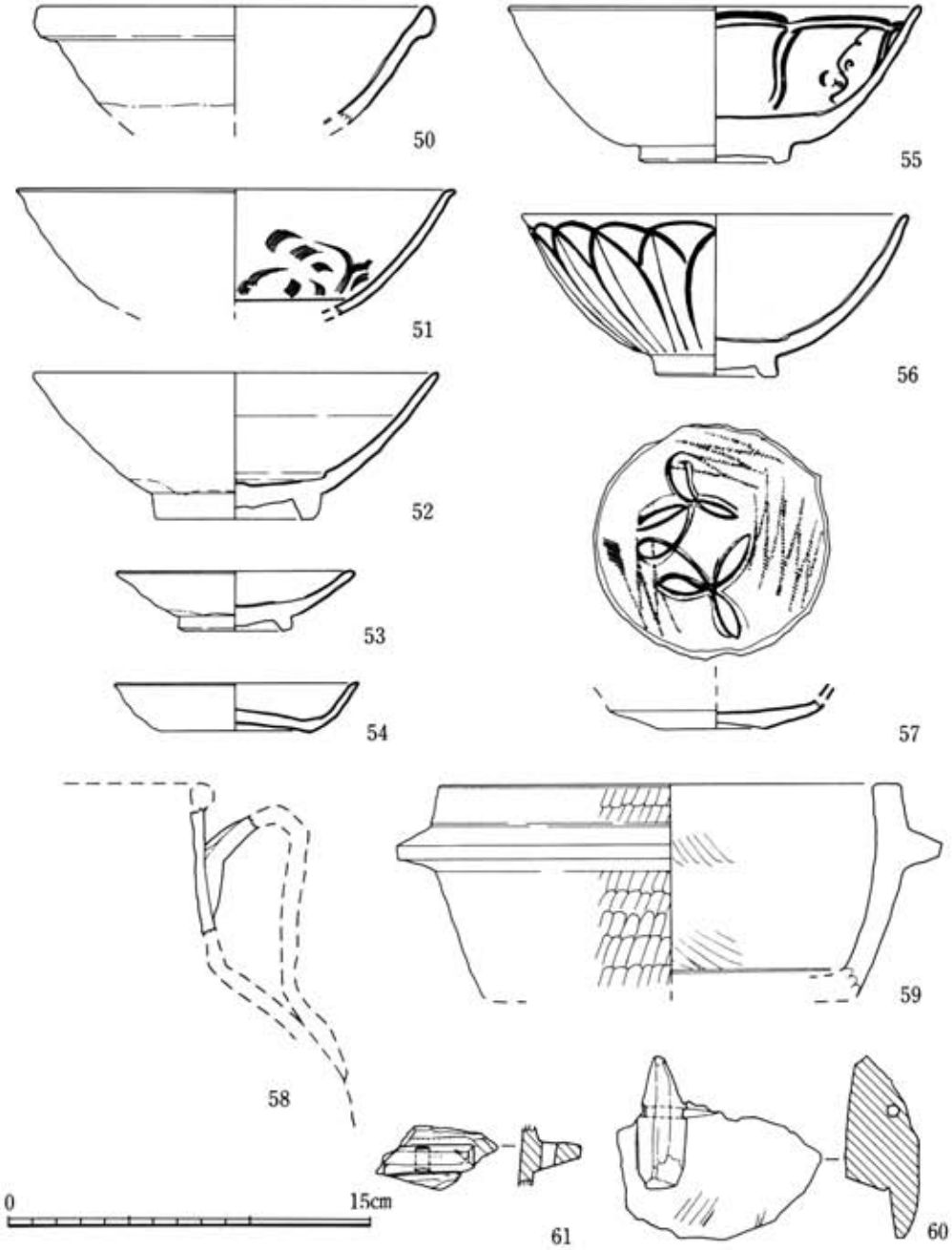
碗（55・56）55は口径17.3cm、器高6.5cm。2本の沈線によって体部内面を5分割し、その中に飛雲文、内底見込みにキノコ状の文様を3個片彫りしている。胎土は灰色、釉は灰緑色である。56は口径16.2cm、器高6.7cm。体部外面に鎬蓮弁を持つ。胎土は灰色、釉は濃緑色である。

皿（57）内面にヘラによる片彫りと、櫛によるジグザグ文様を有する。釉が厚いところに貫



第23図　ＳＤ605溝出土土器実測図

入が見られる。底部に円形の目跡が残る。



第24図　ＳＤ605溝出土陶磁器、滑石製品実測図

陶器

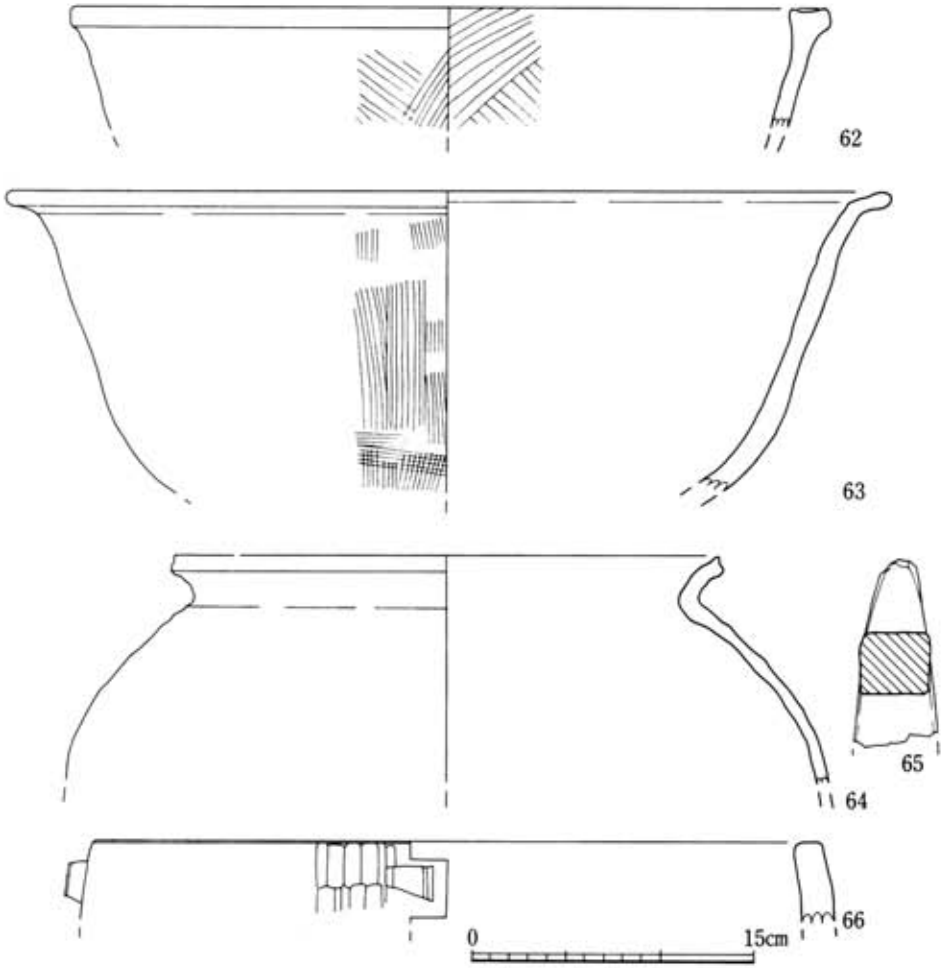
水注（58）取っ手部分だけ出土した。伝熊本県上益郡福田寺出土の褐釉水注に釉調、形状など類似する。

滑石製品

鍋(59･66)59は口径17.4cm、器壁1.2cm前後。口縁下に鍔が全周する。内面はノミで荒く削った後、ていねいに仕上げ、外面は上から下に向かってノミ痕が残っている。煤が厚く付着している。66は口径44.0cm。外面には上から下方向のノミ痕が残っている。

有孔鈕付製品（60・61）ともに石鍋の鍔部を再加工したものである。

以上の外に径2.0cm、厚さ0.9cmの碁石状の濃緑色の石製品が出土している。



第25図　ＳＤ605溝出土土器、滑石製品実測図

SD606出土土器（第26図67～85）

土師器

小皿(67～75)67は口径8.2cm、底径6.7cm、器高1.0cm。68～72は口径8.6～9.2cm、底径6.7～7.1cm、器高1.3～1.5cm。73～75は口径9.5～9.8cm、底径7.1～8.1cm、器高1.2～1.5cm。74は、ヘラ切り底、ほかは糸切り底。全て板状圧痕あり。

杯（78～80）78は口径14.9cm、底径11.0cm、器高3.8cm。79は口径15.3cm、底径11.7cm、器高3.0cm。80は口径16.1cm、底径10.7cm、器高3.1cm。78、79はヘラ切り底で、80は糸切り底。全て板状圧痕があり、内・外面ともにロクロナデ。

瓦器

皿（76・77）76は口径9.1cm、器高2.1cm。77は口径9.3cm、器高2.1cm。76、77とも内・外面ヘラミガキ。

碗(45.81～83)81は口径14.1cm、高台径7.7cm、器高6.6cm。内・外面ともヘラミガキ。82は口径15.0cm、高台径6.7cm、器高5.7cm。ヘラ切り底で板状圧痕あり。内面を沈線で4分割している。内・外面とも雑なヘラミガキ。83は口径17.4cm、高台径7.2cm、器高5.8cm。ヘラ切り底で、高台の畳付に板状圧痕あり。内・外面とも丁寧にヘラミガキを行う。45は口径17.7cm、高台径6.9cm、器高6.8cm。器面が荒れている。体部下位外面に指頭圧痕あり。

須恵質土器

鉢（85）口径31.5cm、現存高9.7cm。口縁部はヨコナデ、体部は、内・外面ともナデ。

青磁

合子（84）口径5.2cm。型押しでつくられた合子の蓋である。胎土は白色で、釉は淡青緑色である。内面は天井部のみ施釉されている。

SD608出土土器（第22図19）

土師器

皿（19）口径9.8cm、底径8.1cm、器高1.1cm。ヘラ切り底で、板状圧痕あり。

SE503出土土器（第27図86・87）

弥生土器

鉢（86）復元口径20.8cm、器高16.4cm。底部は平底、口縁部はく字型に大きく外反する。体部外面は下より上方へ荒いハケ目、内面はナデアゲ、口縁部はヨコナデを施す。胎土中に砂粒を多く含み、色調は灰褐色で胴下半部に10cm程の黒斑がある。井戸の西壁に投げ込まれた様な状態で出土したものでSE603に伴うものではない。

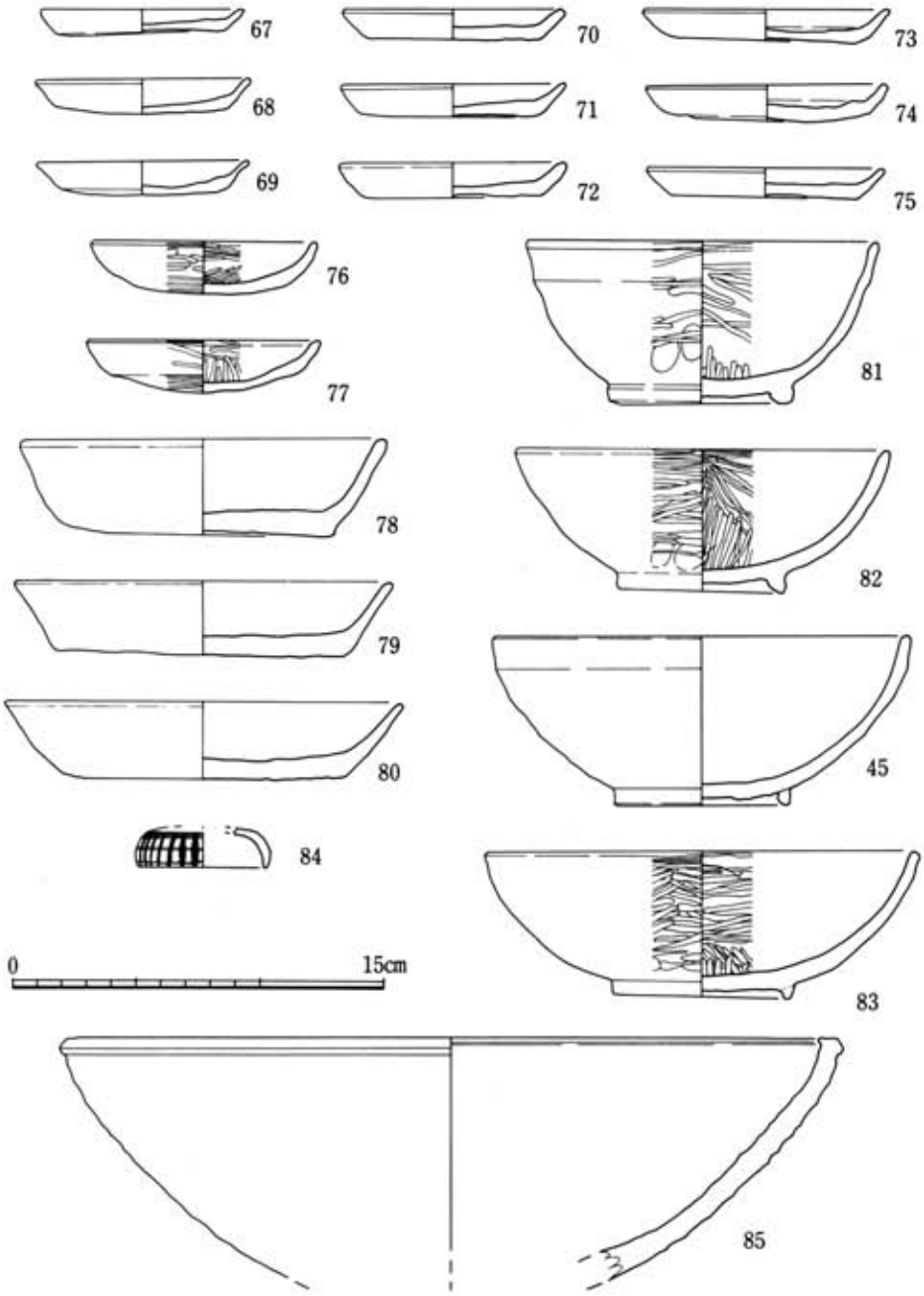
土師器

碗（87）口縁部と体部の一部を欠いている。高台の径8.1cm、底面はヘラ切り離しの後高台を貼付けている。色調は淡褐色で、胎土中に砂粒と雲母を含む。

SE504出土土器（第27図88～91）

土師器

小皿（88・89）88の口径10.2cm、器高1.4cm。89の口径10.7cm、器高1.6cm。共に底面はヘラ切離しで88には板目がついている。体部はヨコナデ、内底にナデを施す。色調は灰褐色で。胎



第26図　ＳＤ606溝出土土器実測図

土中に砂粒を含む。

甕（91）口縁部から体部にかけ6分の1程残存している。復元口径15.4cm、小形の甕で口縁部を外反させる。口縁部、体部共ヨコナデを施す。色調は灰褐色で、胎土中に砂粒を含む。

黒色土器

碗（90）口縁部より体部にかけ3分の1程残存している。復元口径15.4cm、口縁端部をわづかに外反させている。外面は淡褐色、内面は黒褐色の黒色土器Aである。内・外面ともヘラミガキを施している。

SE505出土土器（第27図92～97）

土師器

小皿（92・93）92は口径11cm、器高1.6cm。93は口径8.6cm、器高2.6cm。底面にはヘラ切痕と板目がついている。口縁部はヨコナデ、内底はナデを施す。色調は淡褐色で、胎土中に砂粒を含んでいる。

杯（94）口径11.6cm、器高3.8cm。底面はヘラ切痕と板目が残り、内底にはナデを施す。色調は淡褐色で、胎土中に雲母を含む。

碗（95・96）95は口径14.2cm、器高5cm、高台径7.6cm。96は口径17.5cm、器高8cm。底面に径11.8cm、高さ3.4cmと脚に似た高い高台を貼付けている。ともに底面には板目が残り、96は口縁内部に煤が付着する。体部と口縁部はヨコナデ、色調は淡褐色で胎土中に砂粒と雲母を含む。

鉢（97）口縁部と体部の$\frac{1}{8}$を残存する。復元口径20.6cm、復元器高約10cm。体部は直線的に延び、口縁部は外反する。体部内面は横、外面は縦方向のケズリ、口縁部はヨコナデを施す。色調は灰褐色。胎土中に砂粒を含む。

SE506出土土器（第27図98・99）

須恵器

壺（99）口径8.5cm、器高26.5cm、底径10.5cmの二耳付壺である。細く短い口頸部は外反し、丸い肩の体部両側に耳状の把手を持つ。色調は灰色で、胎土中わづかに砂粒を含む。

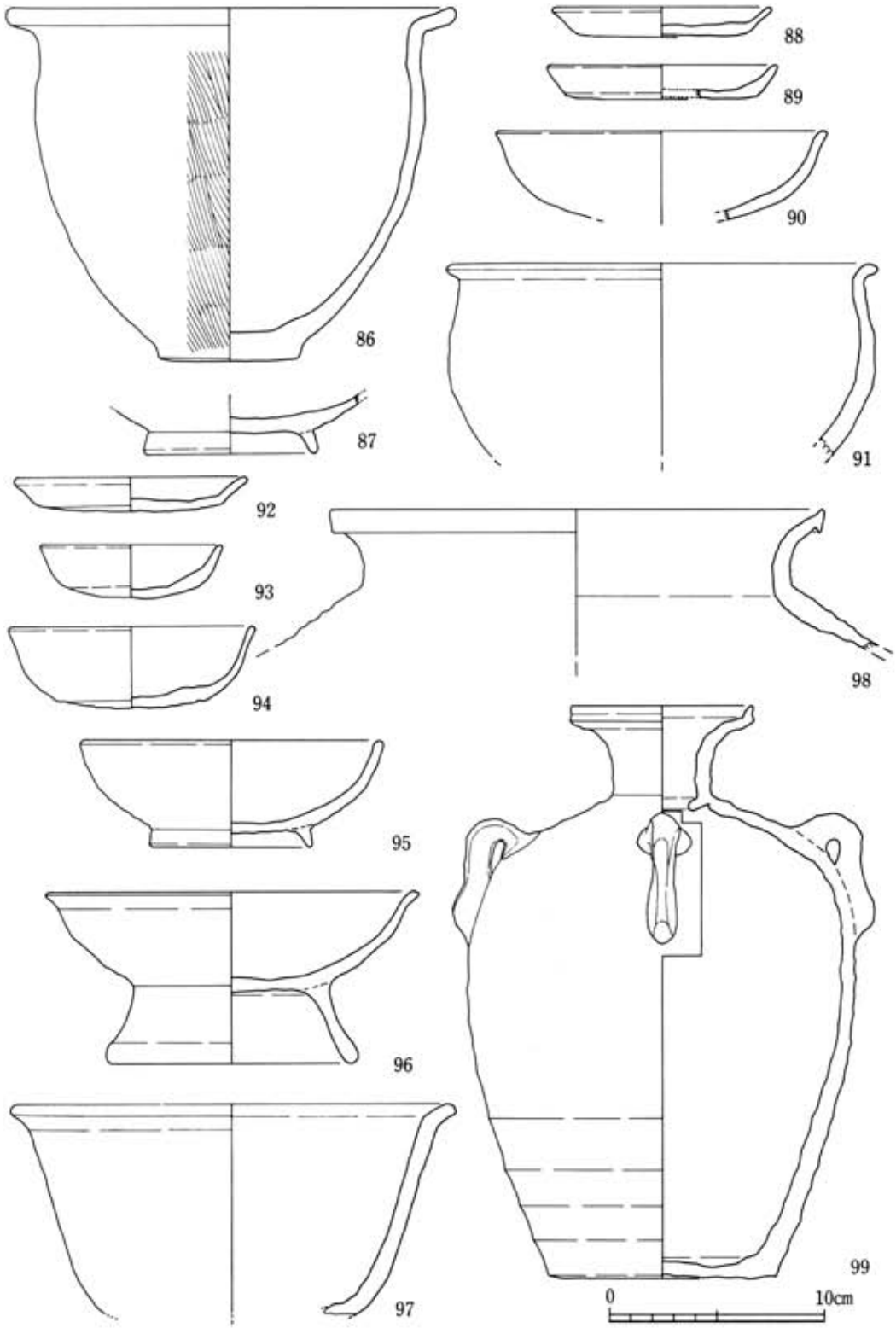
甕（98）口縁部の3分の1が残存する。復元口径22.9cm。肩部より口縁部にかけく字形に外反する。内部は同心円、外面は格子状のタタキを施す。色調は淡褐色で、焼成は悪く胎土中に砂粒を含む。

SE507出土土器（第28図100～128）

土師器

小皿（100～115）口径9.5～10.4cm、器高1.0～1.9cm。平均口径9.9cm、器高1.4cmである。底面はヘラ切痕と板目が残り、口縁部はヨコナデ、内底はナデを施す。114、115の口縁端部には成形時の凹みがある。色調は淡褐色～灰褐色で胎土中に砂粒を含む。

高台付小皿（117～118）共に3分の1程を残す。117は復元口径11.2cm、器高2.8cm。118は復



第27図　ＳＥ503～506井戸出土土器実測図

元口径11.8cm、器高3.2cm。ともに底面はヘラ切離しの後高台を貼付けている。内外面ともヨコナデを施す。色調は117が淡褐色、118は灰褐色で胎土中に雲母を含む。

杯（119～123）119～122は口径11.7～13.1cm、器高3.1～3.4cm、底面はヘラ切痕と板目が残る。体部はヨコナデ、内底部はナデを施す。123は口径14.8cm、器高4.3cmと他より一回り大きい。底面はヘラ切痕と板目が見られ、丸底に近く仕上げている。色調は淡褐色、胎土中に砂粒と雲母を含んでいる。

碗（124～126）125は口径16.2cm、器高5.9cm、高台径6.5cm。126は口径16.3cm、器高5.8cm、高台径5.8cm。底面はヘラ切離しの後高台を貼付けている。125の体部内面はヘラミガキ、口縁部と外面はヨコナデ、126の体部は内・外面ともヘラミガキ、口縁部はヨコナデを施す。口縁部は白磁に見られる玉縁状に仕上げ、126の底部には格子状の線刻がある。色調は淡褐色で胎土中に砂粒を含む。124は底面に高台を貼りつけていたと見られる。口径14.2cm、現存器高4.2cm。底面にヘラ切痕と板目が残る。表面は磨耗しており調整は不明。色調は淡褐色で、胎土中に砂粒と雲母を含む。

高杯（127）高杯の脚部のみ残存する。長さ18cm、中央での径3.5cm。外面は10面体に削り、内部は直径１mの棒抜きの空洞がある。上・下は明らかでない。色調は淡褐色、胎土中に砂粒と雲母を含む。

鉢（128）４分の１程残存する。復元口径18.2cm、器高約10.5cm。外面に粘土帯積み上げの痕跡が残る。体部外面はヘラケズリ、内面と口縁部はヨコナデを施す。色調は淡褐色で、胎土中に雲母を含む。

黒色土器

小皿（116）口径10.8cm、器高1.8cm。黒色土器Aで、土師器小皿より一回り大きい。底面はヘラ切離しで、内・外面ともヘラミガキを施す。

ＳＥ508出土土器（第29図129）

瓦器

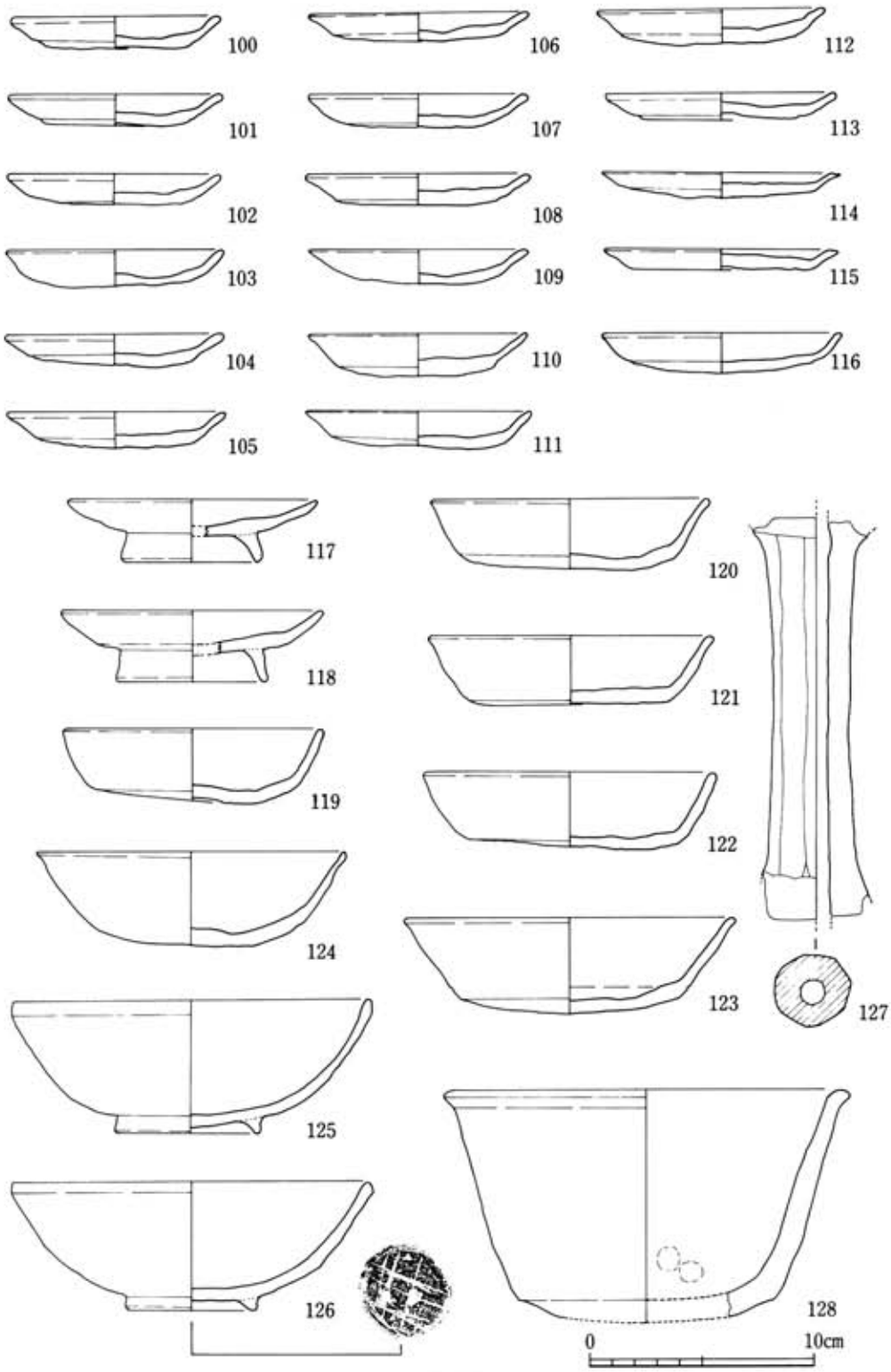
碗（129）口径15.6cm、器高5.3cm、高台径6.5cm。焼成は堅緻で、内外面とも横方向のヘラミガキを丁寧に施している。色調は内外面共体部以下は灰白色、口縁部は黒色で内面に重ね焼の跡が残る。

ＳＥ509出土土器（第29図130～133）

土師器

杯（130）口径14.8cm、器高3.2cm。底面に糸切痕と板目が残る。口縁部はヨコナデ、内面には指先によるナデを施す。色調は淡褐色、口縁部内面には煤が付着しており灯明皿として使用している。

有孔円盤（133）径6.2cm、厚さ0.6cm。杯か皿の底部を利用したと見られる紡錘車で、中央に



第28図　ＳＥ507井戸出土土器実測図

0.7cmの孔を有している。

瓦器

碗（131、132）131は口径16.8cm、器高5.5cm、高台径7.5cm。底面に底い高台を貼付けている。表面は磨耗しており調整は不明。内面に重ね焼の跡が残る。色調は淡灰色～黒灰色で、胎土中に砂粒、雲母を含む。132は口径16.4cm、器高5.7cm、高台径6.9cm。底面に断面四角形の高台を貼付けている。外面体部以下には指頭圧痕の上に横行するヘラミガキを施す。内面は灰黒色、外面は斜めに重ね焼きしていたと見られ、半分が白灰色、半分は黒灰色である。

ＳＥ510出土土器（第29図134）

土師器

鉢（134）口径22.8cm、器高は現状で11.2cm。底面に高台を貼付けていた痕跡がある。全体的に粗雑な造りで、口縁部と体部内面はヨコナデ、外面には粘土帯巻き上げの痕跡が明瞭に見られる。色調は淡褐色、胎土は精製され雲母を含む。

ＳＥ512出土土器（第29図135）

土師器

小皿（135）口径8.9cm、器高1.4cm。底面にヘラ切痕と板目が残る。口縁部はヨコナデ、内底はナデを施す。色調は淡褐色で、胎土中に雲母を含む。

ＳＥ513出土土器（第29図136～142）

黒色土器

碗（136）底面のみ残存する。黒色土器Ａである。底面に板目が残り、外にふんばる高い高台を貼付けている。外面は灰褐色、内面は黒色で胎土は精製され雲母を含む。

瓦器

碗（137～141）口径16.2～17.0cm、器高5.5～6.5cm、高台径6.6～7.4cm。焼成は堅緻で、137～140は体部内外面とも丁寧にヘラミガキを施している。141は外面体部に指頭による圧痕を残す。又137、139には内面に重ね焼の痕が、141、140の底面には×字状の刻みがある。色調は灰黒色～黒色で、胎土は良く精製している。

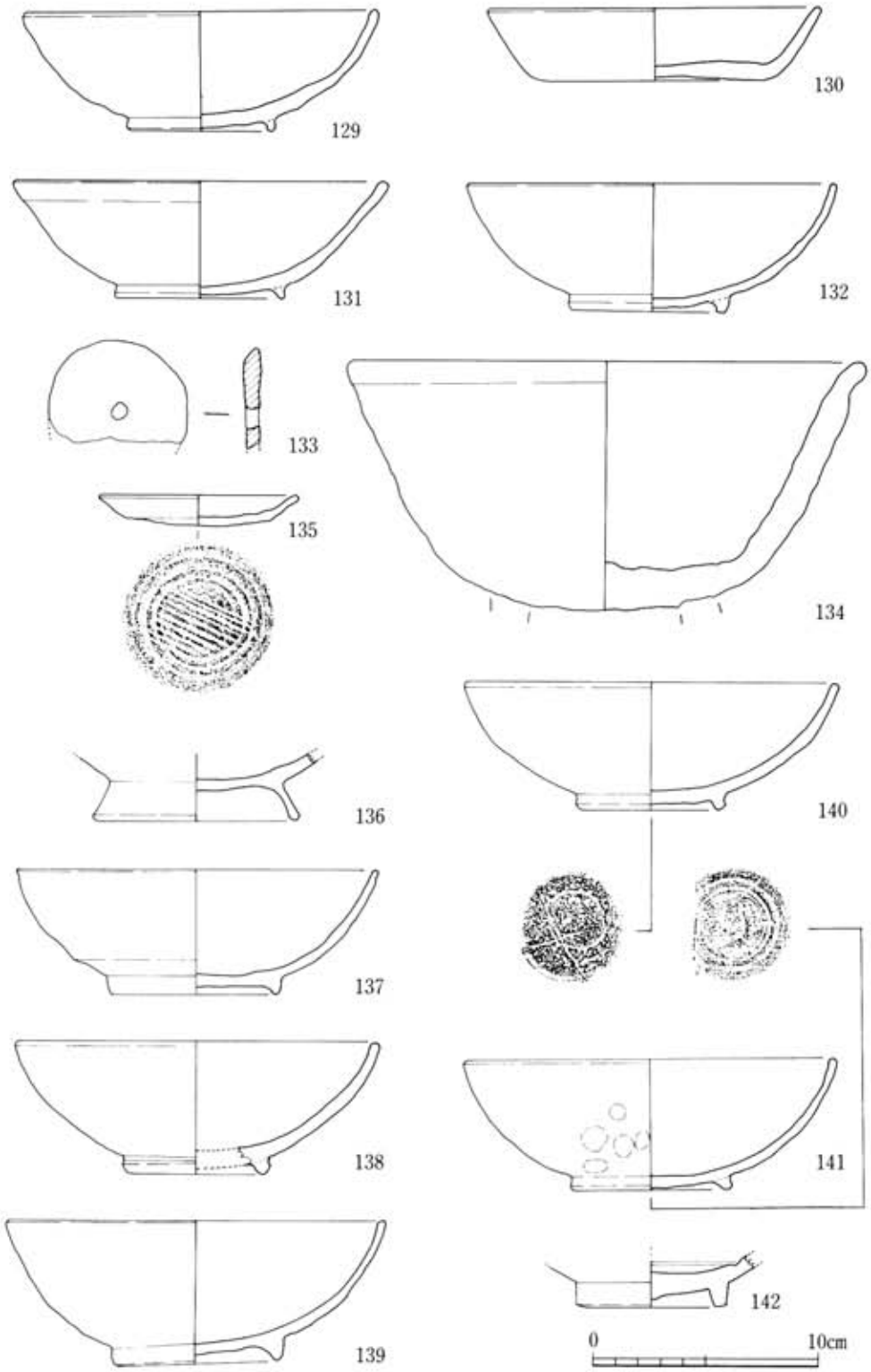
白磁

碗（142）底部と体部の一部が残存する。高台は径6.7cm、断面コ字形に削り出している。見込みに深い沈線をめぐらし、胎土は灰白色、釉は乳白色である。

ＳＥ517出土土器（第30図143～161）

土師器

小皿（143～149）口径9.5～10.5cm、器高1.2～1.6cm。底面にヘラ切痕と板目が残る。口縁部はヨコナデ、内底は指頭によるナデを施している。口径は143～147と148～149との間に差が見られ、前者の平均は9.6cm、後者は10.7cmである。色調は淡褐色～淡灰色で胎土は精製され、雲



第29図　ＳＥ508～513井戸出土土器、磁器実測図

母を含む。

杯（151～153）口径11.1～12.1cm、器高2.7～2.8cm。底面にはヘラ切痕と板目が残る。口縁部はヨコナデ、内底はナデを施す。色調は淡褐色で、胎土中に砂粒と雲母を含む。

碗(158、160)158の口径14.4cm、器高5.2cm、高台径7.4cm。160の口径14.6cm、器高5.3cm、高台径7.3cm。底面にはヘラ切痕と板目が残る。体部と口縁部は横ナデを施し、160の口縁端部はわずかに外反させる。色調は160は淡灰褐色、158は淡褐色で、胎土中に砂粒と雲母を含む。

黒色土器

小皿（150）口径11.2cm、器高1.5cm。黒色土器Ｂで、土師器小皿よりは一回り大きい。底面にはヘラ切痕が残り、裏表面とも丁寧に磨いている。胎土中に雲母を含む。

碗（154～157、159、161）口径14.1～14.8cm、器高5.4～5.7cm、高台径7.5～7.9cm。すべて黒色土器Ａで土師器碗と何ら変わらず、体部は内彎ぎみに上方へ延び、端部は丸くおさめている。底面に板目がつくものもあり、高い安定した高台を貼付ける。口縁部と体部内面はヘラミガキ、外面はヨコナデを施す。内面と口縁部は黒色、外面の体部以下は淡褐色～淡黄褐色で、胎土中に雲母を含む。

ＳＥ518出土土器（第31図162）

土師器

鉢（162）口縁部と体部の一部を残存する。復元口径41.6cm。口縁端部を折り曲げ、玉縁状にしている。体部内面はハケ目、外面はヨコナデを施す。色調は淡褐色で胎土中に砂粒を含む。

ＳＥ520出土土器（第31図163～165）

土師器

小皿（163）口径9.8cm、器高1.3cm。底面の切り離しは磨耗のため不明。口縁部は横ナデを施す。色調は淡灰褐色。胎土中に砂粒を含む。

瓦器

碗（164）底部のみ残存する。底部径6.4cm、底い高台を貼り付ける。底面にヘラ記号を線刻している。色調は内面淡灰色、外面は灰黒色である。

白磁

碗（165）玉縁状の口縁を持つ。色調は白灰色、釉は淡白灰色を帯びる。

ＳＥ526出土土器（第31図166～173）

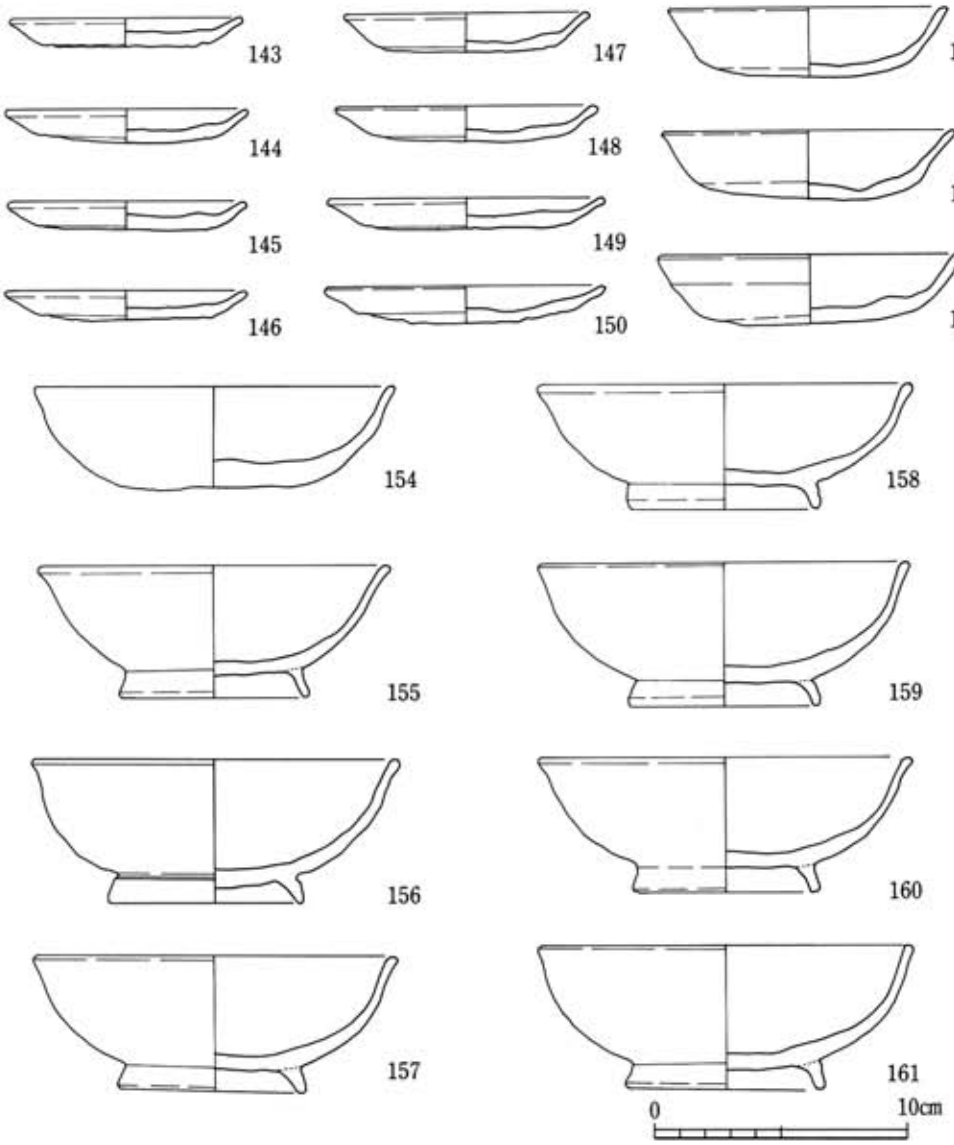
土師器

小皿(166、167)166は口径9.5cm、器高1.6cm。167は口径10.5cm、器高1.6cmで167が一回り大きい。ともに底面にヘラ切痕と板目が残る。166は磨耗しており調整は不明。167は口縁部はヨコナデ、底部内面はナデを施す。色調は淡褐色で、胎土中に雲母を含む。

碗（169～172)169の口径14.4cm、器高5.1cm、高台径7.2cm。底面にヘラ切り痕と板目が残

る。色調は淡明褐色で、胎土中に雲母を含む。170、171は底部と体部の一部を残している。170は底部に板目痕が残る。色調は明褐色で、胎土中に砂粒、雲母を含む。172は復元口径18cm、器高7.4cm。ヘラ切り離しの底面に高台径12.8cm、高さ2.9cmの脚に似た高い高台を貼り付ける。体部は内彎し、口縁端部は大きく外反する。全面に横ナデを施す。色調は淡灰褐色で、胎土中に砂粒と雲母を含む。

高杯（173）脚部のみ残存する。直径3.8cm、外面は8面体に削り、内部に約1cmの棒抜き跡の空洞がある。淡褐色で、胎土中に雲母を含む。



第30図　ＳＥ517井戸出土土器実測図

黒色土器

茶托形土器（168）底部のみ残存する。高台と体部との間に脚状のものが付く。内外面とも黒色の黒色土器Ｂで、胎土中に砂粒と雲母を含む。

ＳＥ527出土土器（第31図174～177）

土師器

小皿（174）口径10.2cm、器高1.8cm。底面にヘラ切り痕と板目が残る。口縁部はヨコナデ、内底はナデを施す。色調は淡褐色で、胎土中に砂粒と雲母を含む。

壺（175）復元口径7.6cmの小型の壺である。内外面ともヨコナデを施す。色調は灰褐色、外面に煤が付着している。

黒色土器

碗（176、177）176は口径11.8cm、器高4.6cm、高台径6.2cm。177は口径11.4cm、器高4.4cm、高台径6.1cm。小型の黒色土器碗Ｂである。底面にはヘラ切り痕と板目が残る。内外面ともヘラミガキを施し、177の底面に×印を線刻している。色調は黒色～灰黒色で、胎土中に雲母を含む。

ＳＥ528出土土器（第31図178～180）

土師器

小皿（178）口径9.8cm、器高1.3cm。底面は糸切り痕と板目が残る。口縁部は横ナデ、内底はナデを施す。色調は灰褐色で、胎土に砂粒と雲母を含む。

瓦器

碗（179）復元口径16.9cm、器高4.9cm、高台径８cm。体部内面と口縁部はヘラミガキを施すが、外面は粗雑に仕上げている。色調は外面灰黒色、内面灰褐色で、胎土中に砂粒と雲母を含む。

白磁

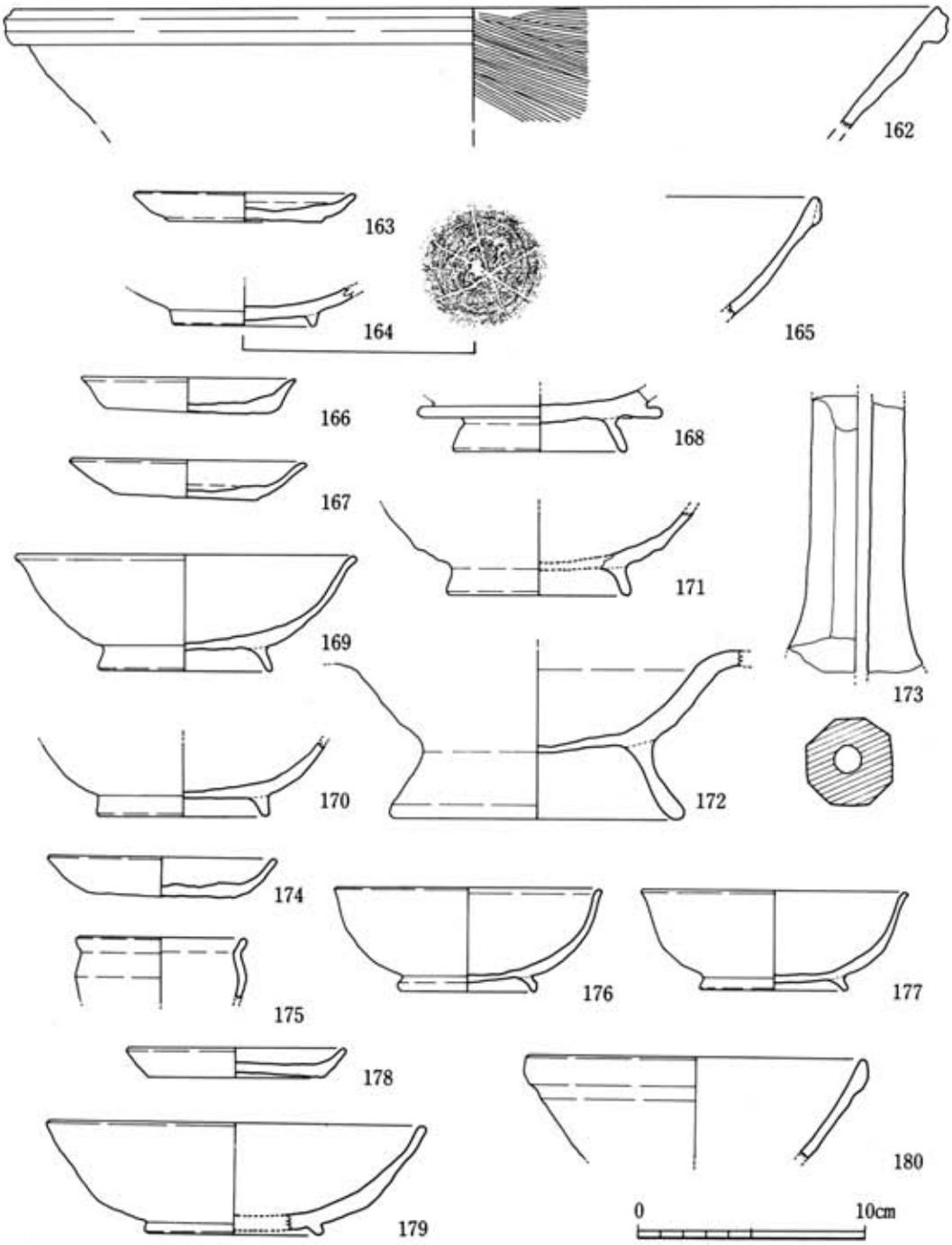
碗(180)復元口径15cm。口縁部は小さな玉縁状になる。胎土は濁白色、釉は明灰緑色である。

ＳＥ532出土土器（第32図181～183）

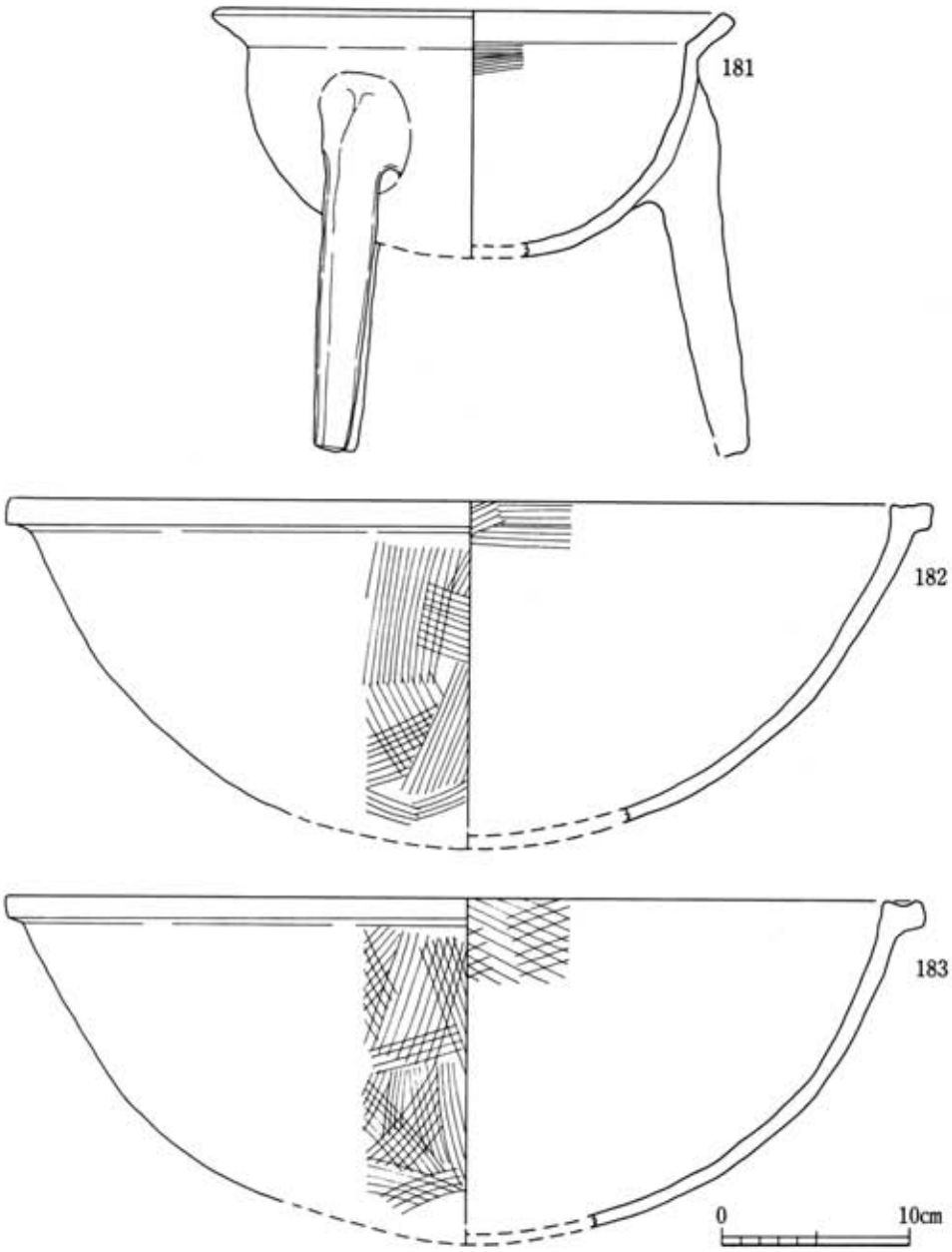
土師器

三足付鍋（181）口径28cm、器高23.5cm、鍋部の器高13.1cm。鍋の底部から体部にかけては丸く、口縁部はく字形に外反させる。鍋部の体部より、長さ14cm、厚さ2.8cmと長くしっかりした足部を付けており一本が完存する。口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ、内面に一部ハケ目が残る。外面全体に煤が厚く付着する。色調は暗褐色で、胎土中に砂粒を含む。

鍋（182、183）底部を欠いている。182は口径49.2cm、復元器高18cm。183は口径49.8cm、復元器高18.2cm。底部は丸底で、体部は内彎し、口縁部は平坦に仕上げる。口縁部の平坦面には縄目を転がし、文様を付けている。体部内外面はハケ目、口縁部はヨコナデを施す。外面全体には煤が厚く付着している。暗褐色で、胎土中に砂粒を多く含む。



第31図　ＳＥ518～528井戸出土土器、磁器実測図



第32図　ＳＥ532井戸出土土器実測図

ＳＥ603出土土器（第33図184、185）

瓦器

碗（184）復元口径16cm、器高4.6cm、高台径6.6cm、焼成は堅牢で内外面とも丁寧にヘラミガキを施す。内外面共灰黒色で内面に重ね焼きの跡がある。

褐釉陶器

壺（185）底部と体部の一部が残存する。底径7.8cm。底面に底い高台を削り出している。表

面と底面に緑灰色の釉がうすくかかる。

ＳＥ604出土土器（第33・34図186～210）

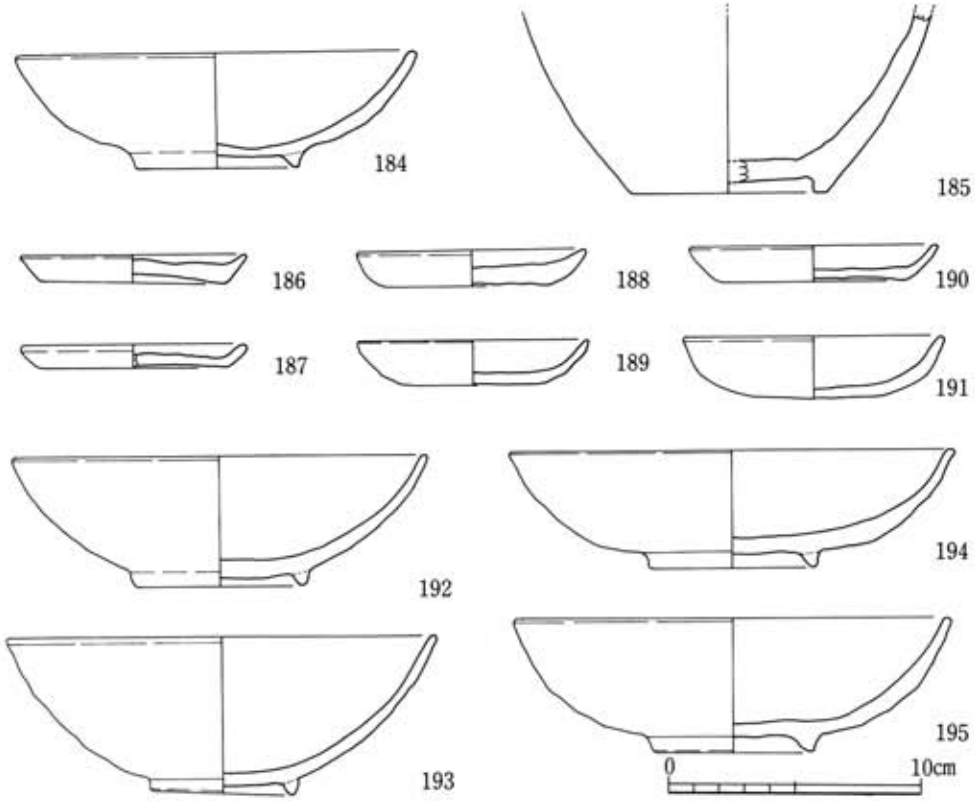
土師器

小皿（186～189）口径9.1～10.2cm。器高1.0～1.8cm。186～188は底面に糸切り痕、186、188に板目が残る。189の外面はヘラミガキを施しており瓦器に近い。188は淡褐色、他は淡灰色で、188は胎土中に砂粒を含む。

碗（192）口径16.6cm、器高5.2cm、高台径6.8cm。底面に断面が丸い高台を貼付けている。内外面ともヘラミガキを施し、瓦器の焼成不良品とも見られる。色調は淡赤褐色～淡褐色で、胎土中に砂粒を含む。

鍋（208）口縁部の一部を残存する。復元口径47cm。口径部はく字型に折り曲げており体部にかけしだいに厚くなる。表面は磨耗しており調整は不明。内外面とも灰褐色で、胎土中に多くの砂粒を含む。

男根状土製品（207）茎部を欠損しており現状での長さ4.7cm、幅1・7cm、厚さ1.1cm。手づくねで、扁平な造りであるが、細部にわたり丁寧に仕上げている。胎土は土師器と変わらず淡褐色で、胎土中に雲母を含んでいる。



第33図　ＳＥ603、604井戸出土土器実測図

円盤状土製品（204）径4.5cm、厚さ１cmの円盤状の土製品である。表面に籾と繊維質の圧痕がある。色調は灰黒色で胎土中に砂粒を含む。

瓦器

小皿（190）口径9.8cm、器高1.4cm。底面に糸切痕が残る。口縁部はヨコナデ、内底はヘラミガキを施す。色調は灰白色。

杯（191）口径10.3cm、器高2.3cm。内面は指押えのあとヘラミガキ、外面もヘラミガキを施す。口縁部と内底部は灰黒色、他は灰白色。胎土中に砂粒を含む。

碗（193～195）口径17.2～17.6cm、器高4.7～6.3cm、高台径5.9～6.6cm。193は断面三角形の小さな高台を貼付け、体部は内彎する。器面は磨耗しており、調整は不明。色調は灰黒色で、胎土中に砂粒を含む。194、195は杯のような底い体部に厚い高台を貼付けている。内外面ともヘラミガキを施すが粗雑な造りである。色調は灰白色～灰黒色で、胎土中に砂粒、雲母を含む。

白磁

碗（196～203）ＳＥ604出土磁器はすべて白磁である。196～200は細く高い高台を削出している。口縁部を外反させ、端部を水平にするもので、体部内面に櫛描文のあるもの（196、199）とないものとがある。内底見込み部分に浅い沈線をめぐらしている。胎土は灰白色で、釉は薄く淡灰白色～淡白褐色である。202も高い高台を削り出し、見込み部分に沈線をめぐらすが、胎土は前者に比べ白色で、釉は乳白色である。203は底い高台を削り出している。胎土、釉とも灰白色である。

褐釉陶器

壺(206)短い口縁部分のみ残存する。口径11.6cm、釉は青緑色で、口縁部内側に目跡が残る。

滑石製品

石鍋（209）底部を欠くが体部以上ほぼ全周する。滑石製の石鍋で、口径22.9cm、器壁1.8cm。体部上面に小さい膀部をもつ。丁寧な造りで、口縁内部はケズリのあと研磨され、膀部以下は縦方向に削っている。体部外面には煤が付着する。

分銅型石製品(210)長さ5.7cm、最大幅4.4cm、厚さ3.5cm、重さ120ｇ、滑石製の重りである。上部に0.4cmの釣り下げるための穴を穿っている。

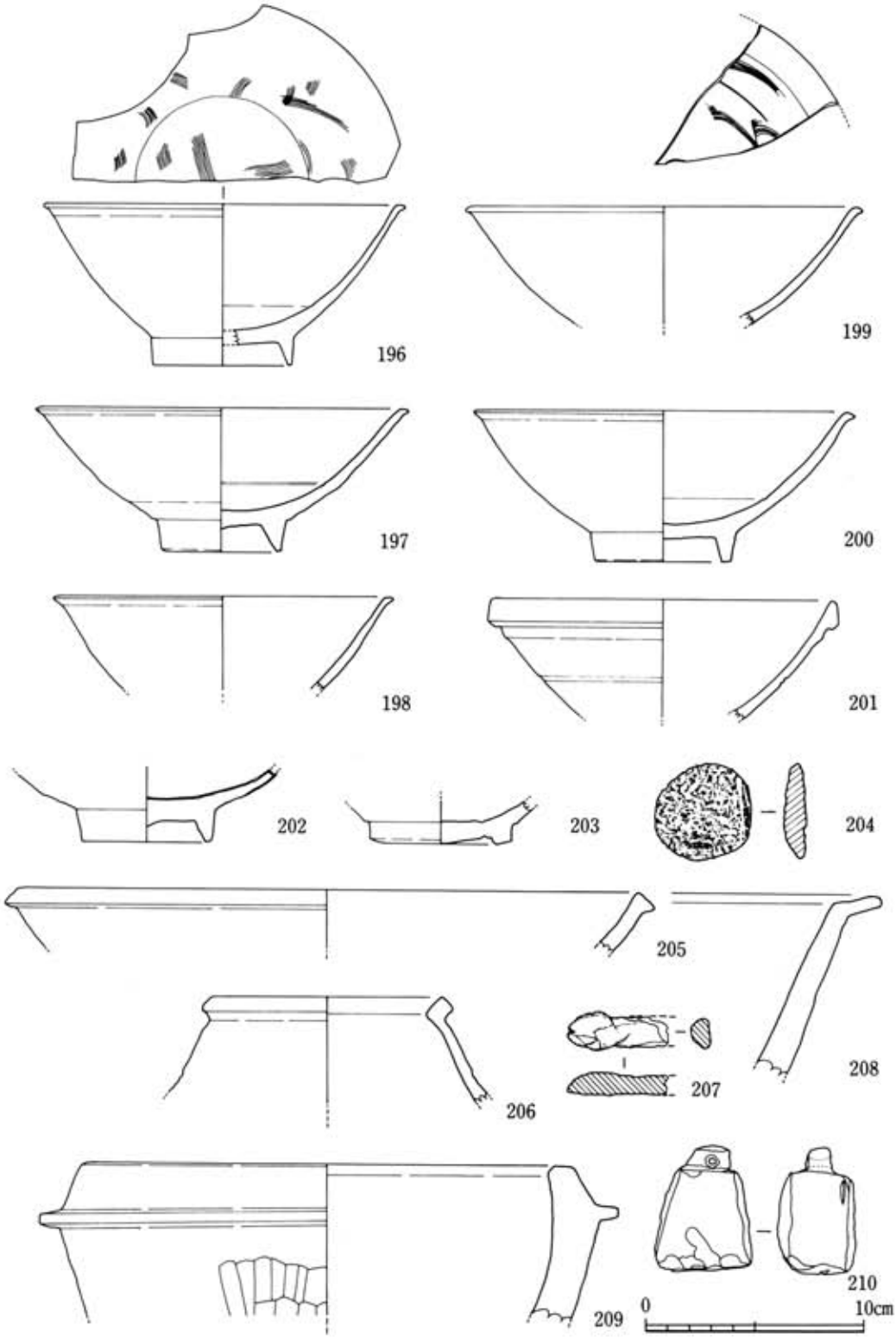
須恵質土器

片口(205)口縁部の一部が残存する。復元口径30.5cm、内外面ともヨコナデを施す。色調は灰褐色、胎土中に砂粒を含む。

ＳＥ605出土土器（第35図211～217）

土師器

小皿（211～213）口径9.0～9.2cm、器高1.1～1.3cm。底面には糸切痕と板目が残る。口縁部はヨコナデ､内底はナデを施す。明褐色で、胎土中に砂粒、雲母を含む。



第34図　ＳＥ604井戸出土陶磁器、滑石製品実測図

杯（214）復元口径14.5cm、器高3.7cm。底面には糸切痕が残る。口縁部はヨコナデ、内底ナデを施す。口径に比べ底径が小さく、体部が内彎する。色調は灰褐色で、胎土中に雲母を含む。

瓦器

碗（215、216）215の口径14.9cm、器高5.5cm、高台径6.6cm。216は口径16cm、器高5.9cm、高台径6.6cm。焼成はともに堅牢であるが調整は対称的である。215は底面に板目痕があり、断面三角形の小さい高台を貼付けている。体部内、外面共横行する丁寧なヘラミガキを施す。胎土は精製され、体部外面と口縁部は黒色、内部は灰色である。216は太い高台を貼付け、口縁部と内面にヘラミガキを施す。外面体部は指頭による圧痕が残り、胎土中に砂粒を含んでいる。

白磁

碗（217）口縁部の４分の１が残存する。復元口径15.4cm。口縁部を玉縁状に造る。胎土は灰白色、釉は淡緑白色で、外面体部以下は施釉されない。

ＳＥ608出土土器（第35図218、219）

瓦器

碗（218、219） 218は口径16.9cm、器高6.1cm、高台径6.6cm。低く小さい高台を貼付けている。高台の内外面はヨコナデ､体部内外面と口縁部は横行するヘラミガキを丁寧に施している。体部内外面は灰白色、他は灰黒色、内面に重ね焼の跡が残る。219は口径17.4cm、器高5.6cm、高台径6.8cm。底面に板目痕が残り､低い高台を貼付けている。表面は磨耗しており調整は不明。内面に重ね焼の跡が残る。

ＳＥ609出土土器（第36図220～232）

土師器

杯（220）口径12.8cm、器高2.8cm。底面は糸切痕が残る。口縁部はヨコナデ、内底部はナデを施す。色調は明褐色で、胎土中に砂粒を含む。

白磁

碗（221～224）221、222は口縁部を玉縁状にする。221の復元口径は13.4cm、222は16.1cm。胎土は淡灰白色、釉は221が灰白色、222は緑白色である。223は口縁端部を外反させ、水平にする。復元口径17cm、身込み部分に沈線をめぐらしている。胎土は灰白色、釉は灰白色である。224は底部のみ残存する。底部径5.6cm、見込み部分に沈線をめぐらし、底部は低い高台を削り出している。胎土は淡黄白色、釉は灰白色である。

皿（225）口径10.6cm、器高2.9cm、底部径4.6cm。底い高台を削り出し、口縁端部を外反させる。胎土は灰白色、釉は緑白色である。

合子（226）天井部のみが残存する。器壁は薄く、表面に花文様が施される。胎土は灰白色、釉は緑がかった白色である。

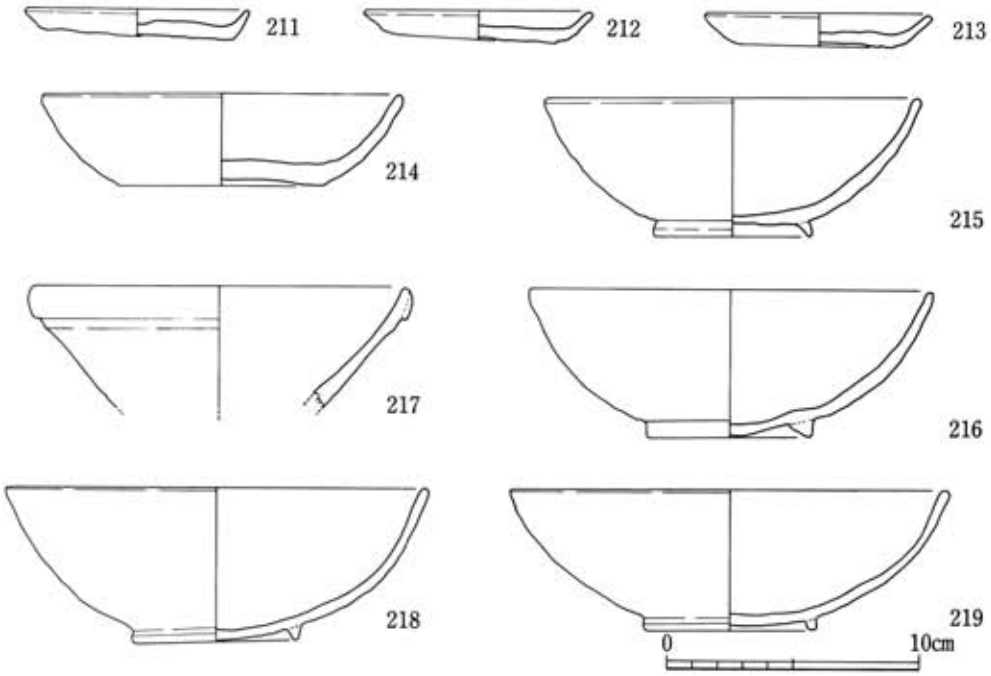
青磁

碗（228～231）230、231は龍泉窯系の青磁で、230は口径16.8cm、器高6.7cm、底径6.6cm。底い高台を削り出している。体部内面にヘラ描きの沈線により体部内面を五つに区画し、その中にうず状の花文を描いている。見込み中央に「河濱遺範」のスタンプを押す。胎土は灰白色で、釉は緑青色、底部に焼台の痕跡がある。231は形態的には230と同じであるが無文である。胎土は灰白色で、釉は厚く青緑色をしている。228、229は同安窯系の青磁である。229は底い高台を削り出している。内面には、見込み部分に沈線をめぐらし、内面にヘラと櫛により花文を描いている。胎土は灰色、釉は青緑色である。244は口縁下と見込み部分に沈線をめぐらし、内面に櫛により花文を描いている。胎土は灰色、釉は青灰色である。

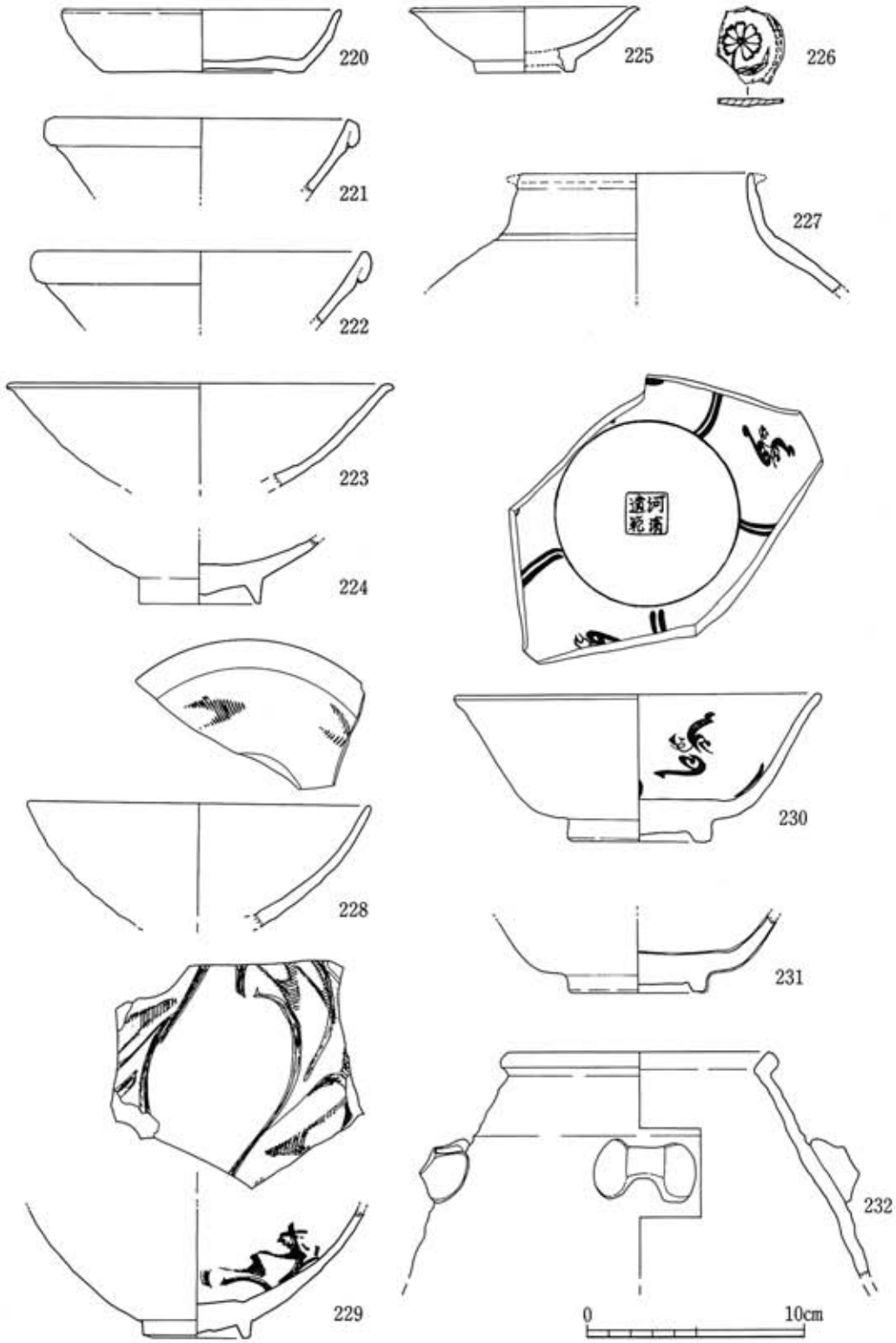
壺（227）口縁部より肩部にかけ４分の１程残存する。復元口径11.9cm。頸部は内傾し、口縁部を外側に肥厚くする。胎土は燈色で釉は風化し灰黄色である。

褐釉陶器

壺（232）口縁部より体部にかけて４分の１程残存する。四耳壺になると見られ、く字形に外反する短い口縁部を持つ。口縁内側に重ね土の目跡が残り、胎土は明褐色で、黄緑色の釉がう



第35図　ＳＥ605、608井戸出土土器、磁器実測図



第36図　ＳＥ609井戸出土土器、陶磁器実測図

すくかかる。

ＳＫ503出土土器（第37図233～239）

弥生土器

甕（233～237）233～235の口径は30～39cm。口縁部と体部の一部を残存する。口縁部はく字形に外反する。233は口縁下に断面三角形の凸帯を貼付けている。体部内面と口縁部はナデ、234、237の体部外面は斜方向のハケ目を施す。236は口径15cm。く字形に外反する口縁部を持つ。237は甕の底部で、平底である。色調はいずれも明褐色で、胎土中に砂粒を含む。

鉢（238、239）238は口径12.2cm、器高６cm。いずれも平底である。色調は明褐色、胎土中に砂粒を含んでいる。

ＳＫ514出土土器（第37図240）

白磁

碗（240）底部より体部にかけ残存する。高台径6.3cm。高台は断面コ字型に浅く削り出している。体部内面は５つに区画し、その間に花文を配している。見込み部分に沈線をめぐらす。胎土は灰白色、釉は乳緑色である。

ＳＫ520出土土器（第37図241）

土師器

三足付盤（241）口径12.5cm、器高3.2cm。底面はヘラ切痕が残り、口縁端部より1.5cmの所に沈線をめぐらし、全体を三等分に割付を行い簡素化した獣足を貼り付けている。獣足の高さは約２cm、他の土器に見られるのとは逆である。口縁部はヨコナデ、内底部はナデを施す。色調は淡褐色で、胎土は精製され胎土中に雲母を含む。

ＳＫ603出土土器（第37図242～244）

土師器

小皿（242）口径9.8cm、器高1.4cm。底面にヘラ切痕と板目が残る。口縁部はヨコナデ、内底ナデを施す。色調は淡褐色で、胎土中に砂粒と雲母を含む。

黒色土器

碗（243、244）243は黒色土器Ｂ、244は黒色土器Ａである。243は口径15cm、器高6.2cm、高台径7.3cm。底面はヘラ切の後、底く厚い高台を貼り付けている。口縁部はわずかに外反し、体部は内外面とも横方向に丁寧なヘラミガキを施す。内底部に×字状に浅い沈線を刻む。内外面とも黒色で、胎土中に雲母を含む。244は口径15cm、器高６cm、高台径8.6cm。底面に板目が残り、口縁端部は強く外反させる。体部外面はヨコナデ、内面は横方向のヘラミガキを施す。外面は淡灰褐色、内面は灰黒色。胎土中に雲母を含む。

ＳＫ606出土土器（第37図245）

白磁

碗（245）口径16.8cm、器高6.6cm、高台径6.0cm。薄く高い高台を削り出し、口縁端部は外反する。内面上部と見込み部分に浅い沈線をめぐらす。胎土は灰白色で、釉は浮白色。

ＳＫ608出土土器（第37図246）

青磁

碗（246）底部と体部の一部を残す。高台径6.3cm、底い高台を削り出している。内面見込みにワラビ状の草花文を描いている。体部は一部残存しており内面は５つに区画し、その中に飛雲文を配していると見られる。胎土は灰色で釉は青緑色である。

ＳＪ501甕棺（第37図248、249）

上甕（249）復元口径66.4cm、器高は下半分が破壊されており不明。口縁部はくの字形に外反し、肩の張らない胴部へと続いている。頸部と胴部２ヵ所に、幅広い凸帯をめぐらしている。頸部の凸帯は斜方向のタタキ、胴部の凸帯は格子状のタタキを施す。口縁端部は格子状のタタキ、頸部は横交向のハケ目、胴部外面は縦方向のハケ目、内面は横、斜方向のハケ目を施す。色調は明褐色で、胎土中に砂粒を含む。

下甕（248）復元口径72.8cm、底部を打ち欠いており、器高は不明。口縁部はくの字形に外反し、肩の張らない胴部に続く。頸部と胴部２ヵ所に幅広い凸帯を３条めぐらす。凸帯の上面には、横、斜方向のタタキを施す。又口縁端部は格子状のタタキ、胴部外面はタタキの後にハケ目、内面は横、斜方向のハケ目を施している。色調は明褐色で、胎土中に砂粒を含む。

ＳＪ502甕棺（第37図247）

下甕（247)復元口径71.2cm、器高89.6cm、底径9.4cm。器形はくの字形に外反する口縁部から肩の張らない胴部へと続き、底部は小さい平底となる。頸部と胴部に幅広い凸帯を４条めぐらしており、凸帯の上面には横、斜方向のタタキを施す。又口縁端部はタタキの後ハケ状の施文具先端で刺している。胴部外面はタタキの後にハケ目、内面は横、斜方向のハケ目を密に施している。色調は赤褐色で胎土中に砂粒を含む。

ＳＰ501出土土器（第37図250～253）

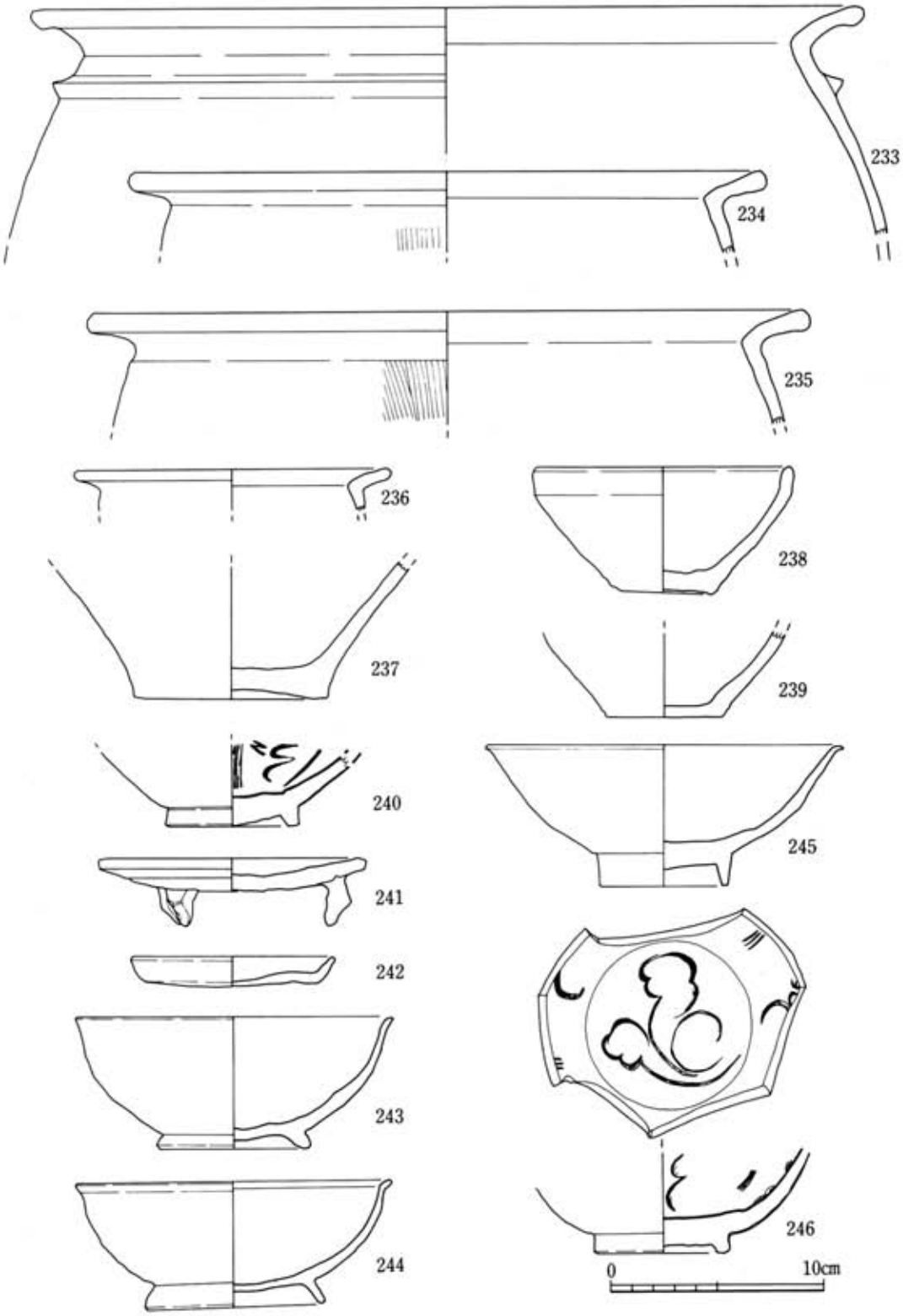
土師器

小皿（250、251）250は口径8.7cm、器高1.3cm。底面に糸切痕を有す。251は口径９cm、器高1.6cm、底面は糸切りと板目痕を有す。共に口縁部はヨコナデ、内底はナデを施す。色調は灰褐色、胎土中に砂粒と雲母を含む。

瓦器

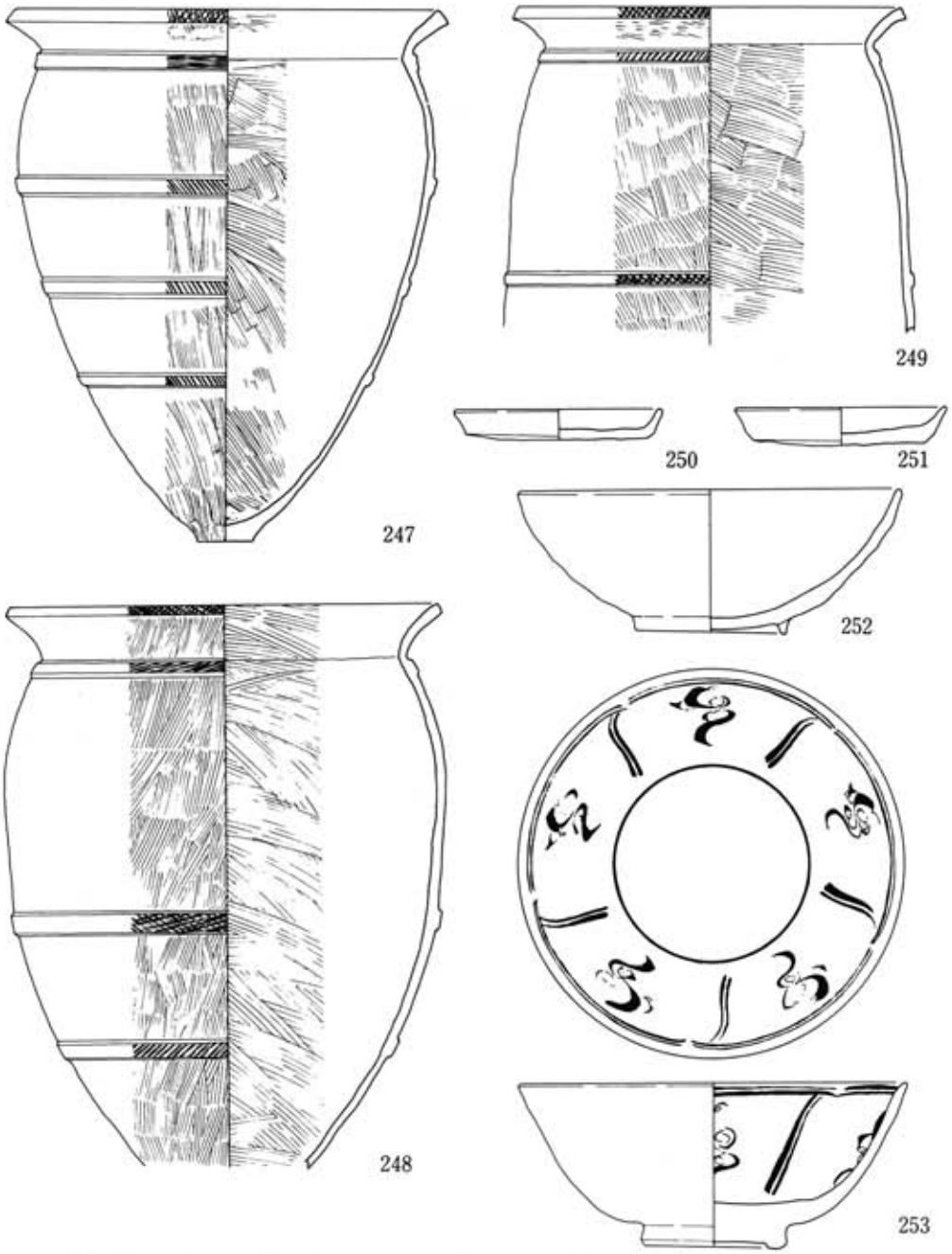
碗（252）口径16.2cm、器高６cm。底面は糸切りと板目痕を有し、底い断面三角形の高台を貼り付けている。内面に重ね焼きのあとがある。色調は灰黒色で、一部灰白色の部分があり、胎土中に砂粒と雲母を含む。

青磁



第37図　土壙出土土器、磁器実測図

碗（253）口径16.3cm、器高6.9cm、底径6.1cmの龍泉窯系の青磁である。底部は底い削り出しの高台を持ち、釉のかかる底部付近には寛入が見られる。内面体部は２本の沈線で５区に区画し、その中に飛雲文を施している。釉は暗緑色である。



第38図　甕棺墓、土壙墓出土土器・磁器実測図（甕棺1/12・土壙墓出土土器・磁器1/3）

III　総　　括

尾崎利田遺跡は、尾崎西分集落の西方一帯約35,000㎡と広範囲に広がる遺跡である。今回は昭和53年度調査を行ったV区、VI区について報告した。遺構、遺物は先に述べた通り豊富な内容を持っており、それぞれについてまとめることとする。

遺構は住居跡８、掘立柱建物跡10、井戸32、土壙27、溝14、甕棺墓２、土壙墓１を検出した。

弥生時代の遺構はＳＢ504住居跡、ＳＫ503土壙、ＳＪ501、502甕棺墓がある。ＳＢ504、ＳＫ503は弥生時代中期後葉である。ＳＢ504は平面形が方形の住居跡で長軸3.92m、短軸2.29m、床面積は11.3㎡である。ＳＫ503は上面が削平されており、本来は東西に延び溝状になると見られる。ＳＪ501、502は甕棺墓が多く出土する当地方でも数少ない弥生時代後期西新式の甕棺墓である。

古墳時代の遺構はＳＢ502、506、507住居跡がある。平面形は方形で、ＳＢ502は長軸５m、短軸4.36m、床面積約18.8㎡と標準的な大きさである。高杯、小形丸底壺、器台が出土しており、古墳時代前期の住居跡である。

平安時代前期の遺構はＳＥ506井戸がある。上面の径1.86×1.6m、下面の径1.33×1.29m、深さ0.95mの単掘りの井戸である。井戸の底より耳付の壺[(1)]、甕が出土した。

平安時代後半～鎌倉時代前半になると遺構の数は多くなる。掘立柱建物跡、溝、井戸、土壙のほとんどがこの時期のもので、尾崎利田遺跡の主体はここにある。

この時期の井戸は40基出土した。V、VI区全域に見られるが、V区に多く、VI区はＳＤ605を境として南側には検出されない。井戸の形態についてはＩ～III類に分類したが、V区にＩ、II類が、VI区にＩ、III類が出土した。出土遺物はV区の井戸がヘラ切り底の土師器、黒色土器が多く、VI区の井戸は糸切り底の土師器、瓦器、磁器が出土した。

掘立柱建物跡は10棟を検出したが、時期的には明らかでない。VI区のＳＢ601、602の柱穴より瓦器片が出土しており11世紀以降の建物と見られる。

溝は14条検出したが、この頃の溝として把握できるのはVI区の溝である。糸切り底の土師器、瓦器、磁器を出土した。又ＳＰ501は集落内より出土する墓として注目される。小規模の土壙墓であるが土師器小皿２、瓦器碗１、青磁碗１の副葬があった。

このように、弥生時代～平安時代の遺構は、V区に多く、平安時代末～鎌倉時代になるとVI区に移る傾向になる。

次に遺構の大半を占める平安時代後半～鎌倉時代前半の遺物についてふれてみたい。

県内でのこの時期の調査例としては大和町西山遺跡[(2)]、三日月町戊遺跡[(3)]、三田川町下中杖遺跡[(4)]、武雄市みやこ遺跡などがあり、平野部の調査例の増加とともに遺跡の数も増えているが、遺物

の研究は緒についたばかりである。

そこで尾崎利田遺跡の出土遺物と共通する形態、手法をもつ大宰府史跡の調査例[5]、及び福岡南バイパス御笠川南条坊遺跡の調査例[6]の成果をもとに論を進めることとする。

尾崎利田遺跡より出土する平安時代後半～鎌倉時代前半の遺物は土師器、黒色土器、瓦器、陶器、磁器などがあり、これらは、形態的にⅠ～Ⅵ類に分けることができる。

Ⅰ類はＳＫ603土壙出土土器があげられる。土師器小皿１、黒色土器碗２が出土した。土師器小皿はヘラ切り底で、口径9.8cm、器高1.4cm。黒色土器碗は黒色土器Ａ、Ｂ各１点である。器壁は厚く、口縁端部を外反させ、安定した高台を貼付けている。黒色土器としては古い形態の特徴をもっている。

大宰府関連の調査では太宰府ＳＥ1083及び五条１－２Ｃ類、１－３Ａ類の頃である。

Ⅱ類はＳＥ517井戸出土土器がある。土師器小皿、杯、碗、黒色土器小皿、碗が出土した。土師器はヘラ切り底で小皿の口径9.5～10.5cm、器高1.2～1.6cm。杯は口径11.1～12.1cm、器高2.7～2.8cm。黒色土器碗は黒色土器Ａで土師器碗と器形的には何ら変わらない。器壁は薄く、高い高台を貼り付け、全体的に均整がとれている。

大宰府ＳＫ802、及び五条１－３Ａの頃と見られる。

Ⅲ類はＳＥ507井戸出土土器があげられる。土師器小皿、高台付小皿、杯、碗、鉢、黒色土器小皿が出土した。土師器はヘラ切り底で小皿の口径9.5～10.4cm、器高1.0～1.9cm。杯11.7～13.1cm、器高3.1～3.4cm。小皿は器高、口径とも変わりはないが、杯が大型化しておりＳＥ517と区別した。碗は口縁部を玉縁状に仕上げ、ヘラミガキを行っている。尾崎利田遺跡ではこの時期までは土師器はヘラ切り底であり、瓦器、白磁の確実な共伴例はない。

大宰府ＳＤ1330溝及び五条１－３Ｂ類の頃と見られる。

Ⅳ類はＳＥ513井戸出土遺物があげられる。黒色土器碗、瓦器碗、白磁が出土した。瓦器碗は口径16.2～17.0cm、器高5.5～6.5cm、高台径6.6～7.4cm。胎土は良く精製され、体部内外面とも丁寧にヘラミガキを施している。内面に重ね焼の跡が残っているものがある。Ⅳ類は尾崎利田遺跡で瓦器碗が出土する頃であり、白磁も共伴する。

大宰府ＳＫ1204、五条１－３Ｃ～１－４類の頃と見られる。

Ⅴ類はＳＥ604井戸出土遺物があげられる。土師器小皿、碗、鍋、瓦器小皿、杯、碗、白磁碗と多くの器種がそろう。土師器は糸切り底、小皿は口径9.1～10.2cm、器高1.0～1.8cm。瓦器碗は口径17.2～17.6cm、器高5.9～6.6cmである。瓦器碗はヘラミガキを施すがⅣ類に比べ仕上げが粗雑となる。磁器は白磁碗が多く出土するが、青磁碗は共伴しない。

大宰府ＳＫ1204、五条Ⅱ－１類の頃と見られる。

Ⅵ類はＳＤ605溝、ＳＰ501土壙墓があげられる。ＳＤ605は土師器小皿、杯、鍋、瓦器碗、白磁碗、皿、青磁碗、皿などが出土している。土師器小皿の口径8.6～9.7cm、器高1.2～1.6cm。

5点の内1点はヘラ切り底、他は糸切り底である。坏は4点の内1点が口径12.6cm、器高 2.9cm、他は口径15.5～16.4cm、器高3.3～3.5cm、ヘラ切り底と糸切り底がある。ＳＰ501の土師器小皿は糸切り底で口径8.7～9cm、器高1.3～1.6cm。瓦器碗に糸切り痕が残っている。土師器小皿は一段と小形となる反面、坏は最大となる。白磁、青磁が多く出土するようになる。

大宰府ＳＫ1085、五条II－1～II－2類の頃である。

以上尾崎利田遺跡出土遺物のうち10世紀後半～13世紀前半のものについてＩ～VI類に分類し、大宰府史跡や五条遺跡との遺物の関連を見てきたが、大宰府史跡や五条遺跡の成果を充分に理解できないままに分類したため、今後改めなければならない点もあろう。

さてこのように多くの遺構、遺物を出土した尾崎利田遺跡は「神崎荘」の西端に位置している。尾崎利田遺跡がどのような集落であったかは今後の課題であるが、遺跡の主体となる11世紀の初めに書かれた藤原道長の日記「御堂関白記」の長和4年（1015） 7月15日の条に、入宋僧念救が神埼御荘司豊嶋方人について上京し、また宋に渡るため九州へ下向の時も方人とともにしたという記事がある。このことからすでに神崎荘に宋船の出入りがあったことが伺われ、又「神埼御庄」という記載よりこの頃には皇室領荘園であったことが知られる。又文永、弘安の役後、神崎荘は蒙古合戦恩賞地として配分されるが、弘安8年に神崎庄内小崎郷が河野通有に配分されている。小崎郷とは尾崎の事であろう。

このように尾崎利田遺跡の所在する神崎荘は皇室領荘園でもあり、文献に記されていることが多く、今後この点からも尾崎利田遺跡の性格を明らかにする必要がある。

（註）

(1)「新郷土第33巻2号－グラビア、耳つきの壺」1980年2月佐賀県文化課発行で奈良時代の壺として紹介しているが、その後検討の結果、平安時代前期に属するものとする方が適当と判断した。

(2)木下之治「西山遺跡」佐賀県文化財調査報告書第28集　佐賀県教育委員会　1974

(3)木下巧「戊遺跡」佐賀県文化財調査報告書第36集　佐賀県教育委員会　1976

(4)七田忠昭「下中杖遺跡」九州史学会発表資料　1978

(5)九州歴史資料館「大宰府史跡－昭和51年度調査報告－」　1977
九州歴史資料館「大宰府史跡－昭和52年度調査報告－」　1978
九州歴史資料館「大宰府史跡－昭和53年度調査報告－」　1979

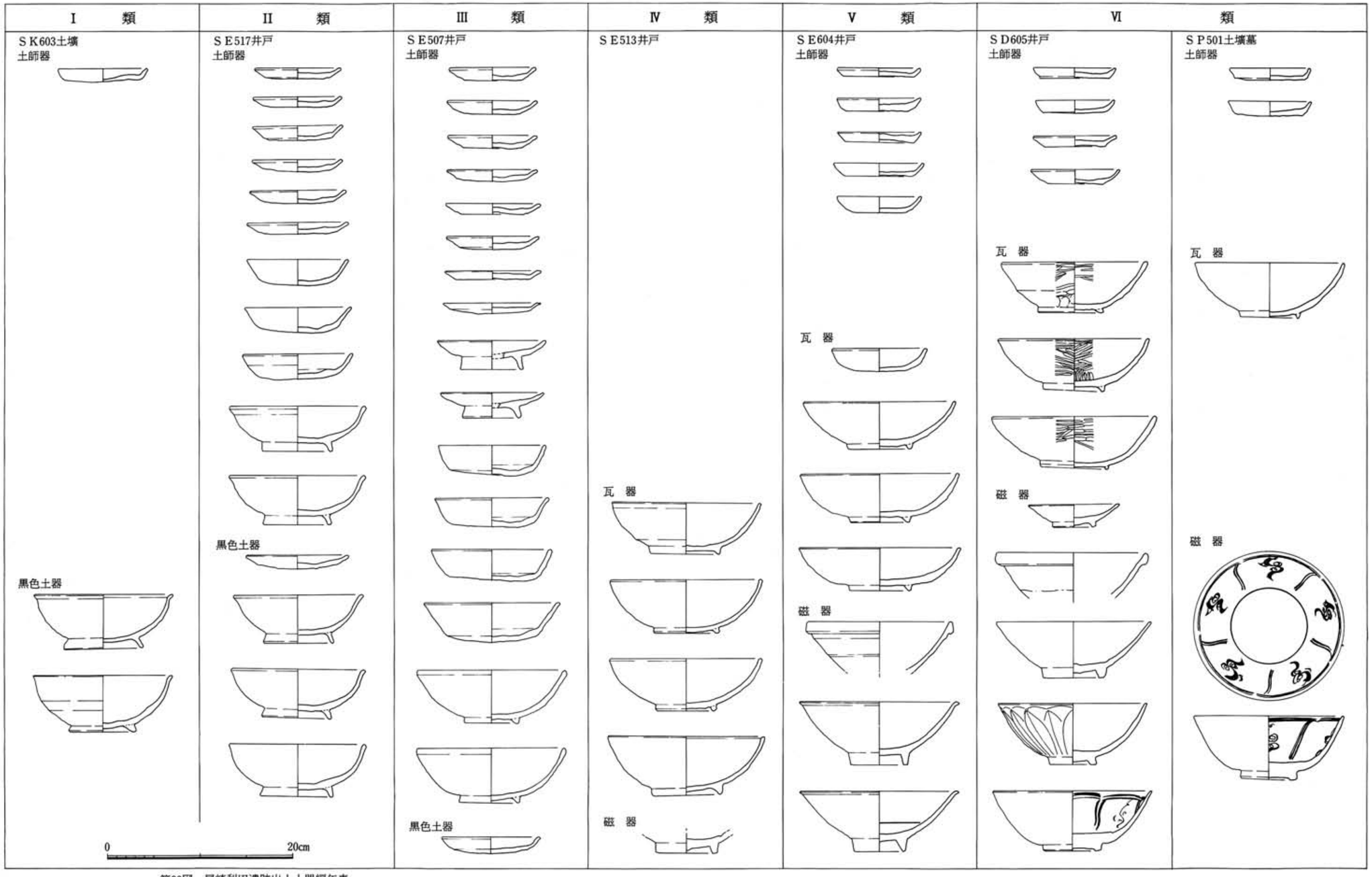
(6)福岡県教育委員会「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集　1975
福岡県教育委員会「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第3集　1976
福岡県教育委員会「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第6集　1977

福岡県教育委員会「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第７集　1977
福岡県教育委員会「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第８集　1978

参考文献

佐賀県史編纂委員会「佐賀県史」上巻　1978
神埼町史編纂委員会「神埼町史」　1972
横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集４　1978
森田勉「九州地方の瓦器椀について」考古学雑誌第59巻第２号　1974
瀬野精一郎「肥前國神埼荘史料」吉川弘文館　1975

なお平安、鎌倉時代の出土遺物については九州歴史資料館横田賢次郎、森田勉両氏より御教示を得た。記して感謝したい。

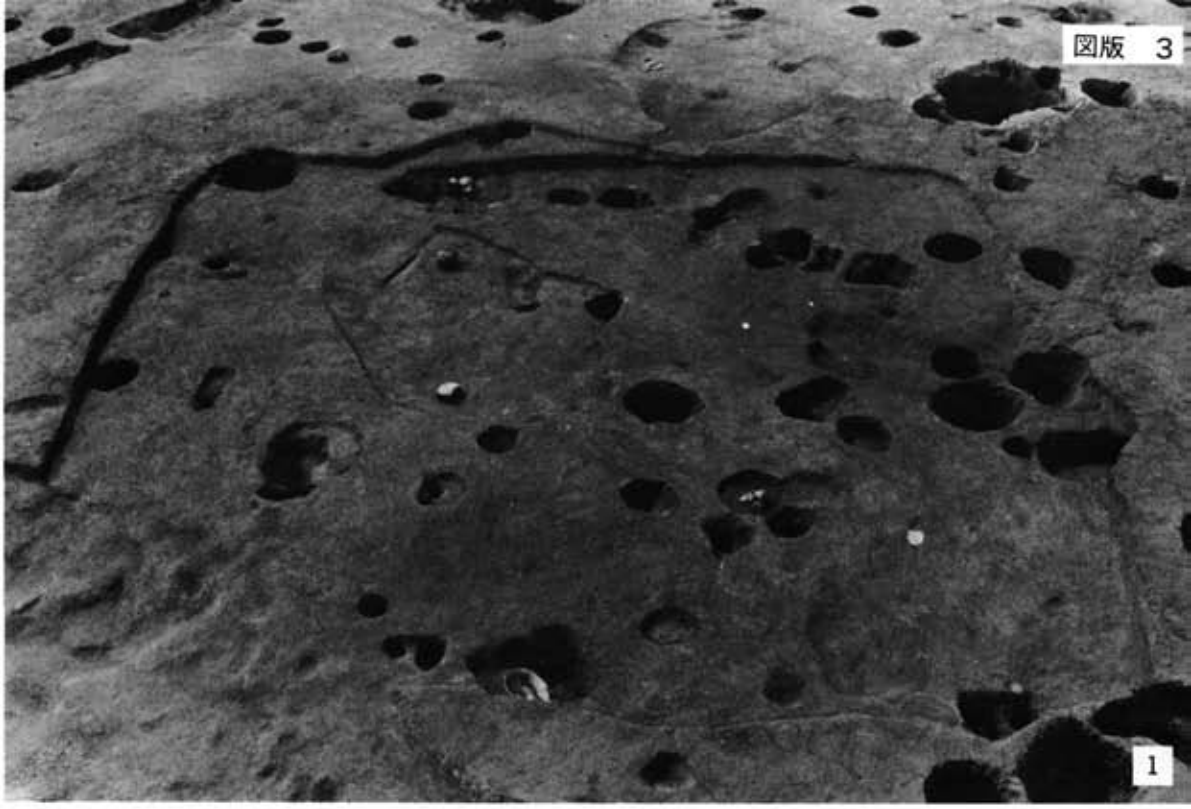


第39図　尾崎利田遺跡出土土器編年表

図　　版

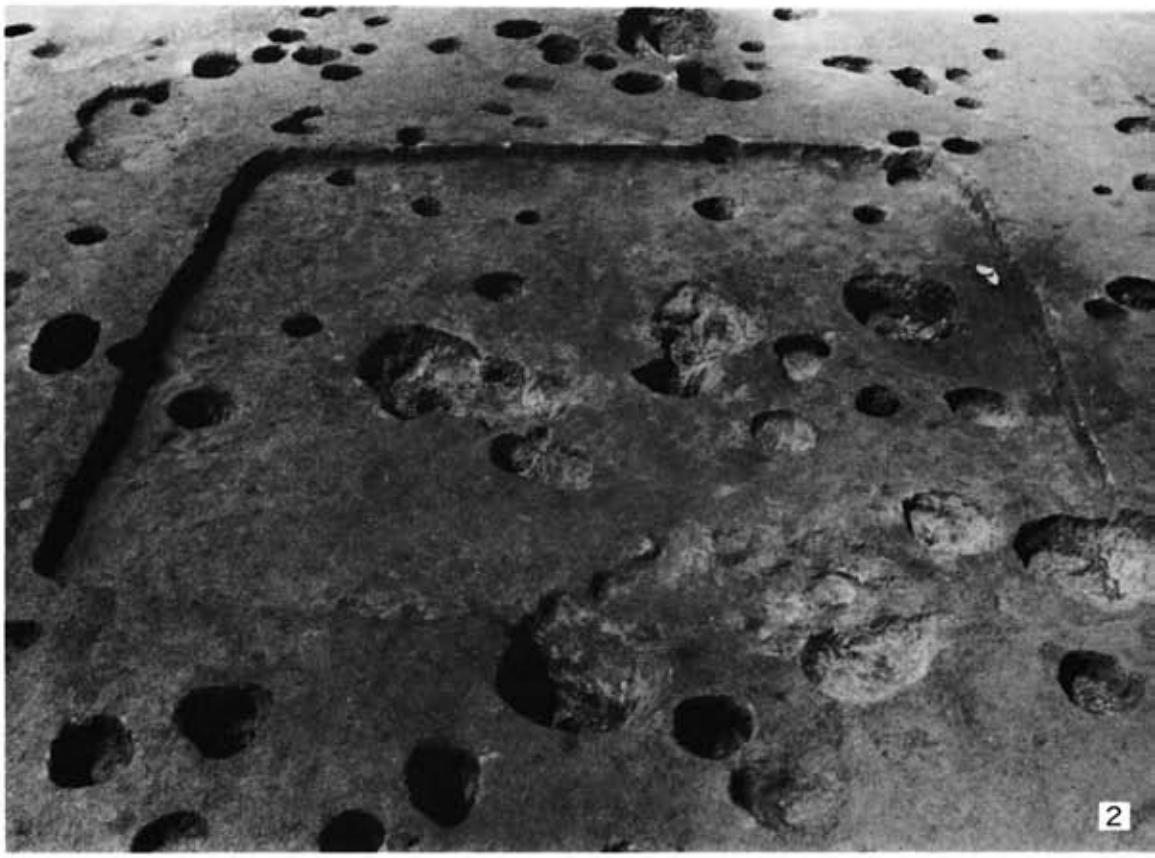
1　V区全景（北側より）　　2　V区全景（西側より）

1　VI区全景（北側より）　　2　VI区全景（西側より）



1　ＳＢ502住居跡　　2　ＳＢ503住居跡

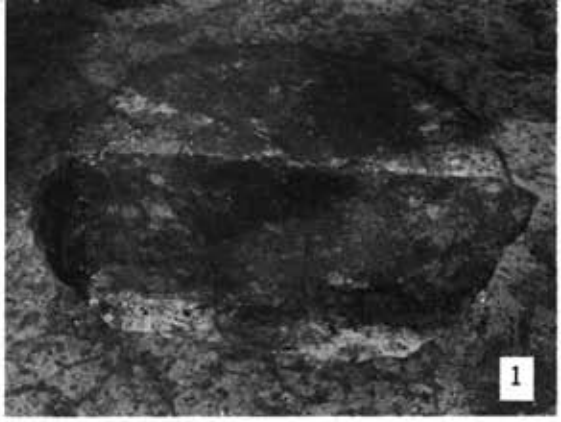
1　ＳＢ504住居跡　　2　ＳＢ505住居跡



1　ＳＢ506住居跡　　2　ＳＢ507住居跡

図版 6

1　ＳＢ601掘立柱建物跡　　2　ＳＢ602掘立柱建物跡

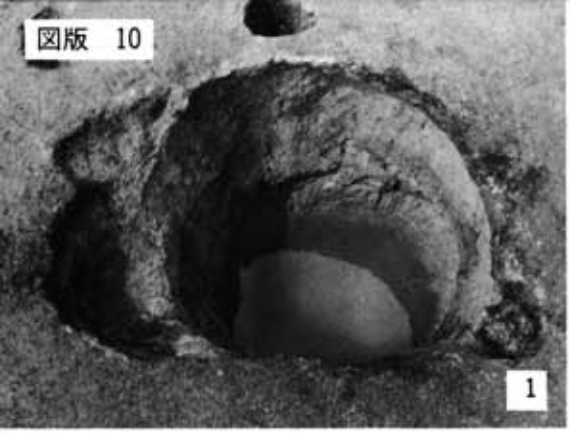


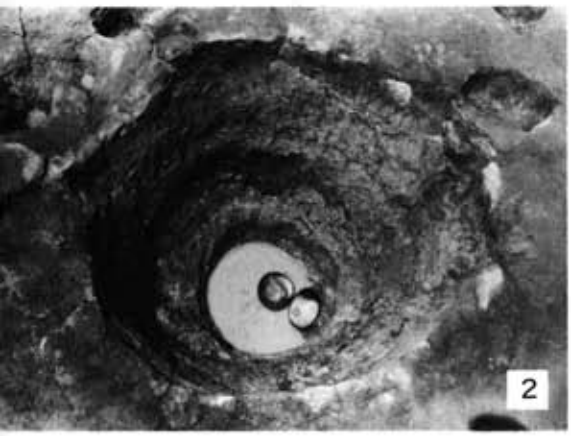
1 SB601 P 1　2 SB601 P 2　3 SB601 P7　4 SB601 P 8
5 SB601 P 4　6 SB601 P 6　7 SB602 P 2　8 SB602 P 6

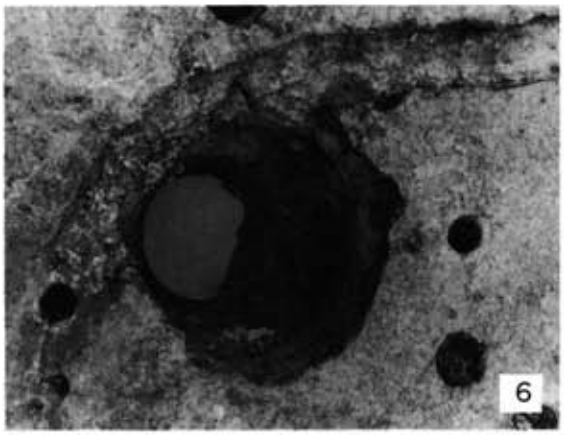
1　S D604・605溝
2　S D605溝遺物出土状況
3　S D601溝

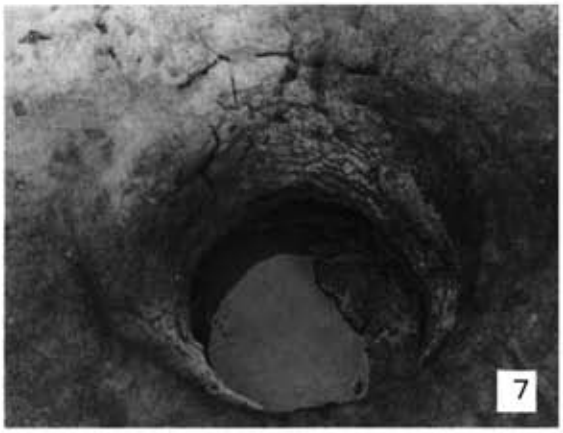
1　ＳＥ506井　戸　　2　ＳＥ509・510井　戸

図版 10





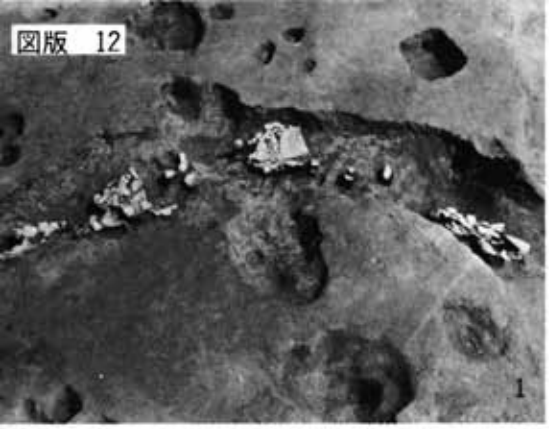


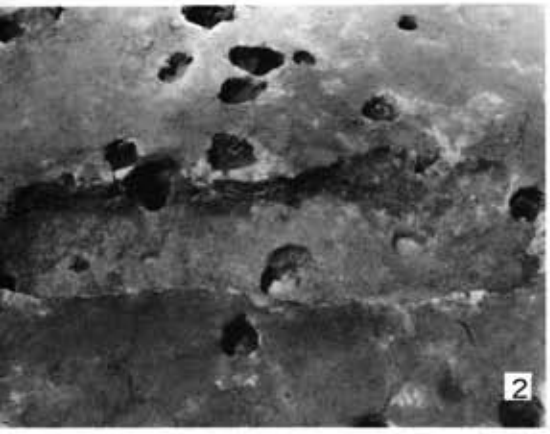


1 S E511井 戸　2 S E513井 戸　3 S E514井 戸　4 S E515井 戸
5 S E519井 戸　6 S E523井 戸　7 S E530井 戸　8 S E603井 戸

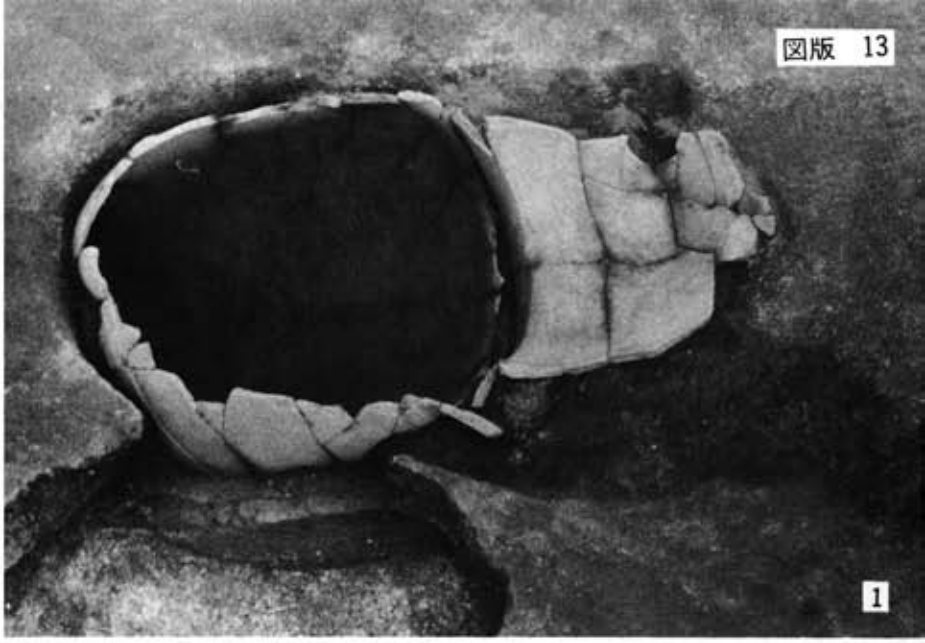
1　ＳＥ604井　戸
2　ＳＥ605井　戸
3　ＳＥ608・609井　戸

図版 12

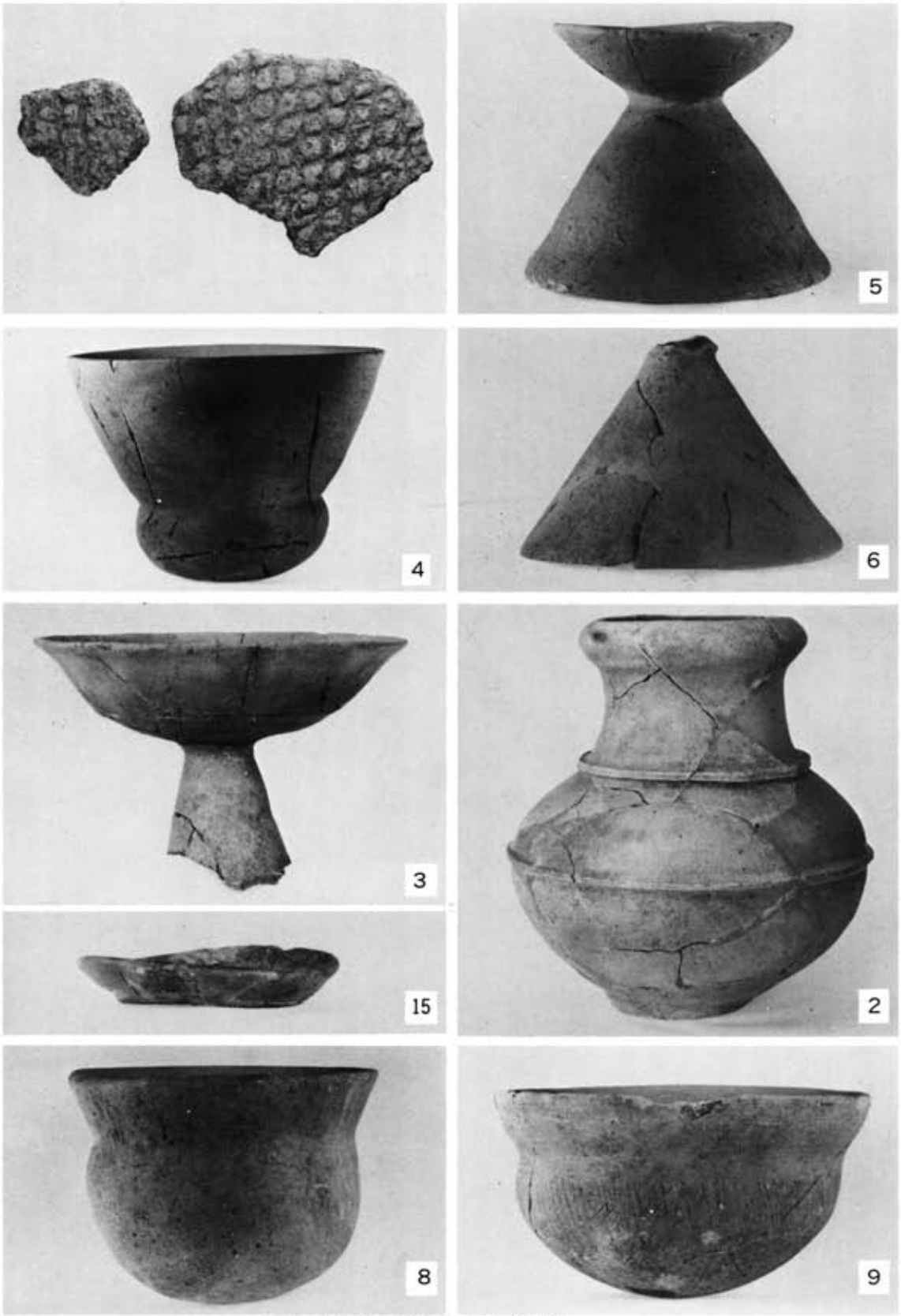




1　ＳＫ503土　壙　　2　ＳＫ509土　壙　　3　ＳＫ520土　壙　　4　ＳＫ526土　壙
5　ＳＫ531土　壙　　6　ＳＫ532土　壙　　7　ＳＫ603土　壙　　8　ＳＫ603土　壙

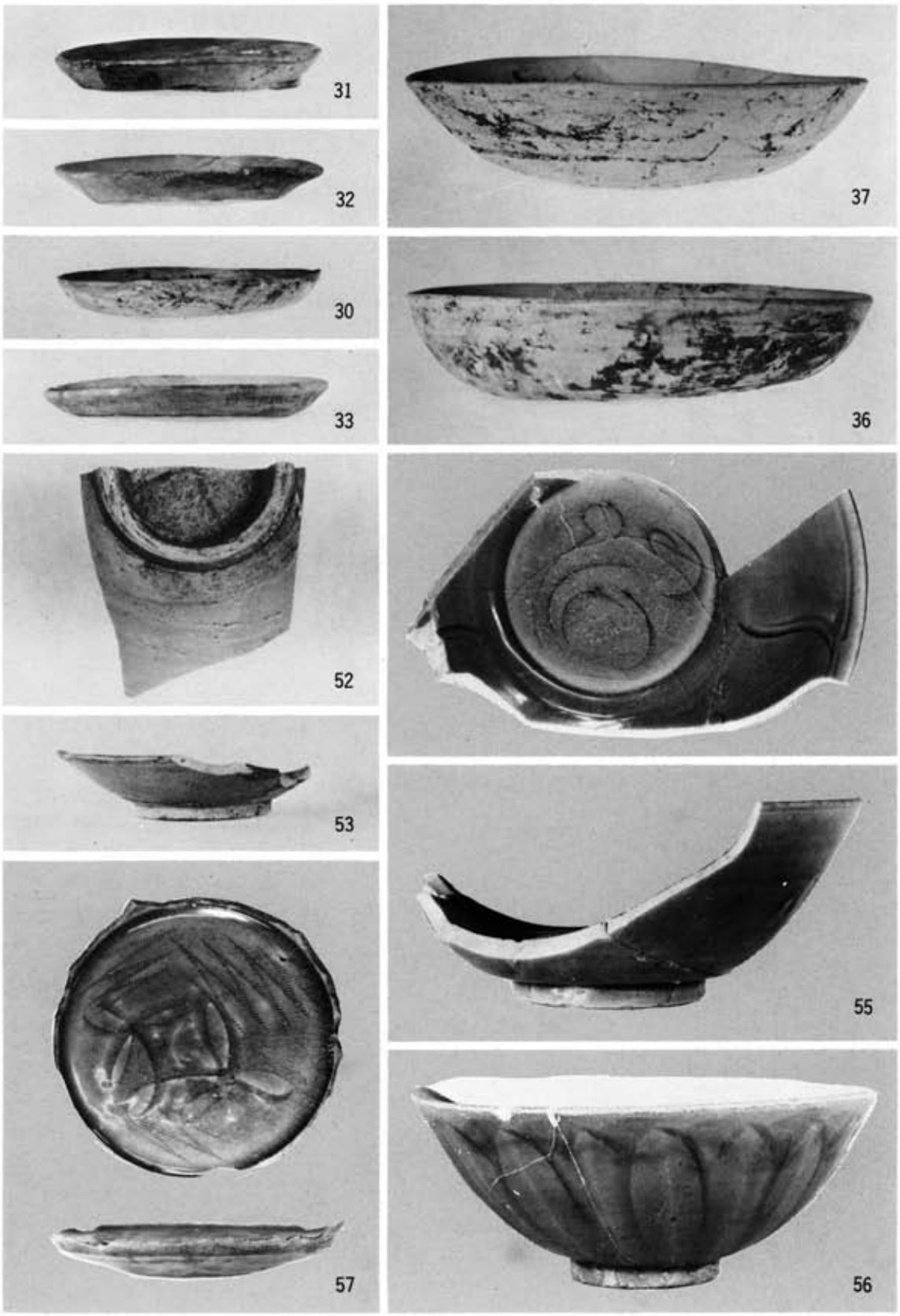


1　ＳＪ501甕棺墓
2　ＳＪ502甕棺墓
3　ＳＰ501土壙墓

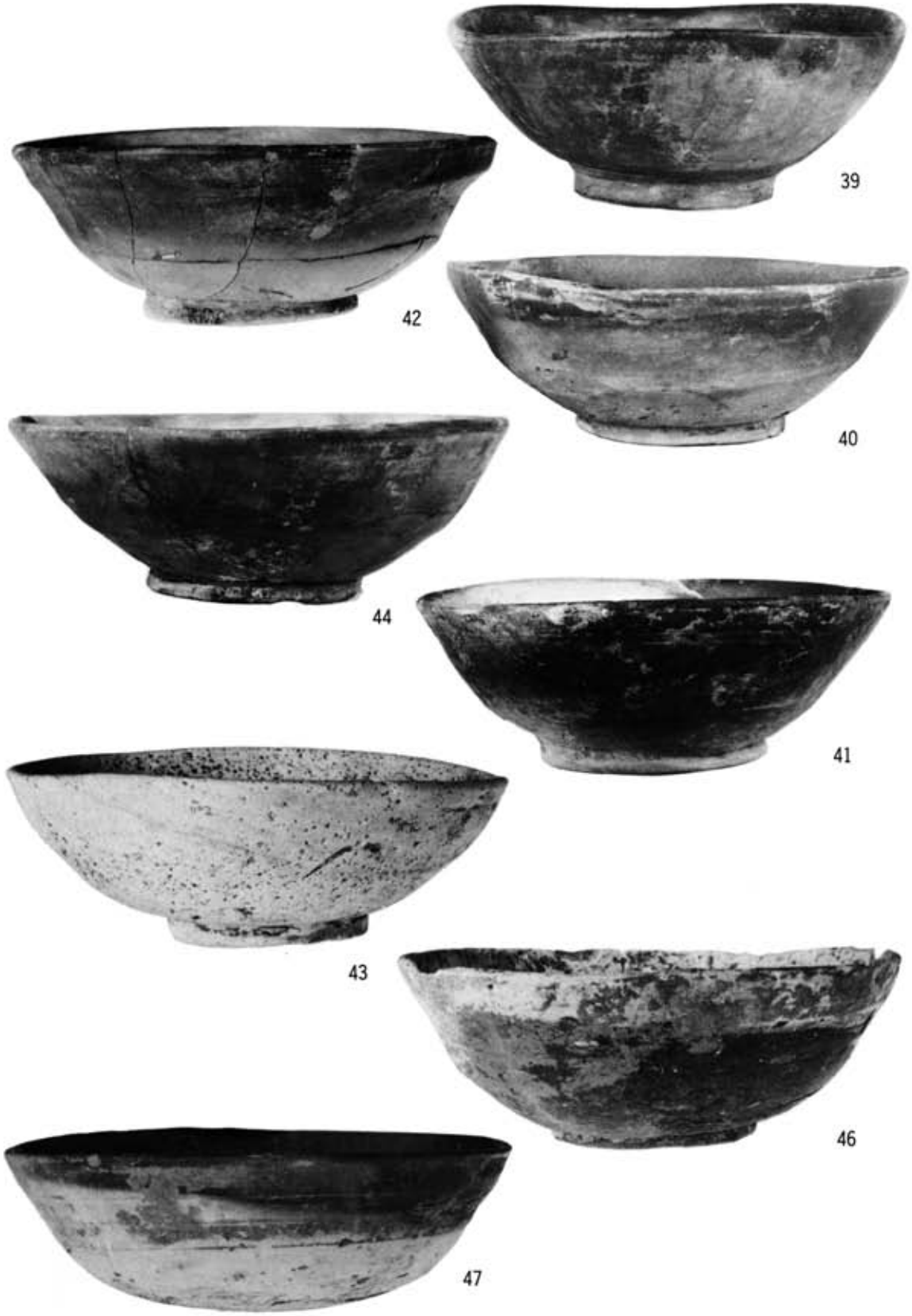


S B502・503・504・506住居跡出土土器（2は¼、3は⅓、他は½）
S B502……3～6　S B504……2　S B506……8・9

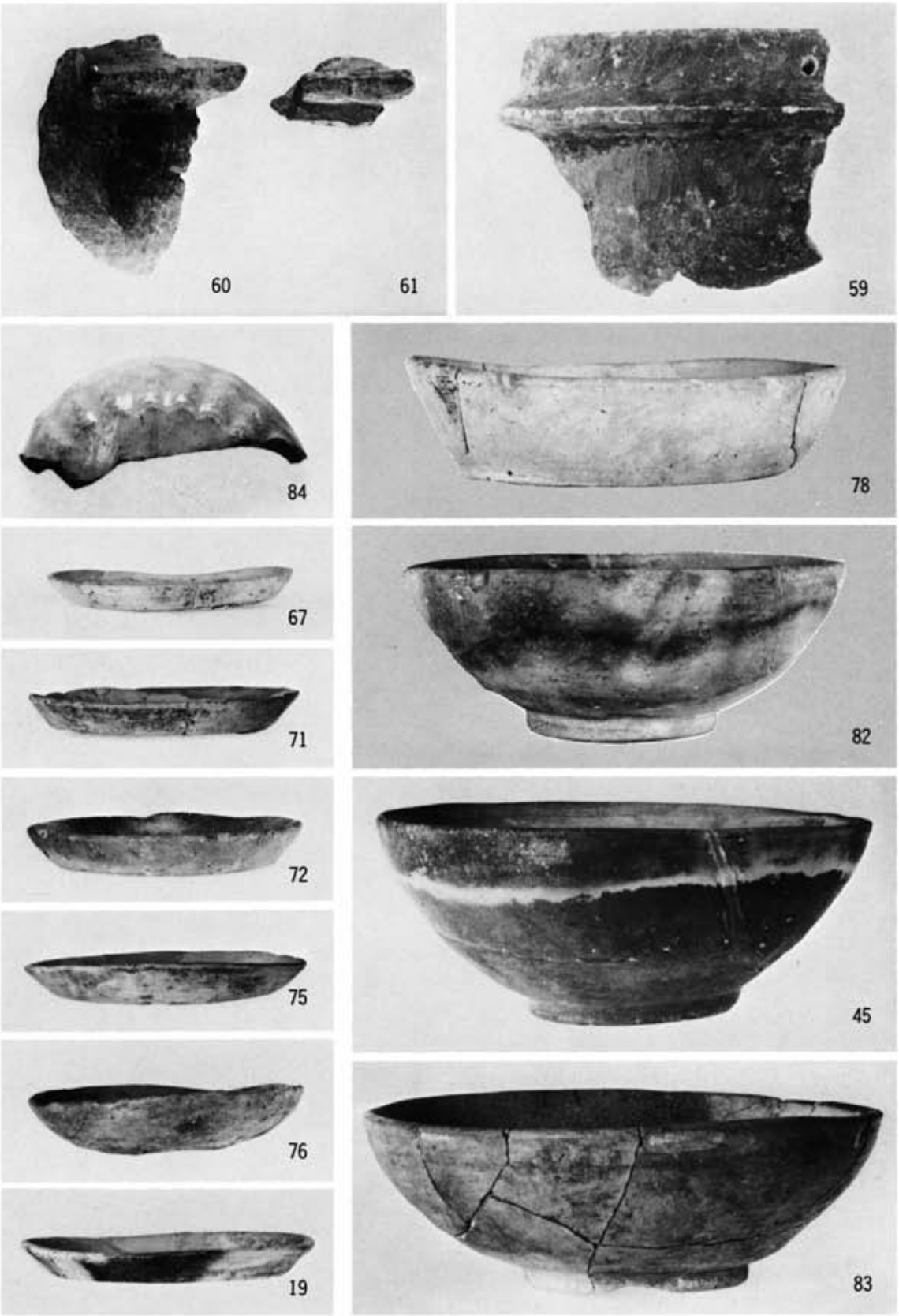
ＳＢ507住居跡　ＳＤ501・602・603・604・605溝出土土器・磁器（½）
ＳＢ507……12・13　ＳＤ501……14　ＳＤ601……18・22～24　ＳＤ603……20
ＳＤ604……16・17・25・29　ＳＤ605……65



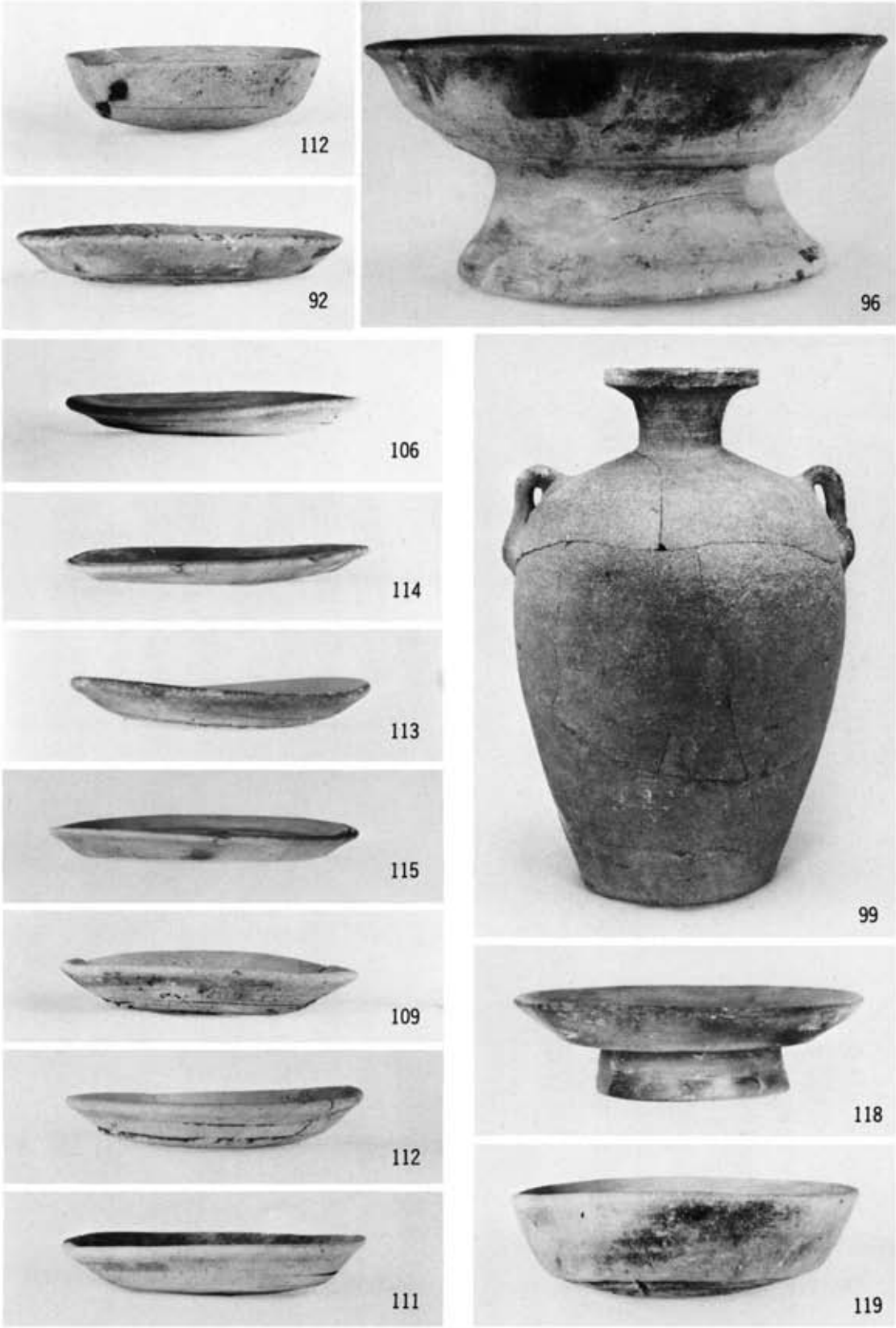
S D605溝出土土器・磁器(½)



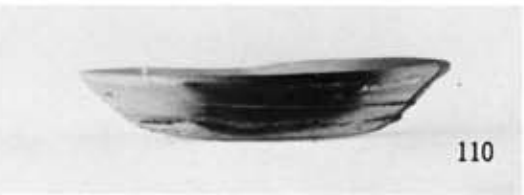
S D605溝出土土器（½）

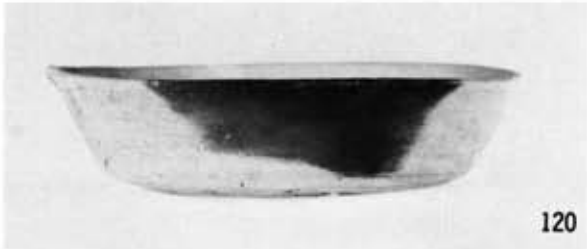


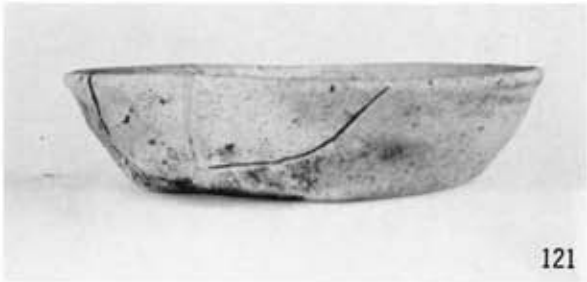
S D605・606・608溝出土土器・磁器・滑石製品（84は1/1・他は1/2）
S D605……59～61　S D608は……19他はS D606

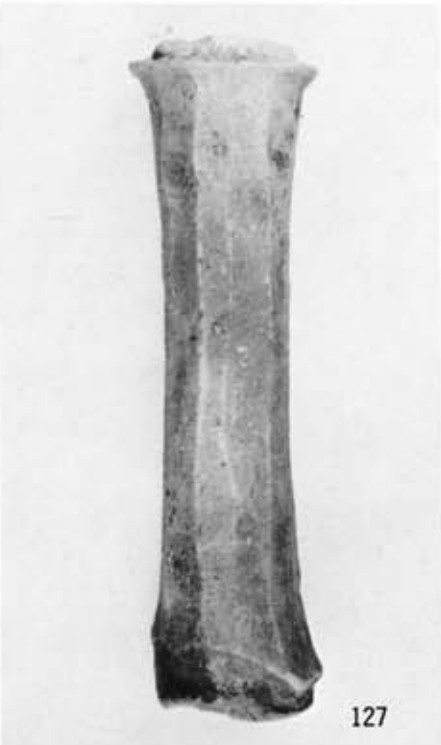


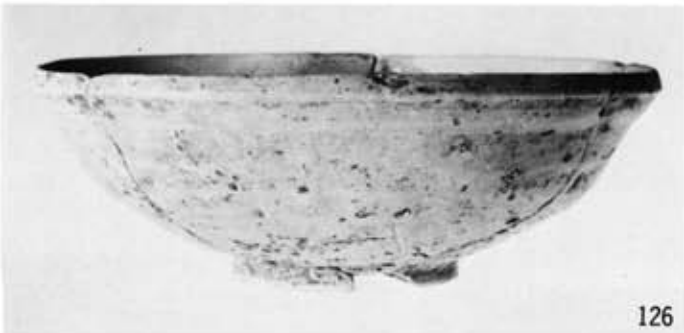
S E505・506・507井戸出土土器（99は⅓・他は½）
S E505……96　S E506……99　他はS E507



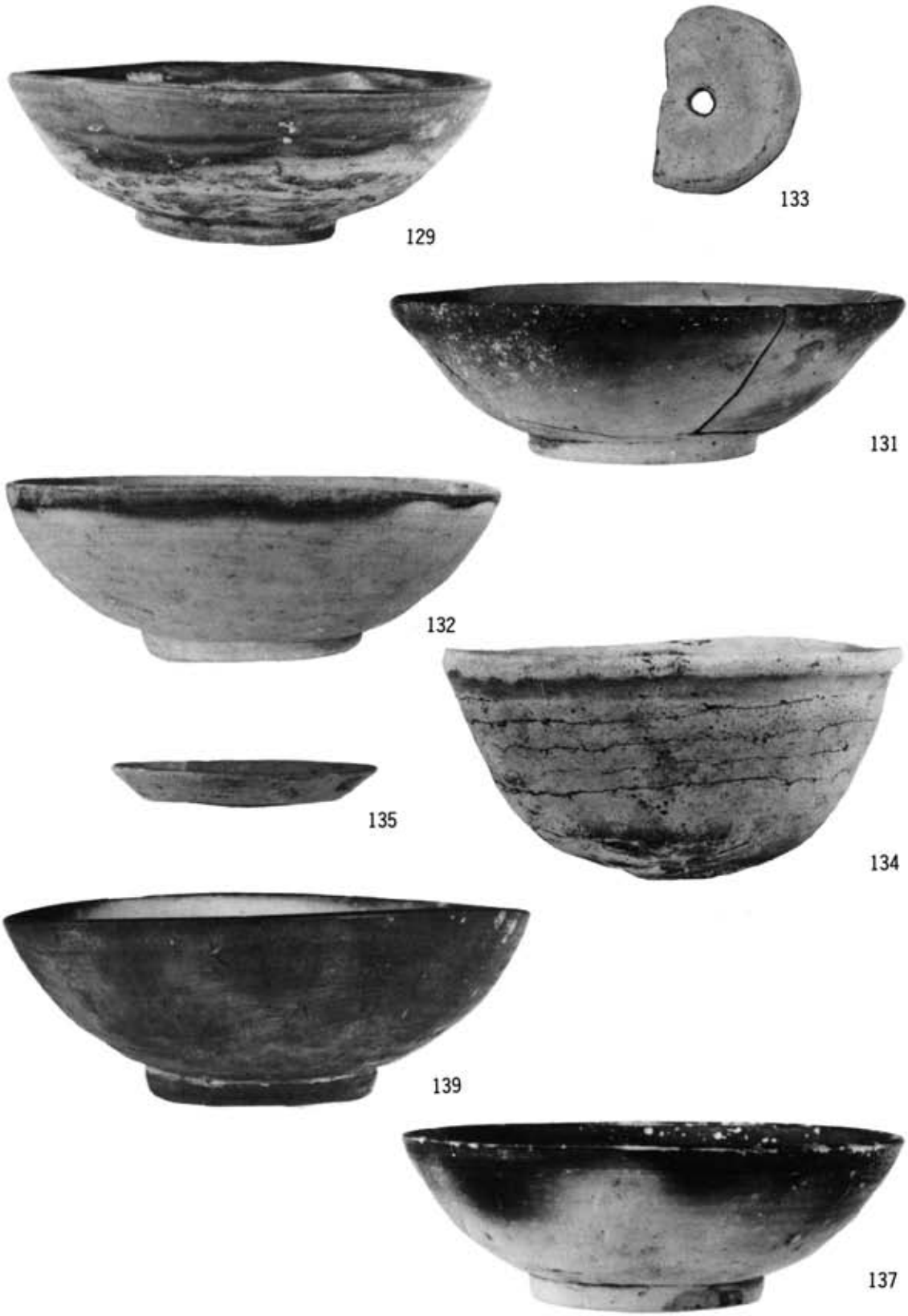




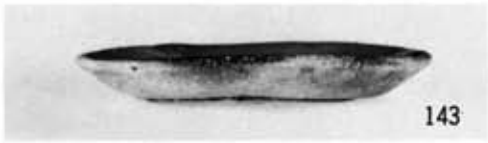




S E 507井戸出土土器（½）



S E508・509・510・512・513井戸出土土器（134は⅓他は½）
S E508……129　S E509……131～133　S E510……134　S E512……135
S E513……137・139

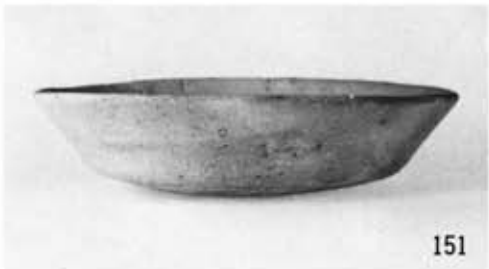

143

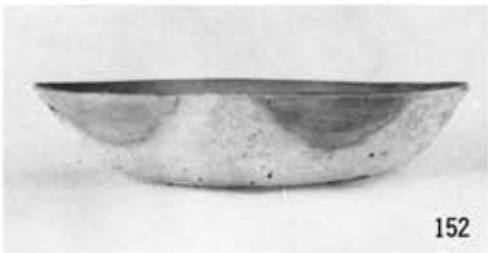
144

146

147

150


151


152

153

155

158

160

157

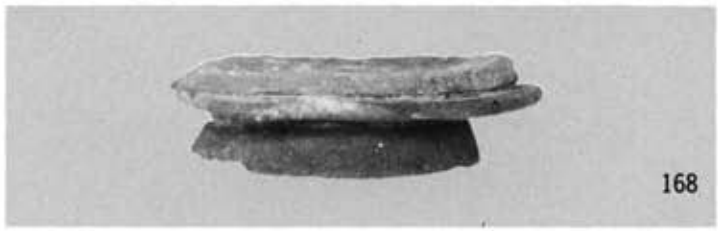
156

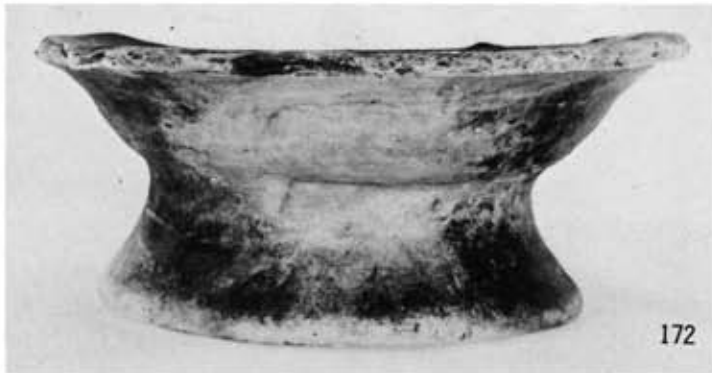
S E517井戸出土土器（½）

166

163

173


168


172

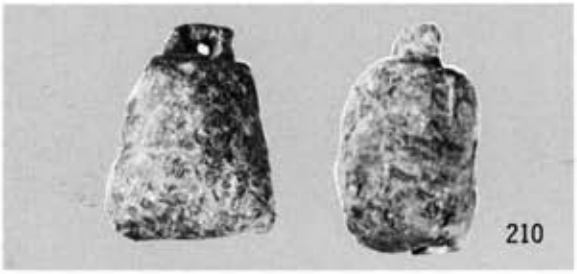
177

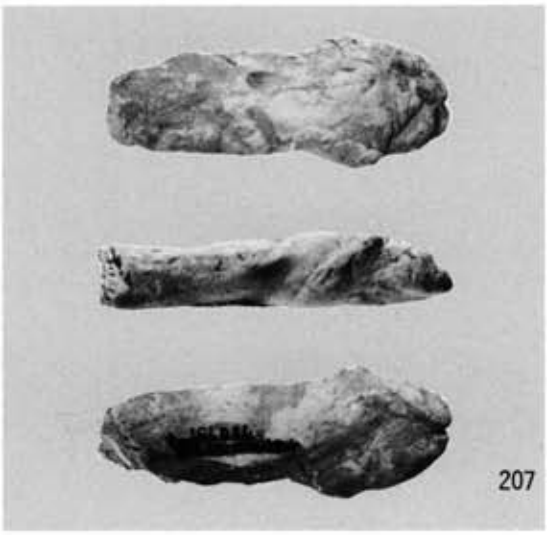
176

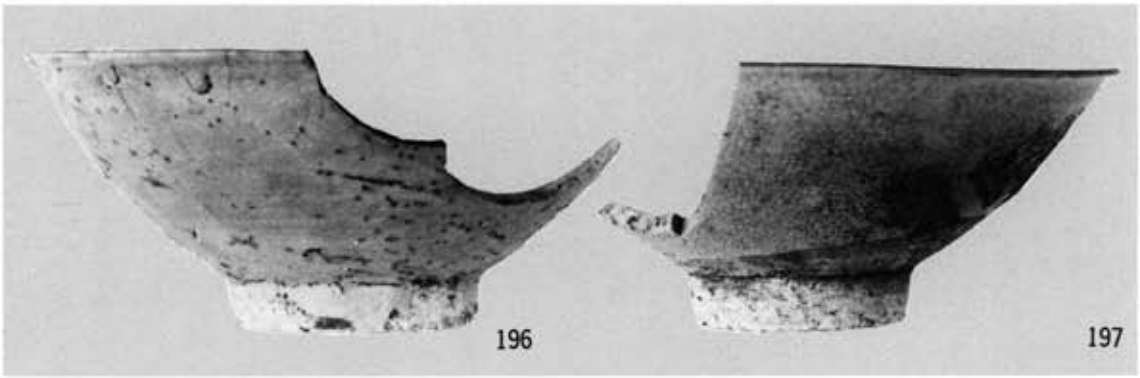
181

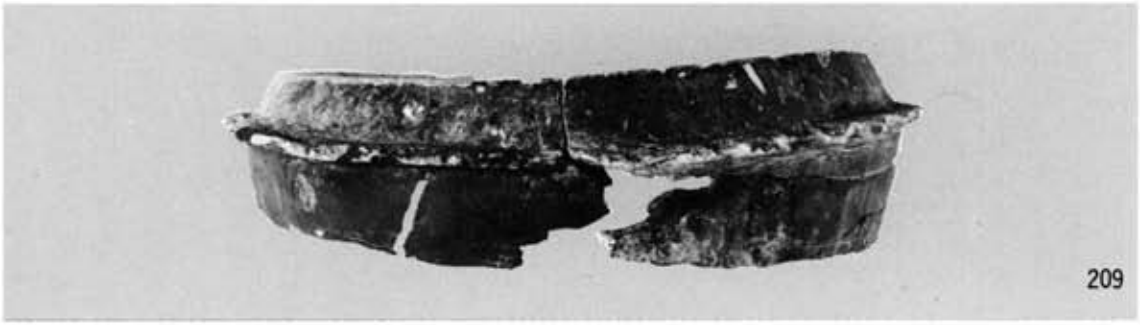
183

S E 520・526・527・532井戸出土土器（181・183は¼、他は½）
S E 520……163　S E 526……166・168・172・173　S E 527……176・177
S E 532……181・183

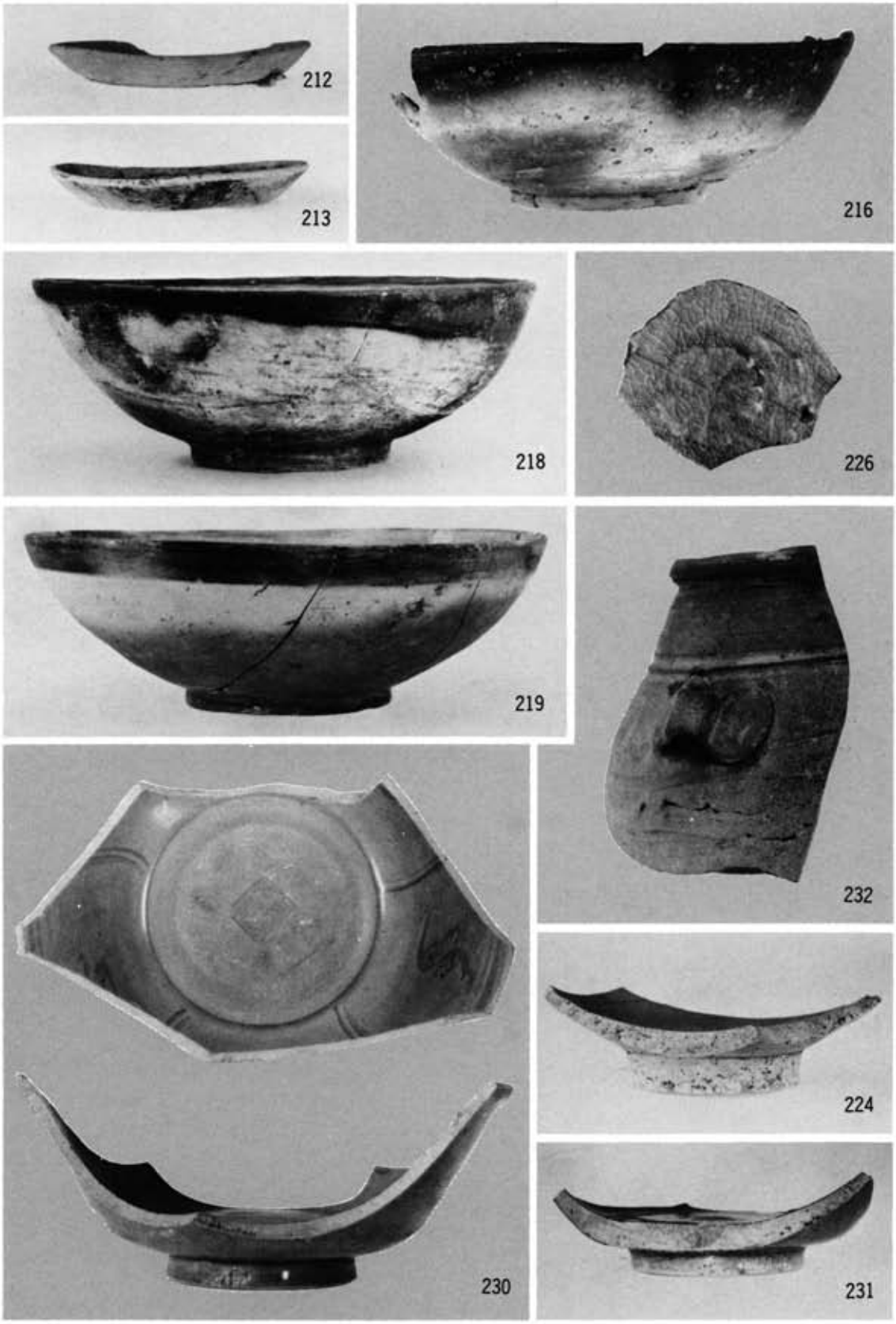




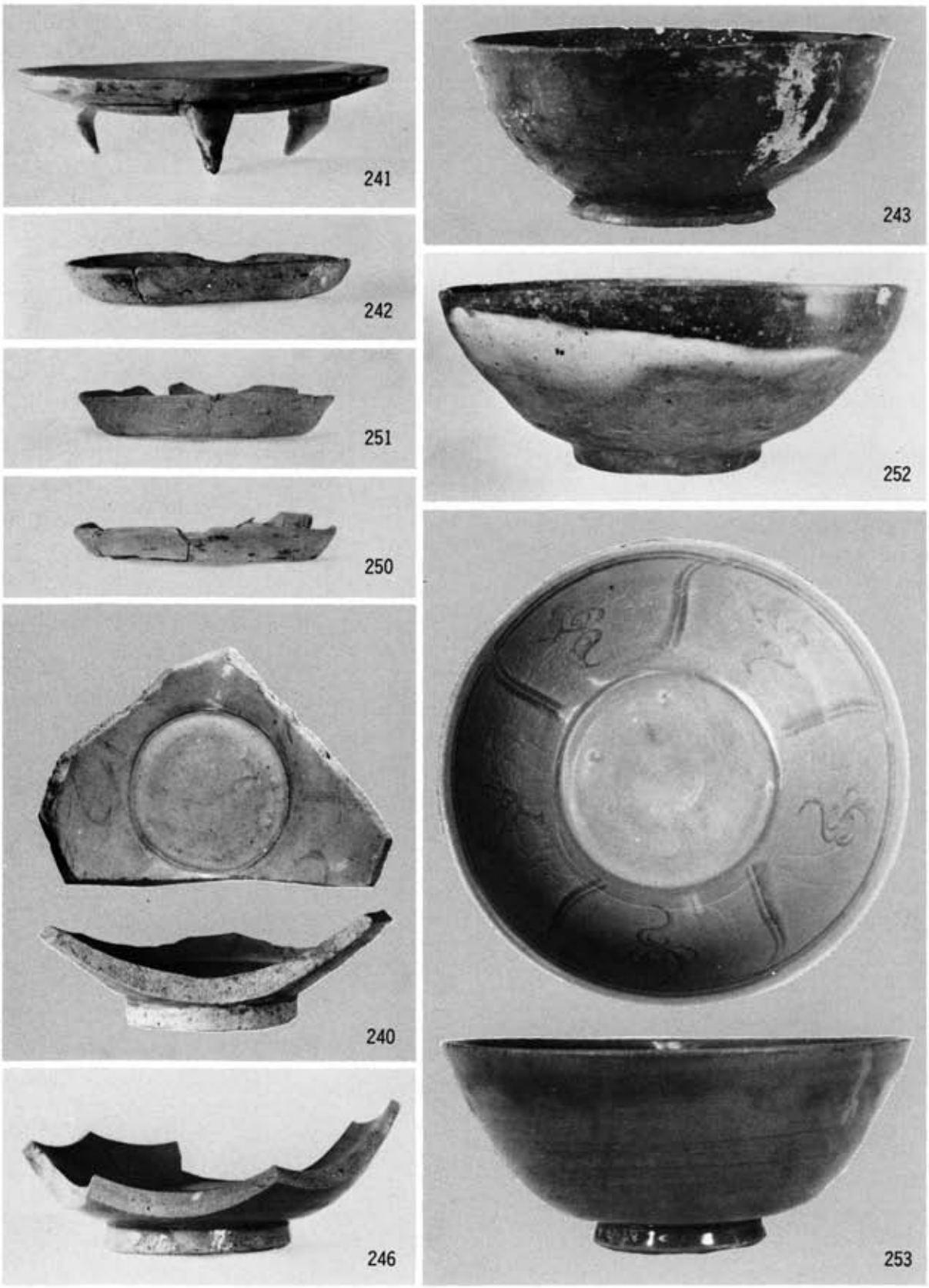




ＳＥ604井戸出土土器・磁器・滑石製品（204・207は1/1・209は1/3・他は1/2）



S E605・608・609井戸出土土器・陶磁器（226は1/1・他は1/2）
S E605……212・213・216　S E608……218・219　他はS E609



S K514・520・603・608土壙、S P501土壙墓出土土器・磁器（½）
S K514……240・241　S K603……242・243　S K608……246　S P501……250～253

佐賀県文化財調査報告書第55集

尾崎利田遺跡

昭和55年3月31日

発行　佐賀県教育委員会
佐賀市城内一丁目

印刷　佐賀印刷社
佐賀市高木瀬町長瀬
大和工業団地☎(31)6171